

市民の声を施策に反映
まちづくりネットモニター
を実施しました



令和元年 12 月 20 日
(ネットモニターに関すること)
郡山市政策開発部広聴広報課
担当：上田 利実
TEL：924-2061
※ 調査内容については各担当まで。

SDGs ターゲット 16.6 「全ての人々に説明責任のある包摂的な制度を構築する」

まちづくりネットモニター（第 5、7、8 回調査）の調査結果をお知らせします。

○調査概要（詳細は別紙のとおりです。）

・第 5 回(6 月 17 日(月)～26 日(水))

テーマ	第三次郡山市食育推進計画について
目的	市民の健康に対する意識や実態を把握するとともに、本計画に基づく数値目標の達成状況の確認や評価等の参考にさせていただくため
考察	「食育」という言葉を知らない方が各年代で一定程度いること、さらに前回調査結果と大きな差がみられたことから、全年代を対象にさらなる周知の必要性が伺える。
回答者数/率	331 名(男性 152 名 女性 179 名) 91.9%
担当	保健福祉部保健所地域保健課 渡辺 恵 TEL：924-2900

・第 7 回(7 月 17 日(水)～26 日(金))

テーマ	郡山の農林水産物について
目的	消費者である市民の皆様のニーズや市の農林水産物に対する意識を把握し、今後の市の施策の参考とさせていただくため
考察	「あさか舞」「阿久津曲がりねぎ」「鯉」などブランド力がある産品として認識されている。今後も、市外だけでなく市内へも並行して P R を進めていく。
回答者数/率	315 名(男性 142 名 女性 173 名) 87.5%
担当	農林部園芸畜産振興課 塩田 洋輔 TEL：924-3761

・第 8 回(8 月 1 日(木)～10 日(土))

テーマ	放射線健康管理について
目的	本市の放射線の健康影響に対する取り組みについて、市民の皆様の御意見を参考とさせていただくため
考察	「将来」「子ども」「不安・心配」「風評」という言葉が多く見られた。長期的な健康管理体制の継続により、市民の放射線への不安解消を図っていくことが必要である。
回答者数/率	326 名(男性 151 名 女性 175 名) 90.6%
担当	保健福祉部放射線健康管理課 古内 伸明 TEL：924-0201

<まちづくりネットモニター>

郡山市では、市民の皆さまの意見等をお聞きする取り組みとして、様々な機会や方法等により実施しており、その一つとして、市民モニターの方々にご協力をいただきインターネットを活用した市政アンケートを実施しています。(モニター数：360 名(男性 159 名、女性 201 名))
今回は、2019 年度第 5、7、8 回目の調査となります。

2019年度まちづくりネットモニター第5回調査結果 テーマ「第三次郡山市食育推進計画について」

「食育」とは、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置づけるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てることです。

本市においては、市民一人ひとりが「食」に関する正しい知識を身に付け、生涯にわたる健全な食生活の実践ができることを目的に「第三次郡山市食育推進計画」（2018～2022年度）を定め数値目標を設定しております。

今回のネットモニターでは、市民の健康に対する意識や実態を把握するとともに、本計画に基づく数値目標の達成状況の確認や評価等の参考にさせていただくためアンケートを実施いたしましたので、その結果についてお知らせします。

（地域保健課）

調査概要

- ・調査期間 令和元年6月17日(月)～6月26日(水) (10日間)
- ・回答方法 専用ウェブサイトから回答を送信する。
- ・モニター数 360名 (男性 159名 女性 201名)
- ・回答者数 331名 (男性 152名 女性 179名)
- ・回答率 91.9%

【分析】

○回答者内訳（人）

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	全体
男性	4	5	15	32	30	21	38	7	152
女性	3	9	45	70	36	14	2	0	179
合計	7	14	60	102	66	35	40	7	331

○食育の認知度

『食育』について、「知っている」と回答した方が75.8%（251人）、「知らない」が24.2%（80人）であった。

前回（H30年度、以下同じ）調査では「知っている」の回答が96.2%で、今回20.4ポイント減少した。

○バランスの良い食事（主食・主菜・副菜がそろった食事）について

バランスのよい食事が「1日2食以上」と回答した方が61.4%（203人）、「1日1食以下」が38.6%（128人）であった。

前回調査では「1日2食以上」の回答が51.5%で、今回9.9ポイント増加した。

○メタボリックシンドロームの予防・改善に取り組んでいる方

『メタボリックシンドローム』について「知っている」と回答した方が97.3%（322人）で、うち予防や改善に「取り組んでいる」が62.5%（201人）、「取り組んでいない」が36.6%（118人）であった。

前回調査では「取り組んでいる」の回答が63.8%で、今回1.3ポイント減少した。

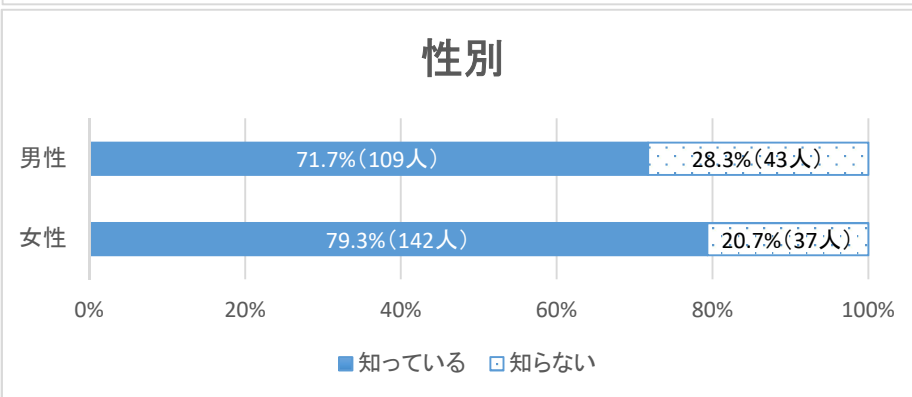
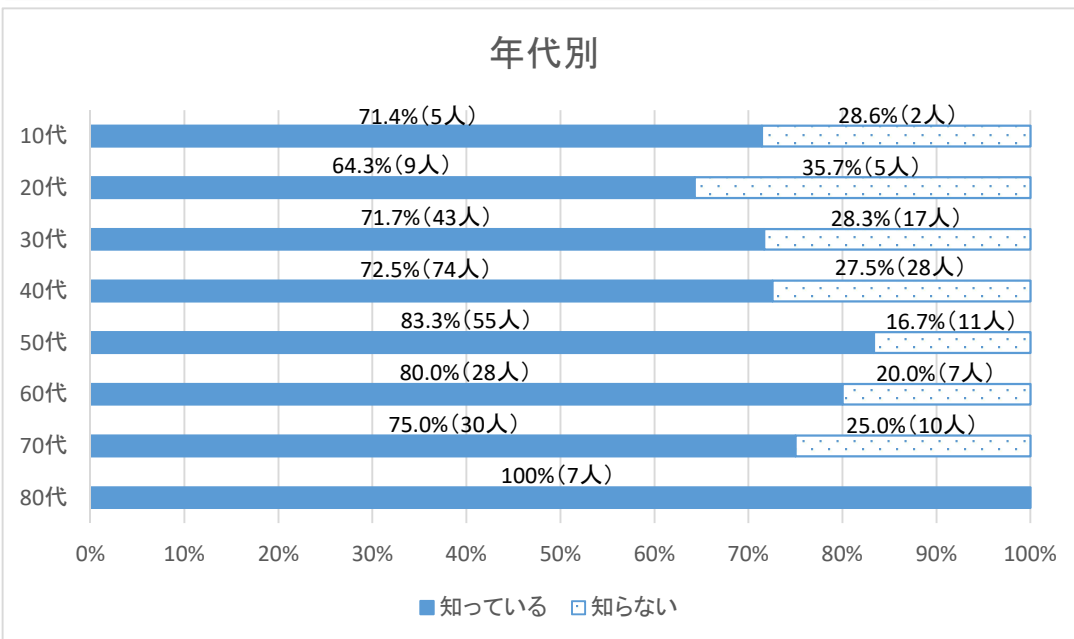
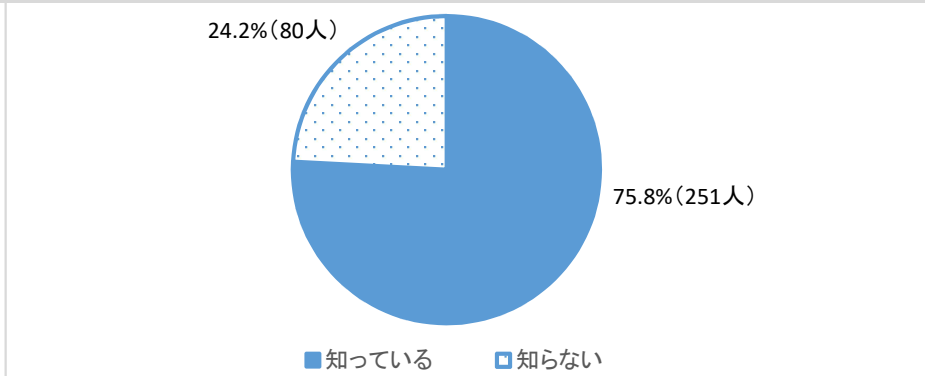
【考察】

- ・「食育」という言葉を知らない方が各年代で一定程度いること、さらに前回調査結果と大きな差がみられたことから、全年代を対象にさらなる周知の必要性が伺える。
- ・本アンケートは経年的に実施しているが、前年度の結果と比較すると、「食育の認知度」及び「適正体重の認識」について大幅な減少がみられた。これについては、本年度新たに専門用語への注釈を加えたことが一因と考えられるため、今後は用語理解を深めるための周知が必要である。
- ・「メタボリックシンドローム」の認知度は高いが、予防・改善に取り組んでいると回答した方は6割程度であった。そのことから、さらなる周知・啓発が必要であり、予防や改善のための取り組みにつながる様な働きかけが必要である。また、バランスの良い食事や栄養成分表示の活用、おやつとの与え方等の取り組み状況が6～7割程度であったことから、食生活の適正な取組みを促すための具体的な内容を周知することが必要である。

第1章 認知度について

問1 6月は「食育月間」、毎月19日は「食育の日」です。
「食育」という言葉をご存知ですか？（1つ選択）

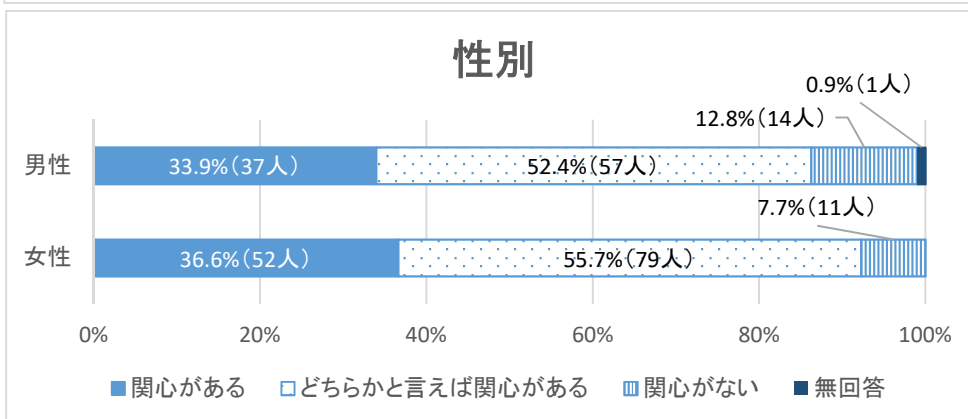
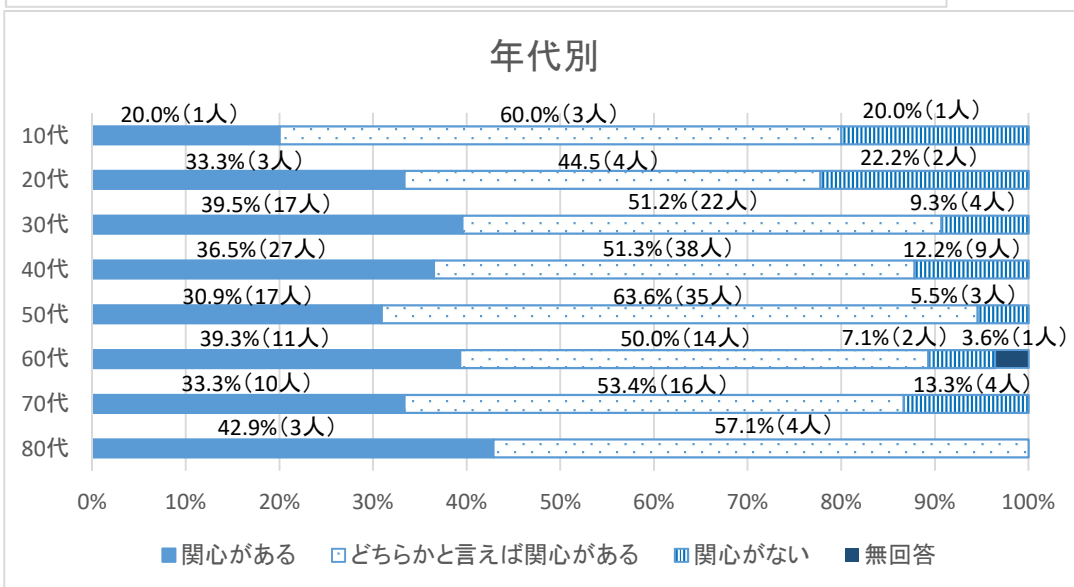
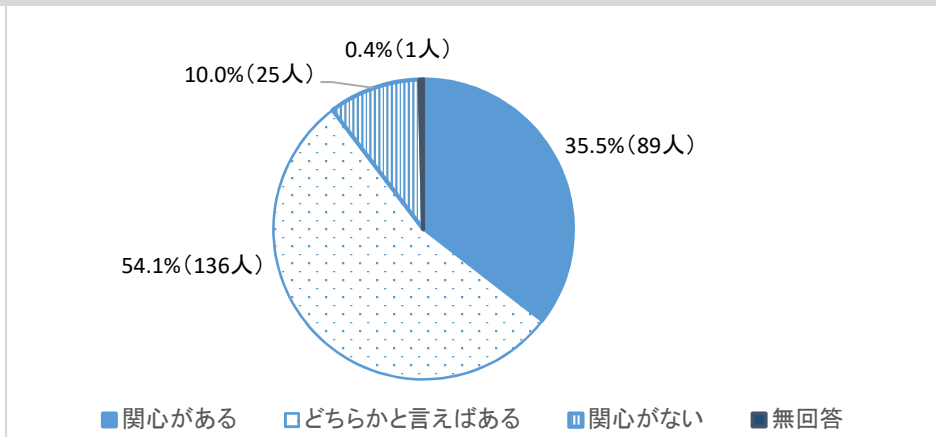
（回答者：331人）



「食育」の認知度について、全体の75.8%が「知っている」と回答した。
年代別では、80代の100%が最も高く、10～70代では約20～30%の方が「知らない」と回答した。中でも10～40代の若い世代での認知度が低い。
性別では、男性の認知度が女性より7.7ポイント高い。
前回調査では「知っている」の回答が96.2%で、今回20.4ポイント減少した。
今回調査で設問に「食育の日・食育月間」の文言を記載したため、「知っている」と回答した方が減少したと考えられる。

問2 問1で「知っている」を選択した方にお尋ねします。
「食育」に関心がありますか？（1つ選択）

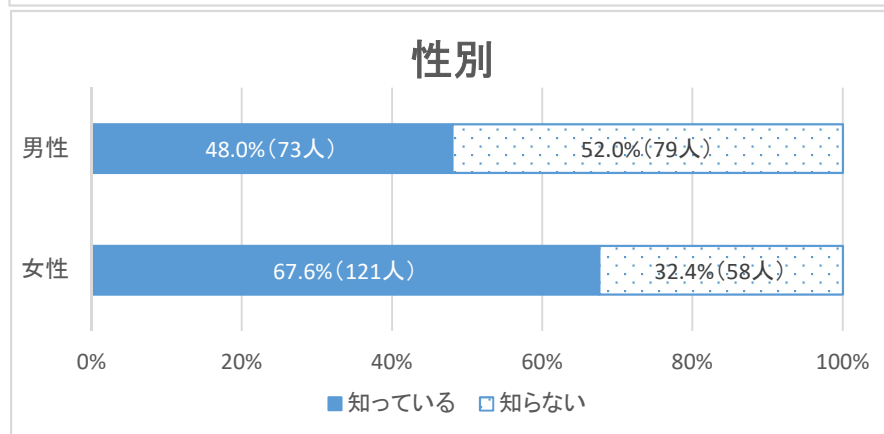
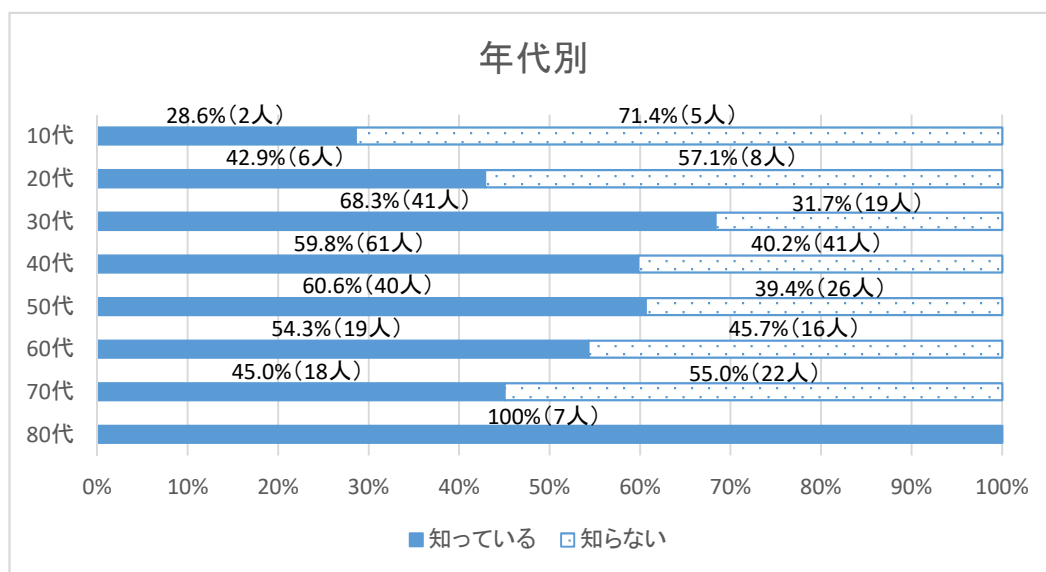
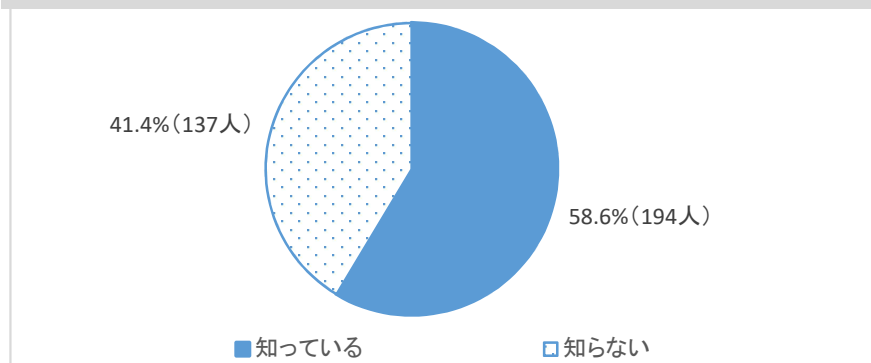
（回答者：251人）



問1で「知っている」と回答した方のうち、「食育」に関心がある方については、全体の89.6%の方が「関心がある」「どちらかと言えばある」と回答した。
年代別では、「関心がある」「どちらかと言えばある」と回答した方が、80代の100%が最も高く、30代～70代で約90%程度となっている。さらに、10代・20代では約80%程度であり、全年代の中で低い値を示した。
性別では、「関心がある」「どちらかと言えばある」と回答した方が、女性が男性より6.0ポイント高い。
前回調査では「関心がある」「どちらかと言えばある」の回答が91.8%で、今回2.2ポイント減少した。

問3 「食事バランスガイド(※)」をご存知ですか？(1つ選択)
 ※1日に「何を」「どれだけ」食べればよいのか料理ごとに区分し、
 コマのイラストで示したもの。

(回答者：331人)



「食事バランスガイド」の認知度について、全体の58.6%が「知っている」と回答した。

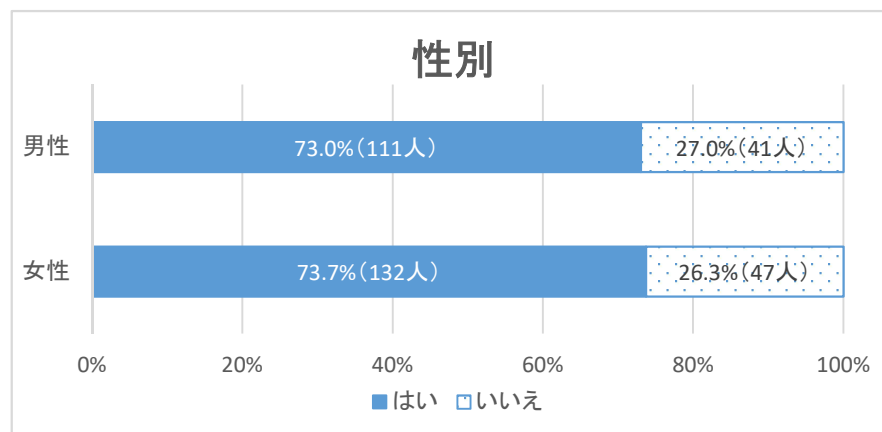
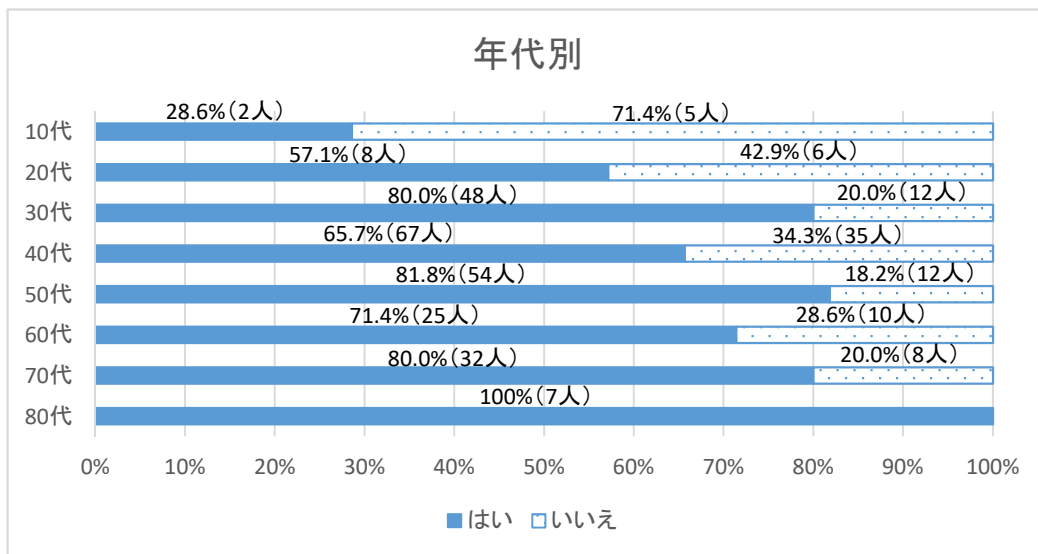
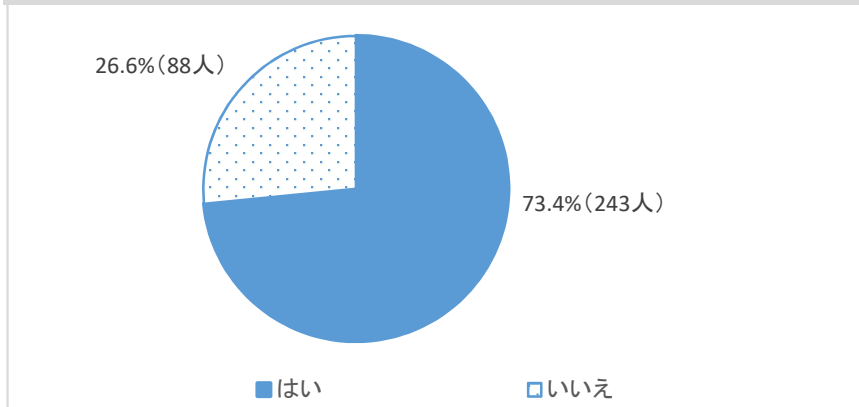
年代別では、「知っている」と回答した方が80代の100%で最も高く、10代の28.6%で最も低い値を示した。また、10代～70代では、「知らない」と回答した方が30～70%程度と年代により差がみられた。

性別では、女性の認知度が男性より19.6ポイント高い。

前回調査では「知っている」の回答が53.3%で、今回5.3ポイント増加した。

問4 自分の適正体重（※）を認識していますか？（1つ選択）
 ※身長（m）×身長（m）×22で算出される値

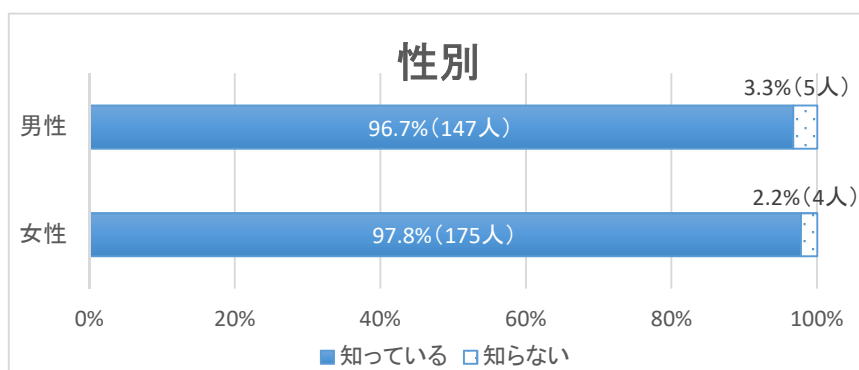
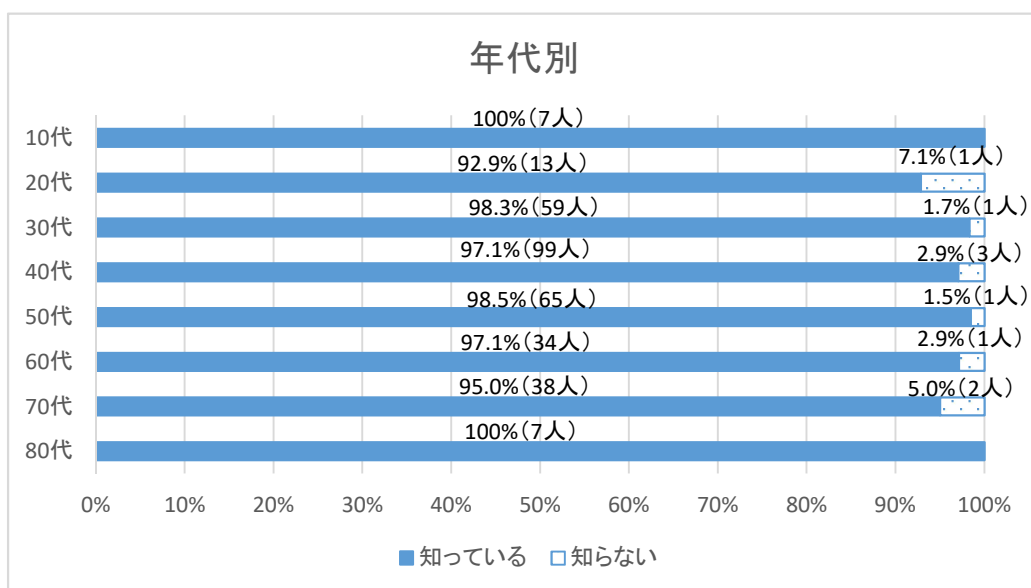
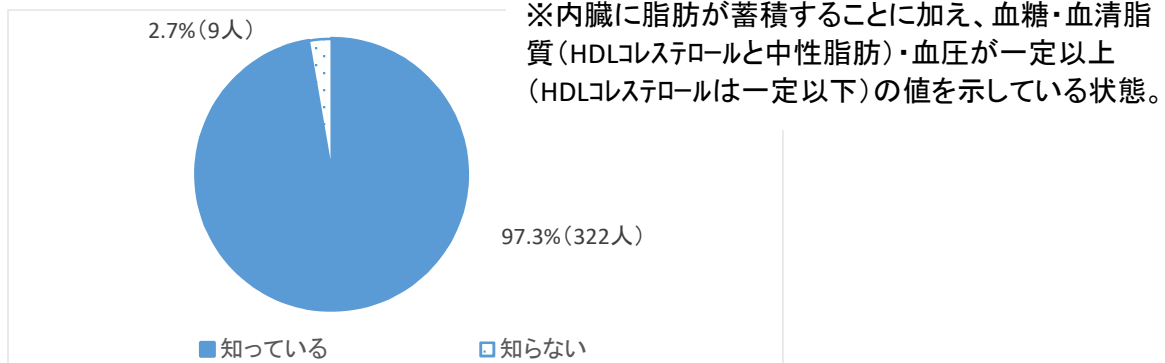
（回答者：331人）



「適正体重」を認識しているかについて、全体の73.4%が「はい」と回答した。
 年代別では、「認識している」と回答した方が80代の100%で最も高く、10代の28.6%で最も低い値を示した。また、20代～70代では、約60～80%の方が「認識している」と回答した。
 性別では、女性の認知度が男性より0.7ポイント高い。
 前回調査では「認識している」の回答が91.4%で、今回18.0ポイント減少した。

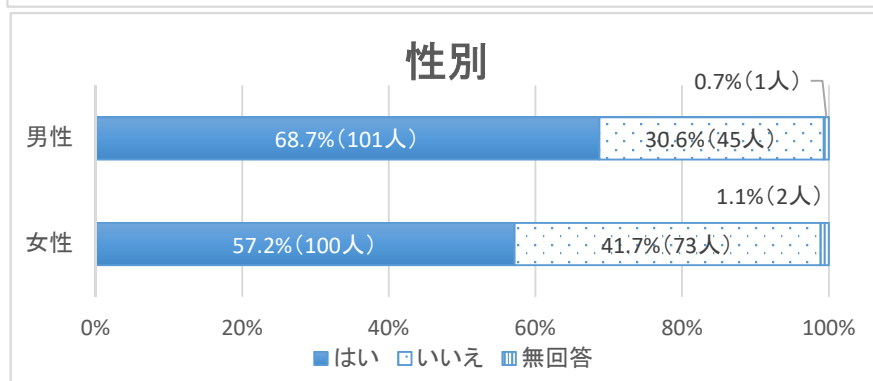
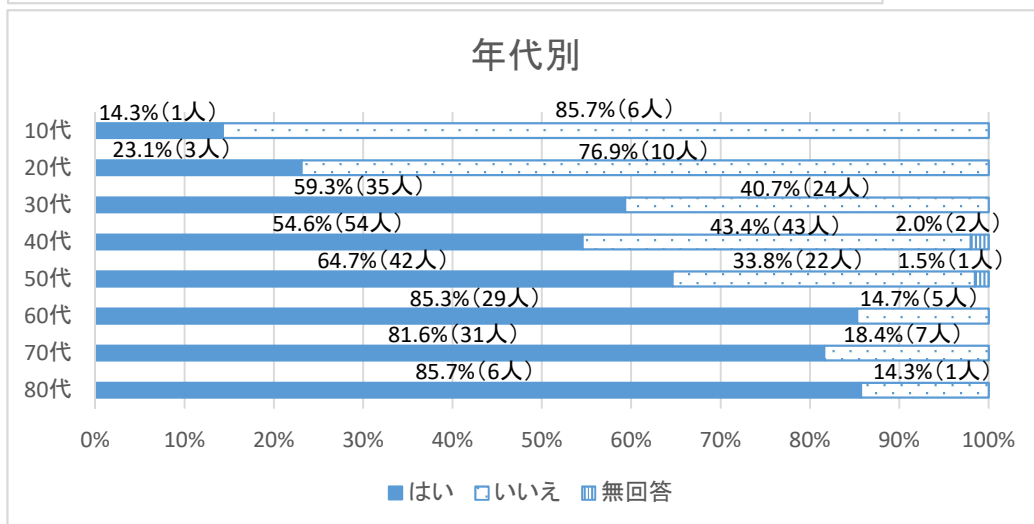
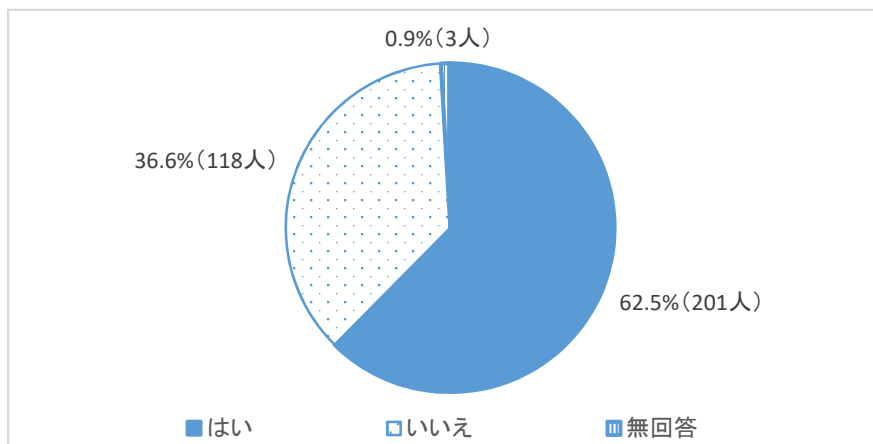
問5 「メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）（※）」をご存知ですか？
（1つ選択）

（回答者：331人）



「メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）」の認知度について、全体の97.3%が「知っている」と回答した。
年代別では、「知っている」と回答した方が10代・80代の100%で最も高く、全年代で90%以上の方が「知っている」と回答した。
性別では、女性の認知度が男性より1.1ポイント高い。
前回調査では「知っている」の回答が98.6%で、今回1.3ポイント減少した。

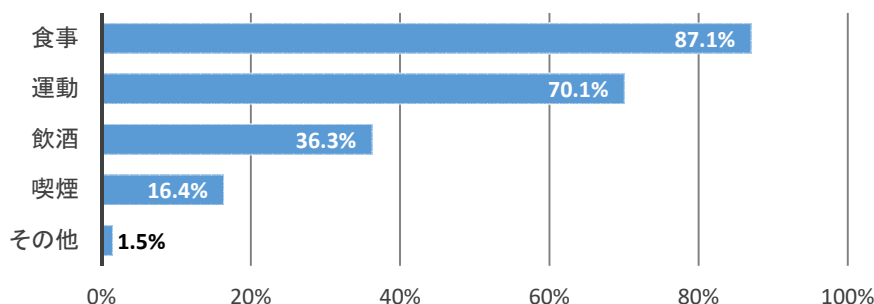
問6 問5で「知っている」を選択した方にお尋ねします。
 「メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）」の予防や改善のために取り組んでいることはありますか？（1つ選択）
 （回答者：322人）



「メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）」を「知っている」と回答した方で、予防や改善のために取り組んでいる人は62.5%であった。
 年代別では、80代の85.7%で最も高く、60代から80代では80%以上の方が、30代～50代では50～60%の方が予防や改善に取り組んでいると回答した。
 性別では、予防や改善に取り組む方は、男性が女性より11.5ポイント高い。
 前回調査では「取り組んでいる」の回答が63.8%で、今回1.3ポイント減少した。
 高い認知度に対し、予防や改善に取り組む人が6割程度であることから、食生活の適正な取り組みの更なる周知・啓発が必要である。

**問7 問6で「はい」を選択した方にお尋ねします。
取り組みの具体的な内容は何ですか？（複数回答可）**

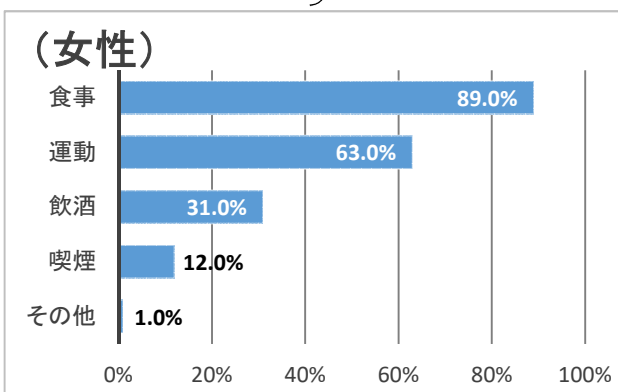
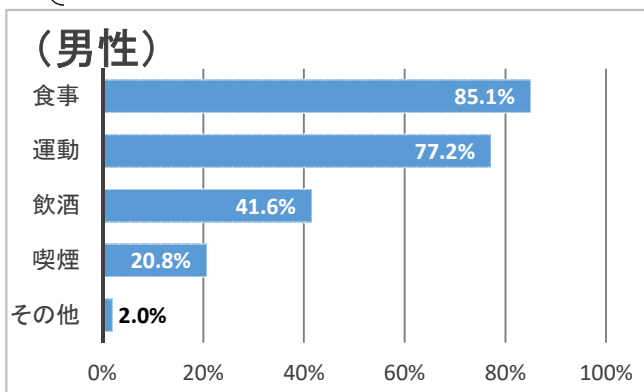
（回答者：201人）



選択肢	回答数
食事	175
運動	141
飲酒	73
喫煙	33
その他	3

※「その他」を選択した方の意見

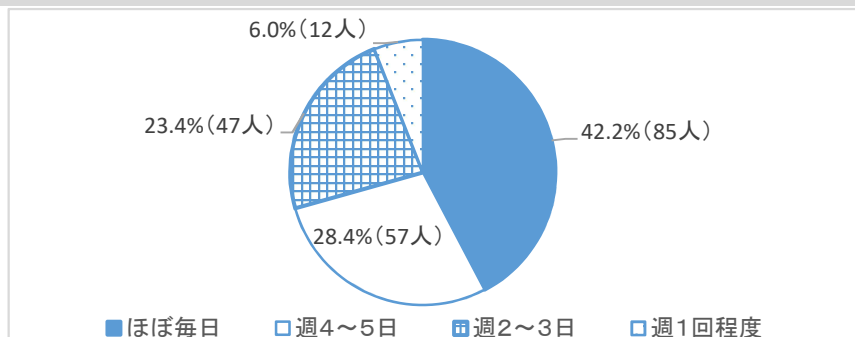
- ・ストレスを溜めないように、趣味を笑って楽しむ習慣をもつ
- ・炭水化物の制限
- ・早寝早起き



「メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）」の予防や改善のために取り組んでいる人の具体的な取り組み内容は、食事の87.1%が最も高く、次いで運動の70.1%であった。性別では、男性においては食事の85.1%、女性においては食事の89.0%が最も高く、男性・女性共に「食事」への関心が高い。

**問8 問6で「はい」を選択した方にお尋ねします。
どのくらいの頻度で取り組んでいますか？（1つ選択）**

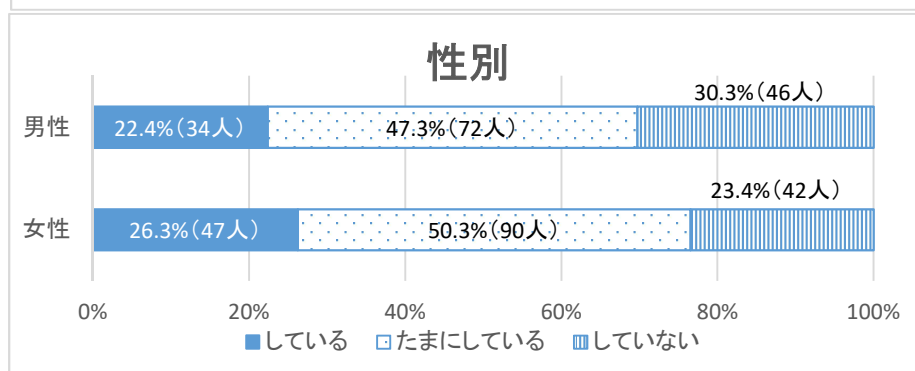
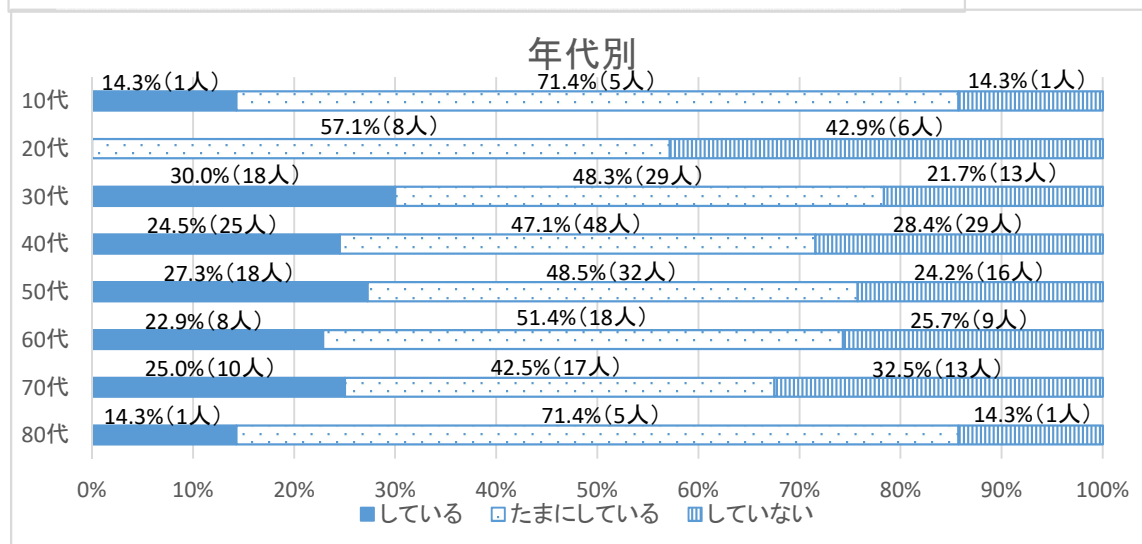
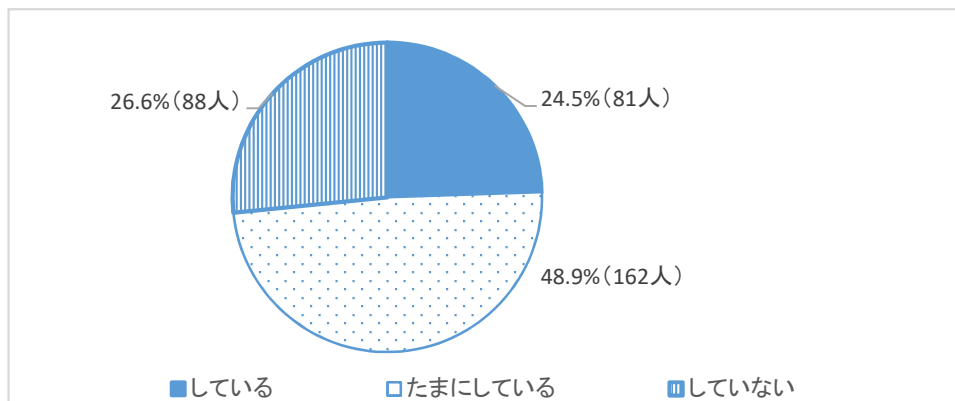
（回答者：201人）



「メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）」の予防や改善のために取り組んでいる人の取り組み頻度は、全体では「ほぼ毎日」の42.2%が最も高く、次いで「週4~5日」と回答した方が28.4%であった。前回調査では「ほぼ毎日」の回答が36.6%で、今回5.6ポイント増加した。また、「週4~5日」の回答は24.6%で、今回3.8ポイント増加した。

第2章 食習慣について

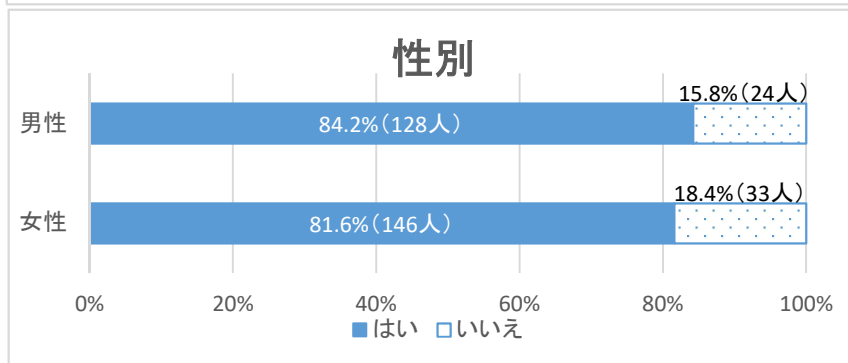
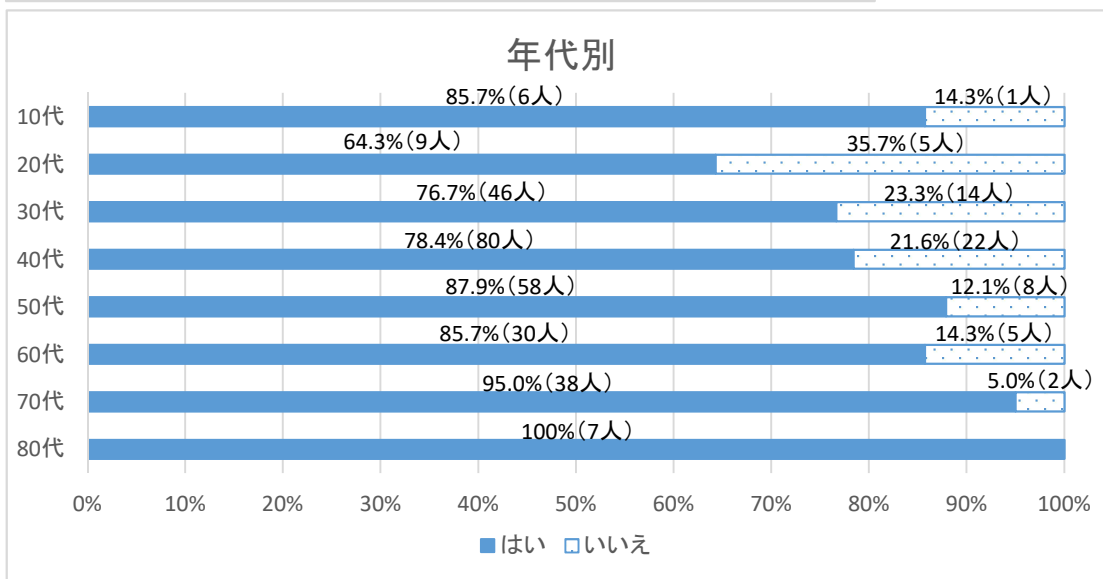
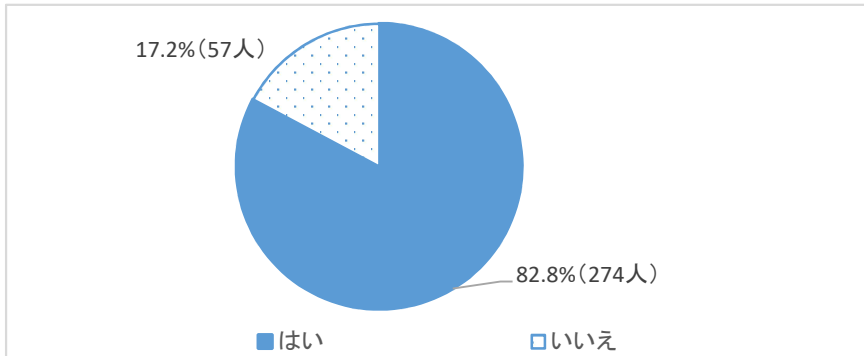
問9 外食や食品購入時に栄養成分表示(※)を参考にしていますか？(1つ選択)
 ※食品に含まれる熱量(エネルギー)や栄養成分(たんぱく質、脂質、炭水化物など)の量を表示したもの。
 (回答者：331人)



栄養成分表示について、参考に「している」と回答した方が全体の24.5%、「たまにしている」と回答した方が48.9%で、併せると73.4%であった。
 年代別では、参考に「していない」と回答した方は、10代と80代で14.3%で最も低い値であった。30代～70代では20～30%程度であるが、20代は42.9%で最も高い。さらに20代において参考に「している」と回答した方は0%であった。
 性別では、参考に「している・たまにしている」を併せると、女性が男性より6.9ポイント高い。
 前回調査では参考に「している」「たまにしている」の回答が76.6%で、今回3.2ポイント減少した。

問 10 健康維持のための食生活を心がけていますか？（1つ選択）

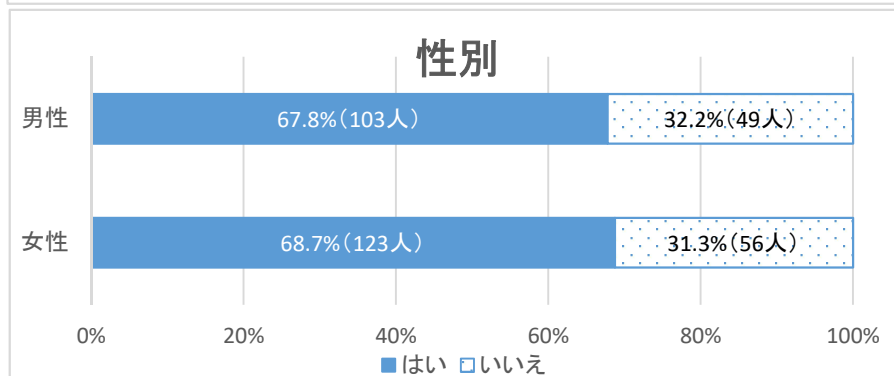
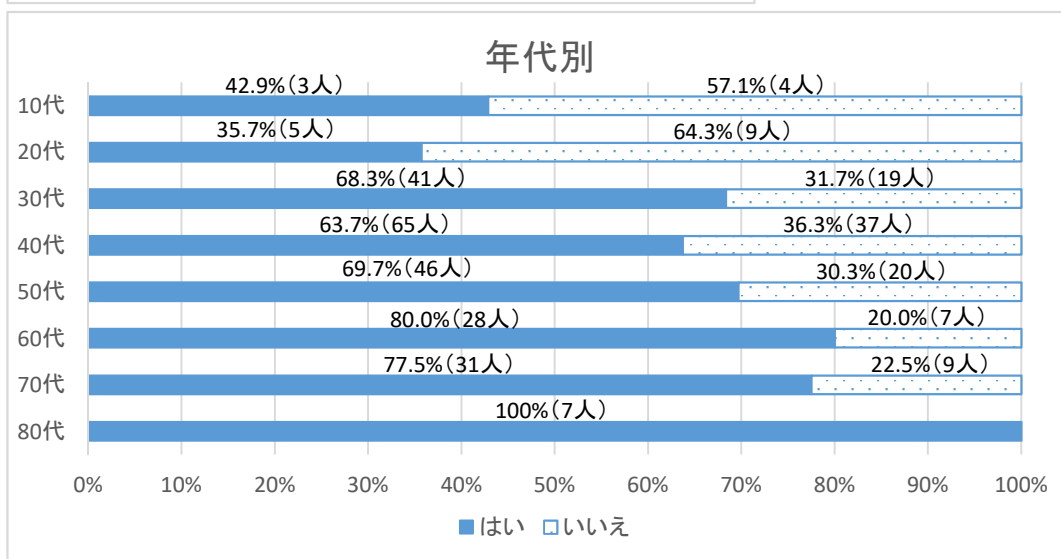
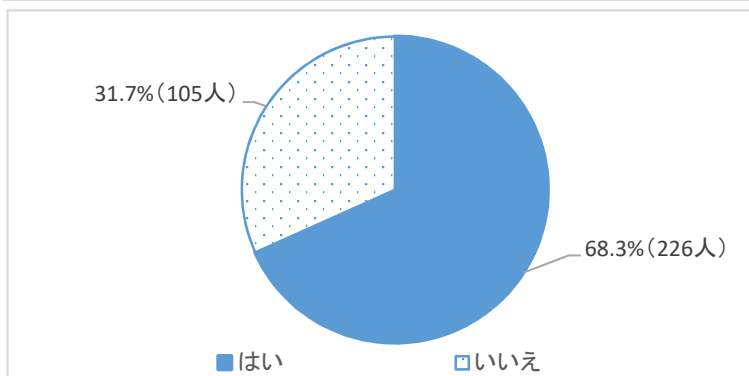
（回答者：331人）



健康維持のための食生活を心がけている人は、全体の82.8%であった。
 年代別では、80代の100%が最も高く、20代の64.3%が最も低い。10代は85.7%であるが、20代～80代では、年齢が上がる毎に食生活を心がけている方の割合が多くなっている。
 性別では、男性が女性より2.6ポイント高い。
 前回調査では「食生活を心がけている」の回答が81.1%で今回1.7ポイント増加した。

問 11 食事の時に食べ方（よく噛む、食べる順番など）を意識していますか？
（1つ選択）

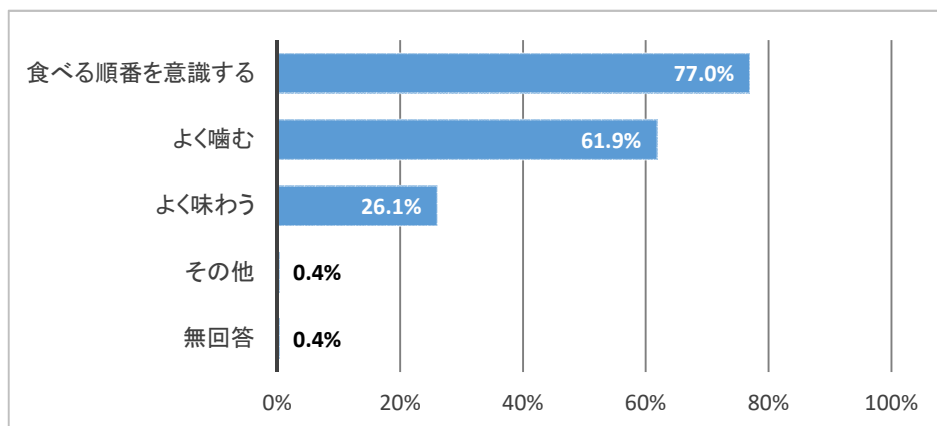
（回答者：331人）



食事の時の食べ方について、全体の68.3%が「食べ方を意識している」と回答した。年代別では、80代の100%が最も高い。30代～70代は60～80%程度であるのに対し、10代・20代では30～40%程度と低い。
性別では、「食べ方を意識している」と回答した方は、女性が男性よりも0.9ポイント高い。
前回調査では「食べ方を意識している」の回答が56.7%で、今回11.6ポイント増加した。

問 12 問11で「はい」を選択した方にお尋ねします。
どのようなことを意識していますか？（複数回答可）

（回答者：226人）



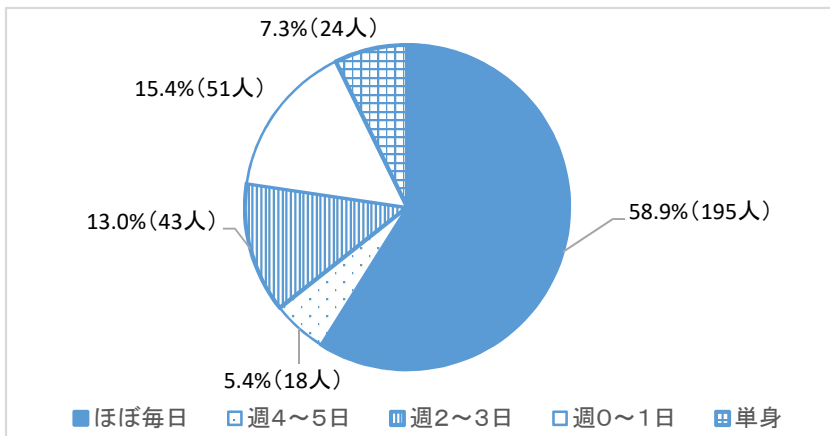
※「その他」を選択した方の意見

・旬の食材を活きが良いうちに食す。

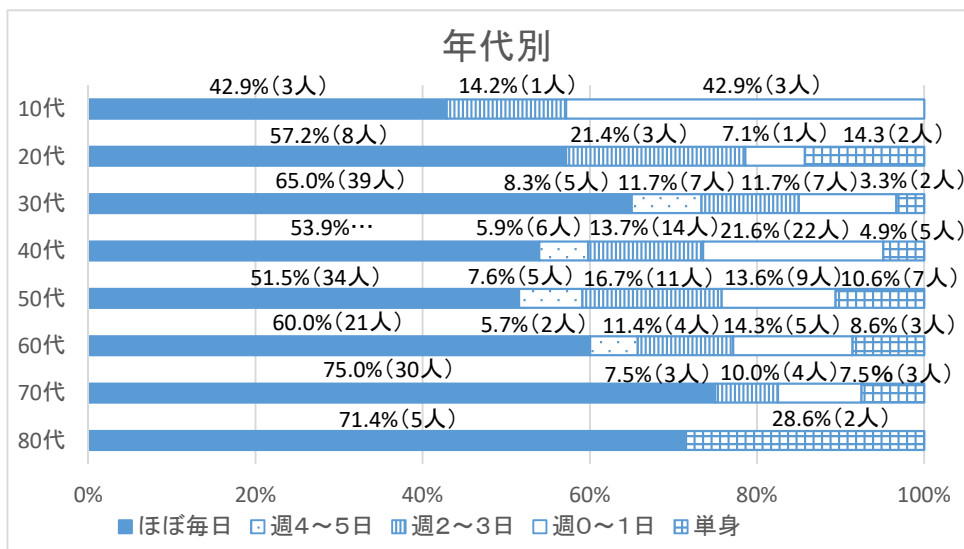
選択肢	回答数
食べる順番を意識する	174
よく噛む	140
よく味わう	59
その他	1
無回答	1

問11で「はい」を選択した方が意識している内容は、「食べる順番を意識する」の77.0%が最も高く、次いで「よく噛む」の61.9%であった。

問 13 家庭生活の状況が多様化する中で、共食（※）の 機会の確保が課題となっています。
朝食を家族と一緒に食べる頻度はどれくらいですか？（1つ選択）（回答者：331人）



※家族や友人など誰かと食事を共にすること。



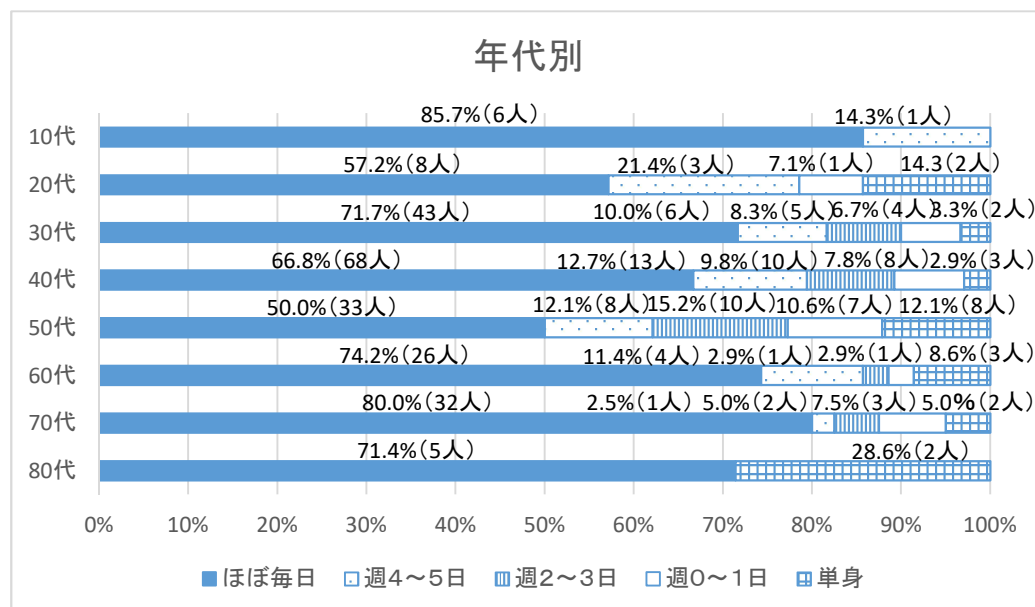
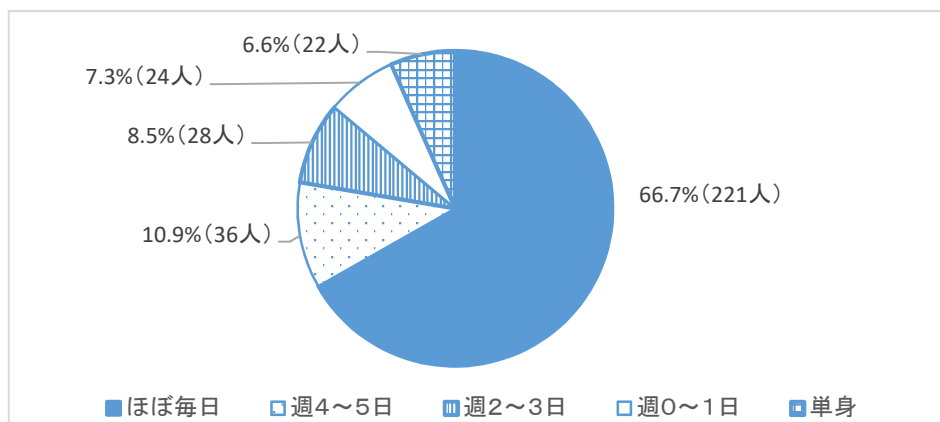
朝食を家族と一緒に食べる方は、全体の58.9%が「ほぼ毎日」、5.4%が「週4～5日」と回答した。

年代別では、「ほぼ毎日・週4～5日」を併せると、70代の75.0%が最も高く、次いで30代の73.3%であった。また、「週0～1日」と回答した方は、10代の42.9%で最も高く、「単身」は80代の28.6%で最も高い。

前回調査では「週4日以上」朝食を家族と一緒に食べると回答した方が60.8%で、今回3.5ポイント増加した。

問 14 夕食を家族と一緒に食べる頻度はどれくらいですか？（1つ選択）

（回答者：331人）



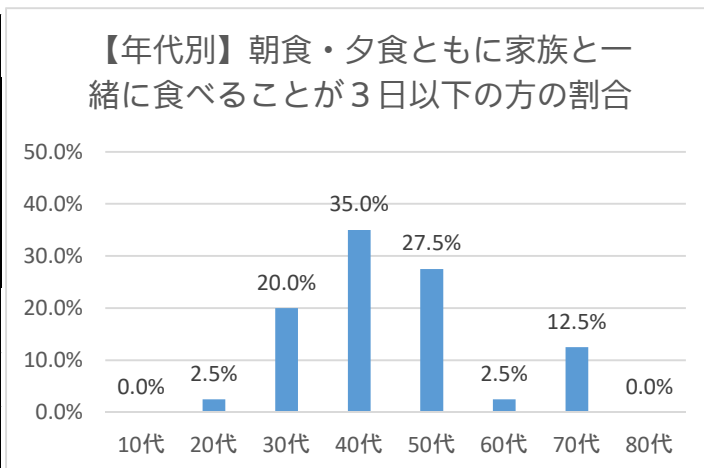
夕食を家族と一緒に食べる方は、「ほぼ毎日」で全体の66.7%、「週4~5日」で10.9%であった。

年代別では、「ほぼ毎日・週4~5日」を併せると10代の100%で最も高く、次いで60代の85.6%である。「週0~1日」と回答した方は、50代の10.6%で最も高く、次いで40代の7.8%であった。

前回調査では「週4日以上」夕食を家族と一緒に食べると回答した方は84.5%で、今回6.9ポイント減少した。

《問13・問14のまとめ》

問13	問14	回答数	割合
ほぼ毎日 週4～5日	ほぼ毎日 週4～5日	201	60.7%
ほぼ毎日 週4～5日	週0～1日 週2～3日	53	16.0%
週0～1日 週2～3日	ほぼ毎日 週4～5日	40	12.1%
週0～1日 週2～3日	週0～1日 週2～3日	11	3.3%
単身	単身	26	7.9%
合計		331	100%



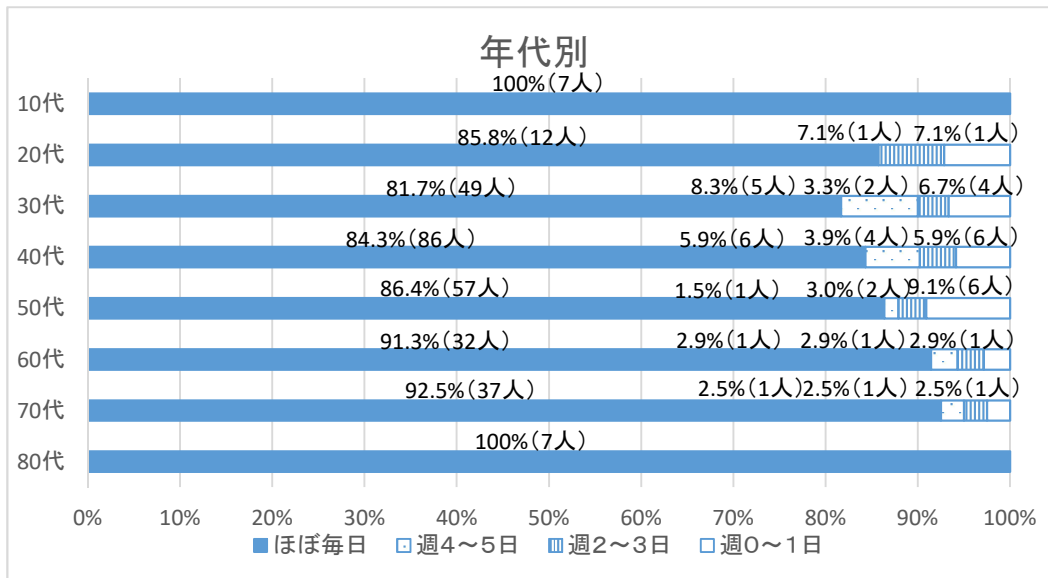
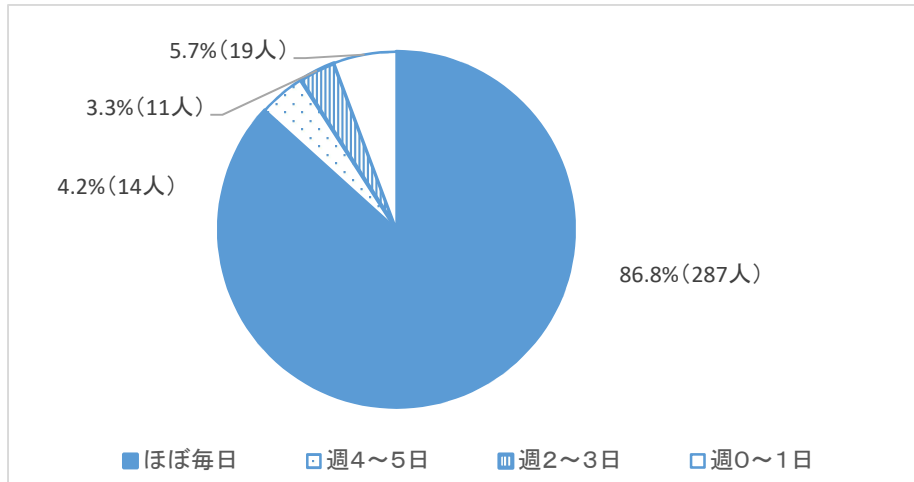
問13と問14の回答を併せてみると、全体の88.8%が朝食または夕食を週4日以上家族と一緒に食べると回答した。

朝食・夕食ともに3日以下の方は全体の3.3%であるが、年代別で見ると30代～50代の働き盛りの世代が高い。

朝食または夕食を週4日以上と回答した方は、計画の目標値である90%に近い値であった。また、朝食・夕食ともに週3日以下と回答した方の中では30～50歳代の方が多く、特に働き盛りの世代に対する働きかけが必要である。

問 15 朝食を毎日とっていますか？（1つ選択）

（回答者：331人）

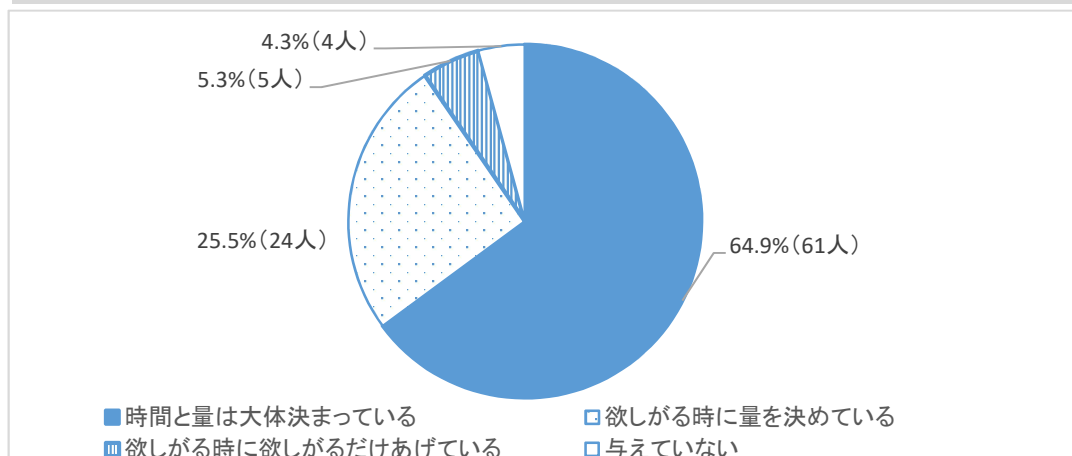


朝食を食べる頻度は、全体の86.8%が「ほぼ毎日」と回答した。

年代別では、「ほぼ毎日」食べる方は10代・80代の100.0%が最も高く、次いで70代の92.5%である。また、30代の81.7%が最も低い。さらに「週0~1日」と回答した方は、50代の9.1%で最も高く、次いで20代の7.1%であった。

前回調査では「ほぼ毎日」の回答が83.5%で、今回3.3ポイント増加した。

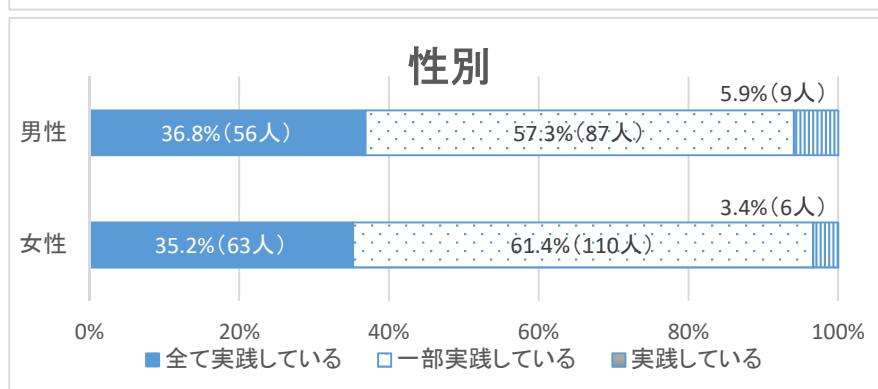
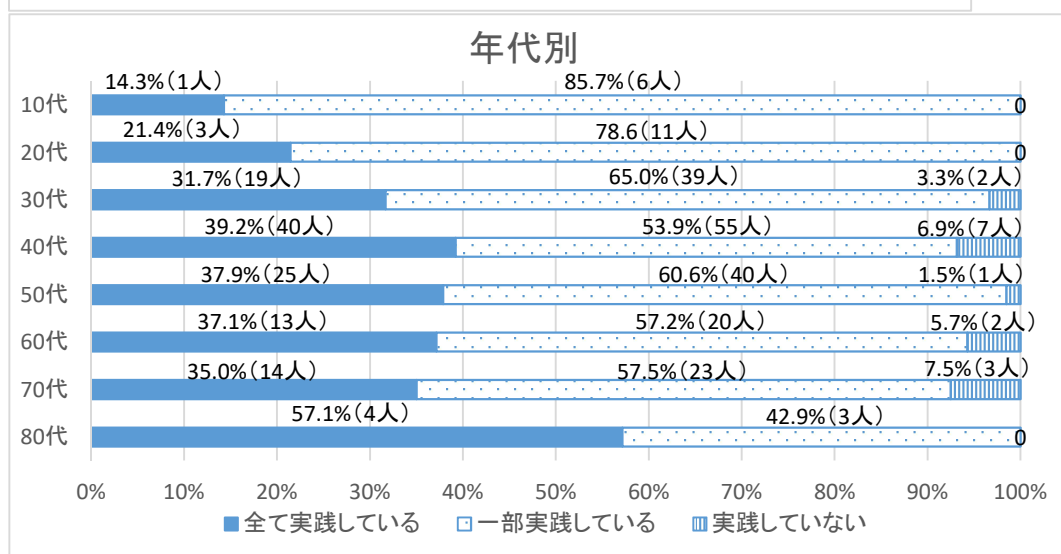
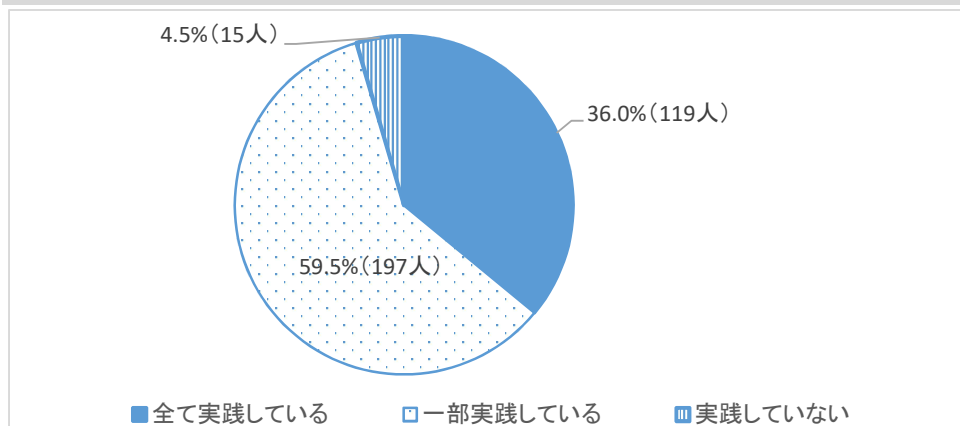
問 16 就学前のお子さんと同居している方にお尋ねします。
子どもに時間と量を決めておやつを与えていますか？（1つ選択）
(回答者：94人)



就学前のお子さんへのおやつとの与え方は、全体の64.9%が「時間と量は大体決まっている」と回答し、25.5%が「欲しがる時に量を決めている」と回答した。全体の90.4%の方が、時間または量について決めておやつを与えていると回答した。
前回調査では「時間と量は大体決まっている」の回答が56.3%で、今回8.6ポイント増加した。

問 17 食事のマナー（あいさつ・食事の仕方、作法、食べ残しをしない）を実践していますか？（1つ選択）

（回答者：331人）



食事のマナーについては、全体の36.0%が「全て実践している」と回答し、59.5%が「一部実践している」と回答した。

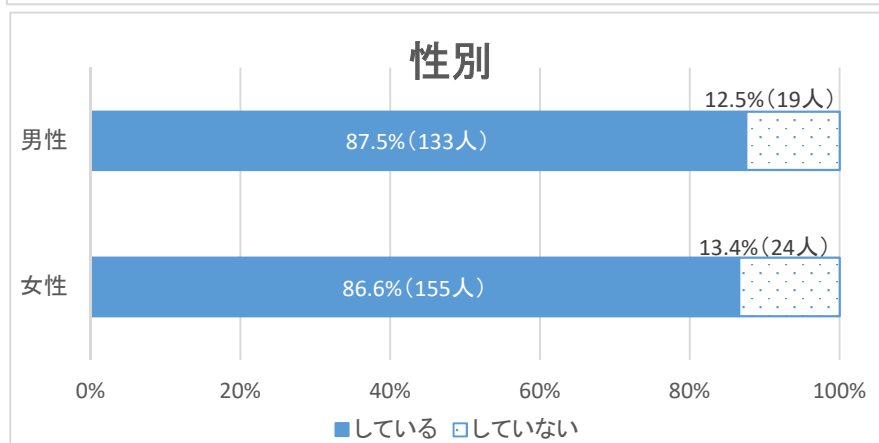
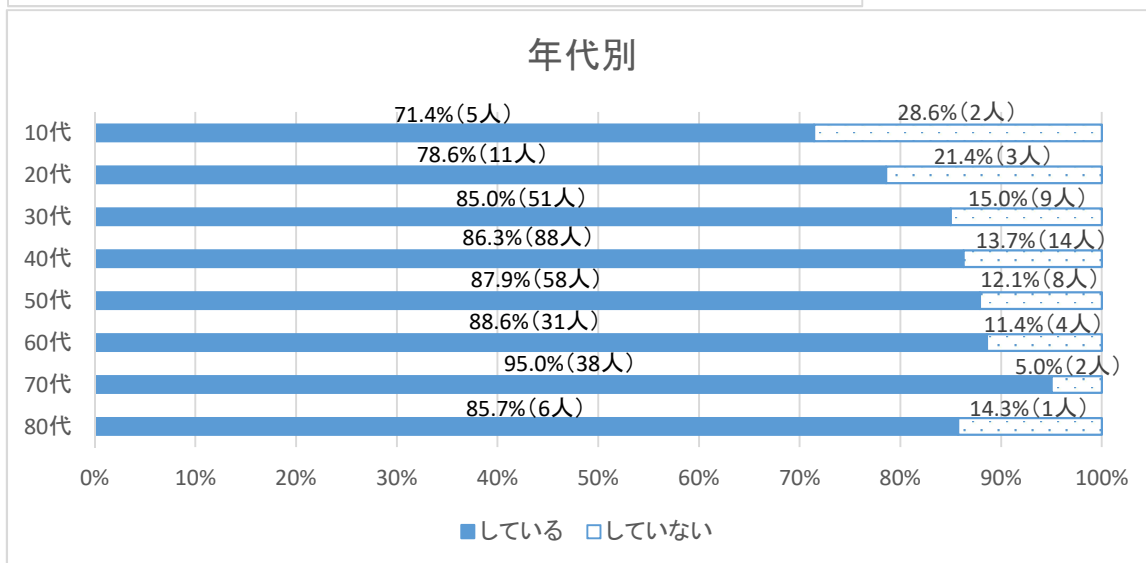
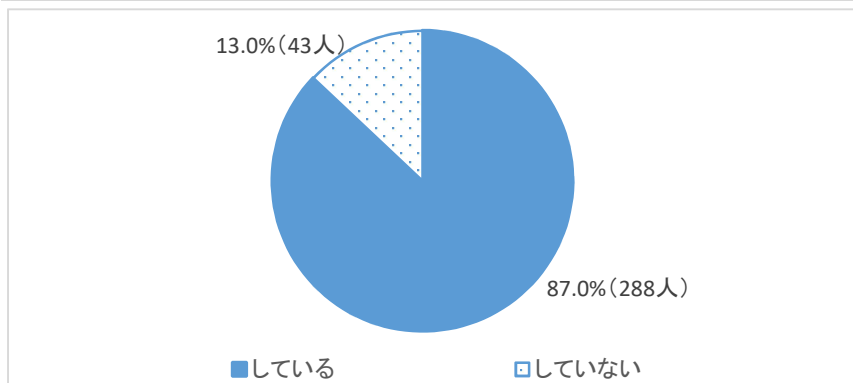
年代別では、「全て実践している」と回答した方は80代の57.1%が最も高い。また、「全て実践している・一部実践している」を併せると、10代・20代・80代での100.0%が最も高く、30代～70代でも90%以上の方が実践していると回答した。

性別では、「全て実践している」では男性が女性より1.6ポイント高い。また、「全て実践している・一部実践している」を併せると、女性が男性より2.5ポイント高い。

前回調査では「全部実行している」「一部実行している」の回答が併せて96.2%で、今回0.7ポイント減少した。

問 18 買いすぎ、作りすぎに気をつけて、食品の廃棄が少なくなるよう実践していますか？（1つ選択）

（回答者：331人）



食品の廃棄を少なくする取組みについては、全体の87.0%の方が実践「している」と回答した。

年代別では、実践「している」と回答した方では70代の95.0%が最も高く、10代の71.4%が最も低い。10代～70代では、年齢が低くなる程実施「している」と回答した方の割合が低くなっている。

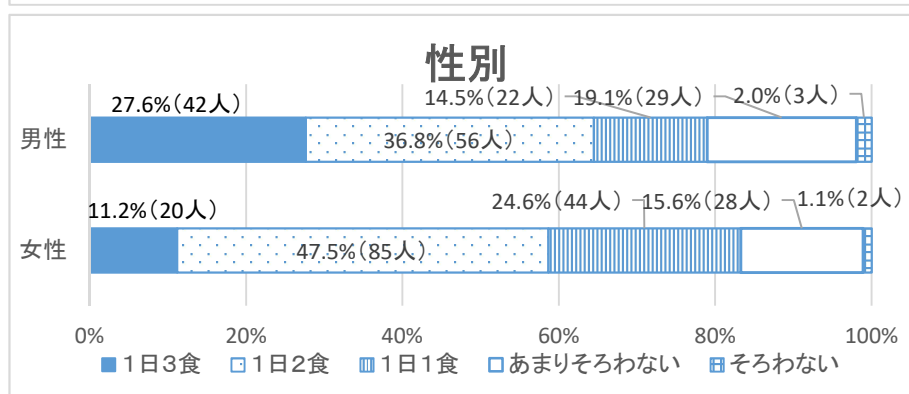
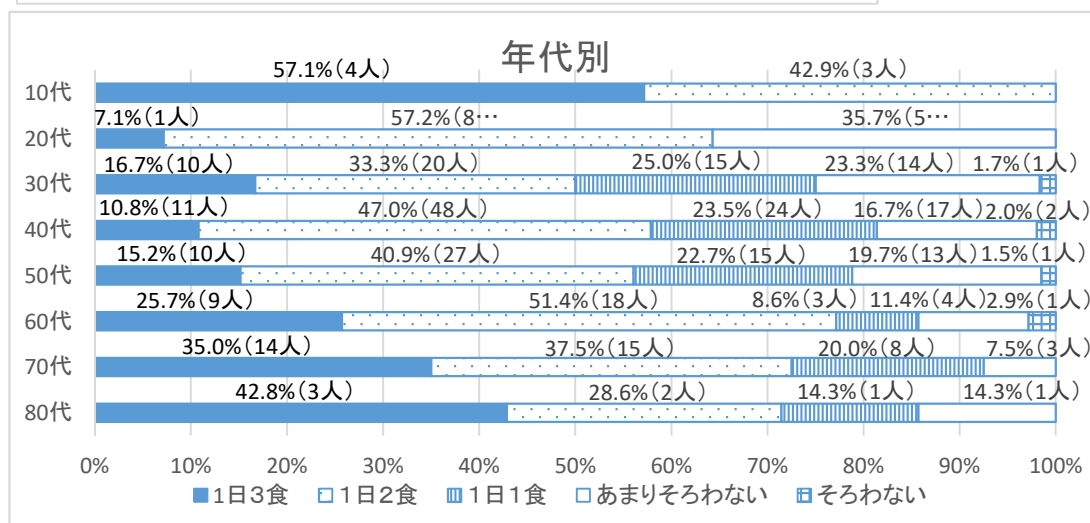
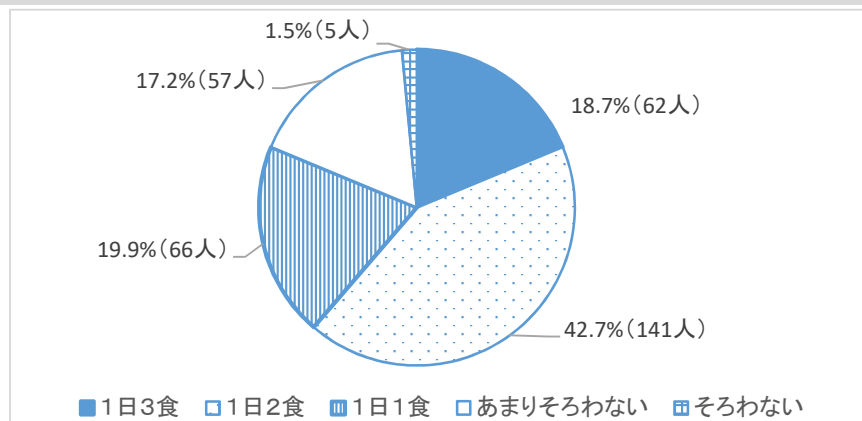
性別では、男性が女性より0.9ポイント高い。

前回調査では「実践している」の回答が84.5%で、今回2.5ポイント増加した。

第3章 食事内容について

問 19 バランスのよい食事《主食（ごはん、パン、めん）》・《主菜（肉・魚・卵・大豆製品のおかず）》・《副菜（野菜のおかず）》がそろそろ食事をしていきますか？（1つ選択）

（回答者：331人）



バランスのよい食事については、全体の18.7%が「1日3食」と回答し、42.7%が「1日2食」と回答した。

年代別では、「1日3食」と回答した方は10代の57.1%で最も高く、20代の7.1%で最も低い。また、「1日3食」「1日2食」を併せると10代の100%が最も高く、次いで60代の77.1%であった。

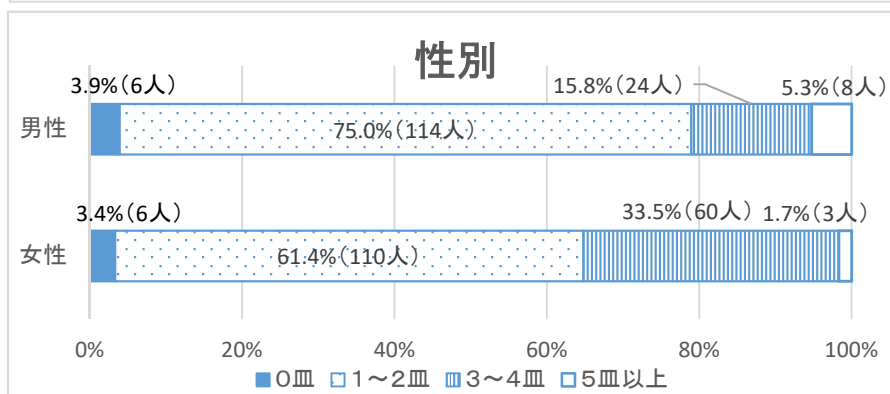
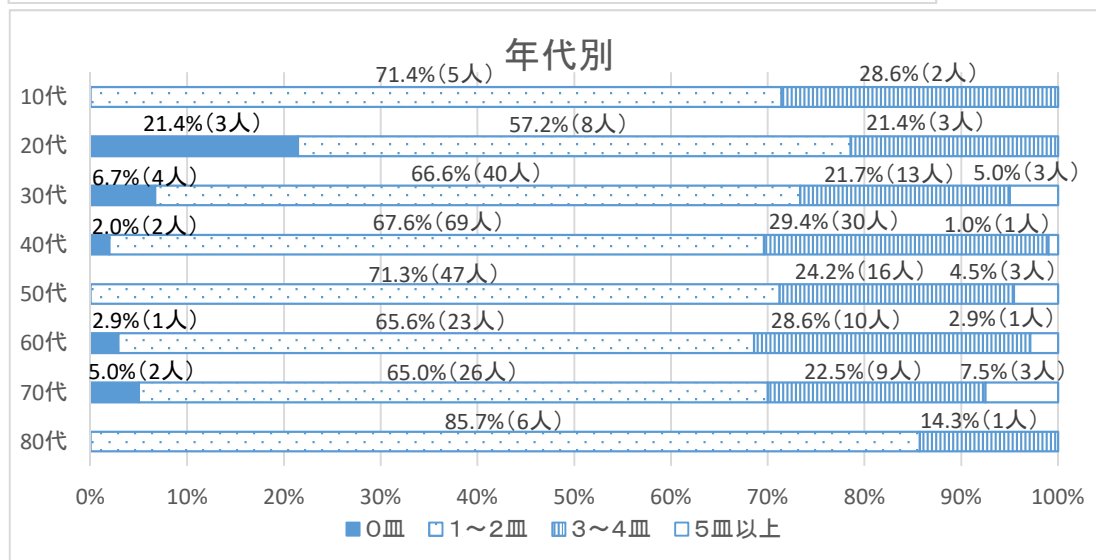
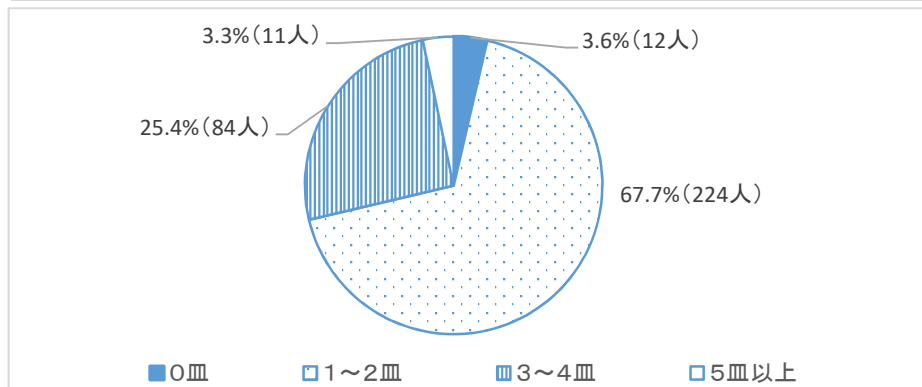
性別では、「1日3食」または「1日2食」と回答した方を併せると、男性で64.4%、女性で58.7%と男性が女性より5.7ポイント高い。

前回調査では「1日2食以上」の回答が51.5%で、今回9.9ポイント増加した。

問 20 野菜の摂取についてお尋ねします。1日にどの位、野菜を食べていますか？
(1つ選択)

※皿の数え方 1皿の目安=小鉢1皿(約70g)

(回答者: 331人)



1日の野菜の摂取量については、全体で67.7%の「1~2皿」が最も高く、次いで25.4%の「3~4皿」である。「0皿」と「5皿以上」は、共に3%台であった。

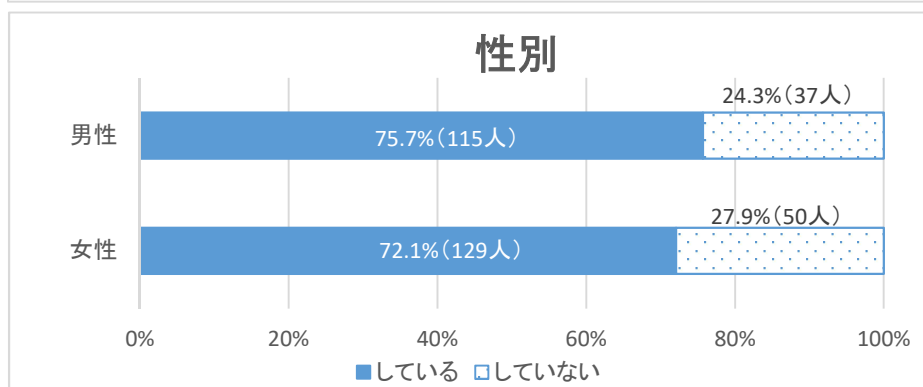
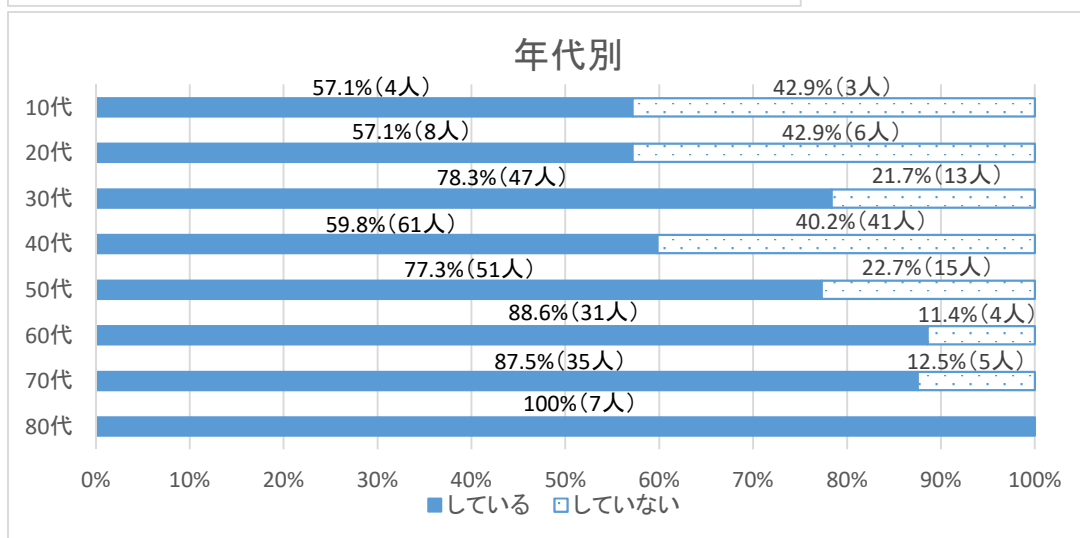
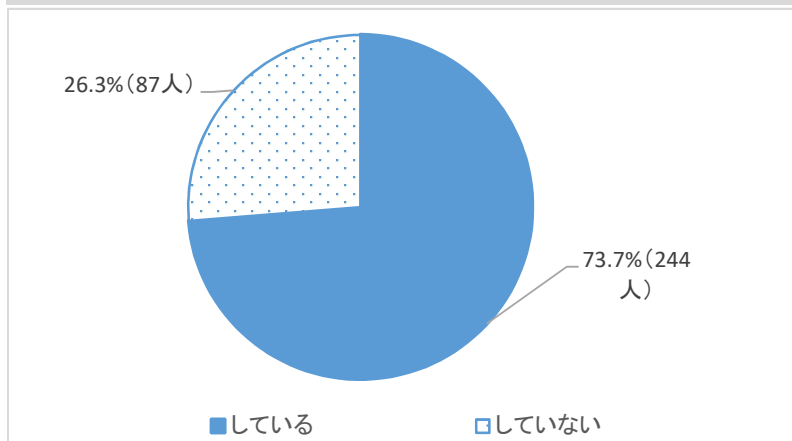
年代別では、「0皿」と回答した方では20代の21.4%が最も高く、次いで30代の6.7%であった。

性別では、「1~2皿」と回答した方は男性が女性より13.5ポイント高く、「3~4皿」と回答した方は男性が女性より17.7ポイント高く、「5皿以上」と回答した方は男性が女性より3.6ポイント高い。

前回調査では1日に「5皿以上」の回答が1.7%で、今回1.6ポイント増加した。1日に1皿以上食べていると回答した方は95%以上であったが、1日の目標量とされている350gに値する「5皿以上」を食べている方は低い値であることから、更なる周知啓発が必要である。

問 21 塩分を取り過ぎないように意識していますか？ (1つ選択)

(回答者：331人)



塩分の摂取については、全体で73.7%が取り過ぎないように意識「している」と回答した。

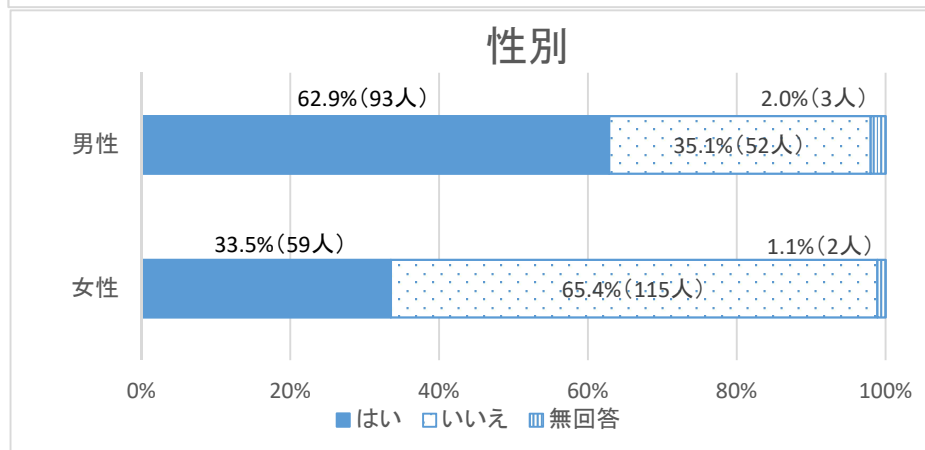
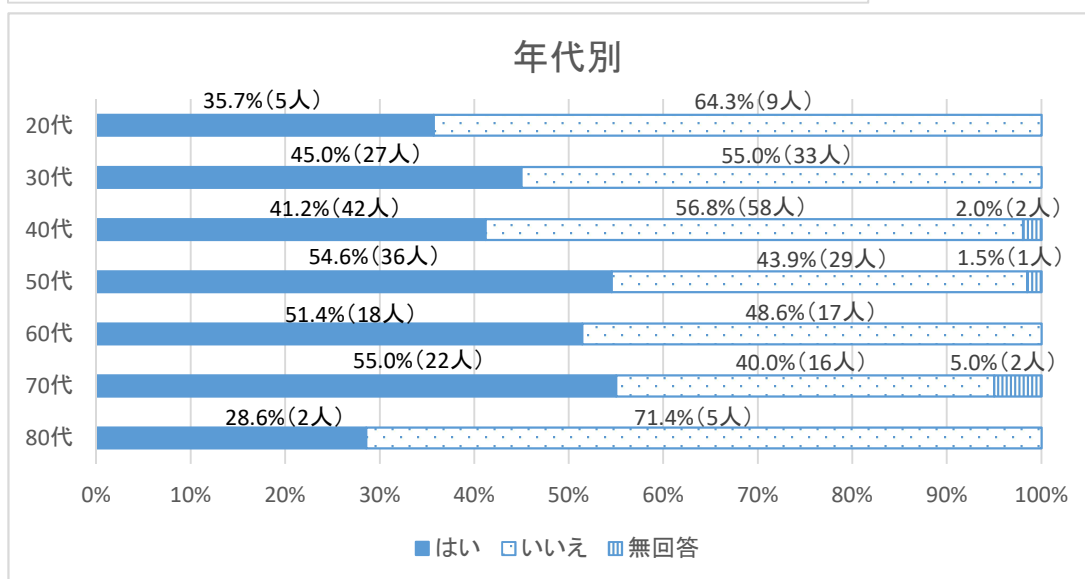
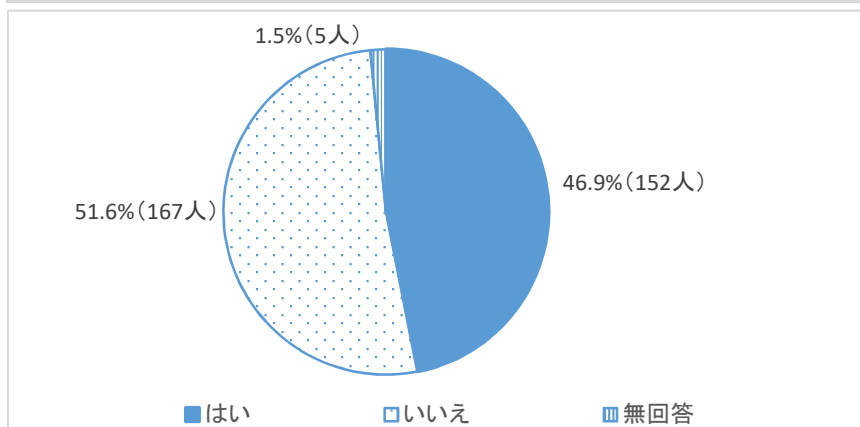
年代別では、意識「している」と回答した方は80代の100%が最も高く、次いで60代の88.6%となっている。また、30代では78.3%であるが、10代・20代で57.1%、40代で59.8%と全体と比較すると若年層で低い傾向にある。

性別では、取り過ぎないように意識「している」と回答した方は、男性が女性より3.6ポイント高い。

前回調査では意識「している」の回答が78.3%で、今回4.6ポイント減少した。

問 22 20歳以上の方にお尋ねします。定期的に飲酒をしていますか？（1つ選択）

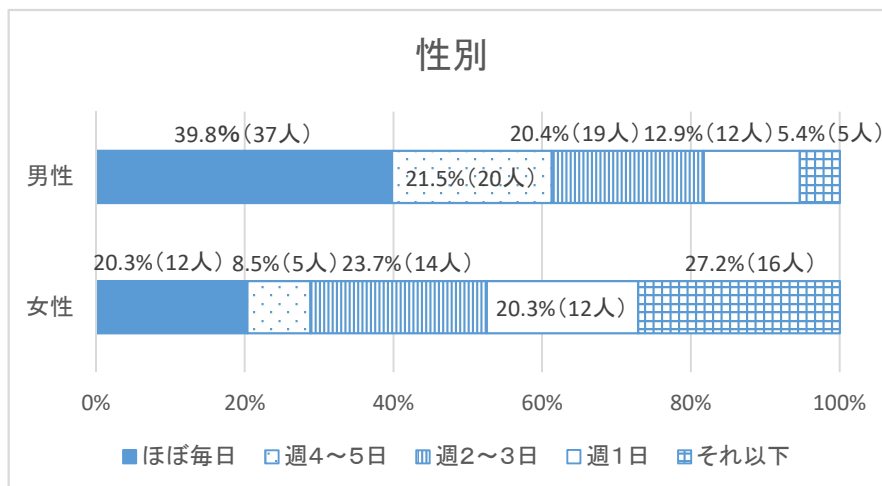
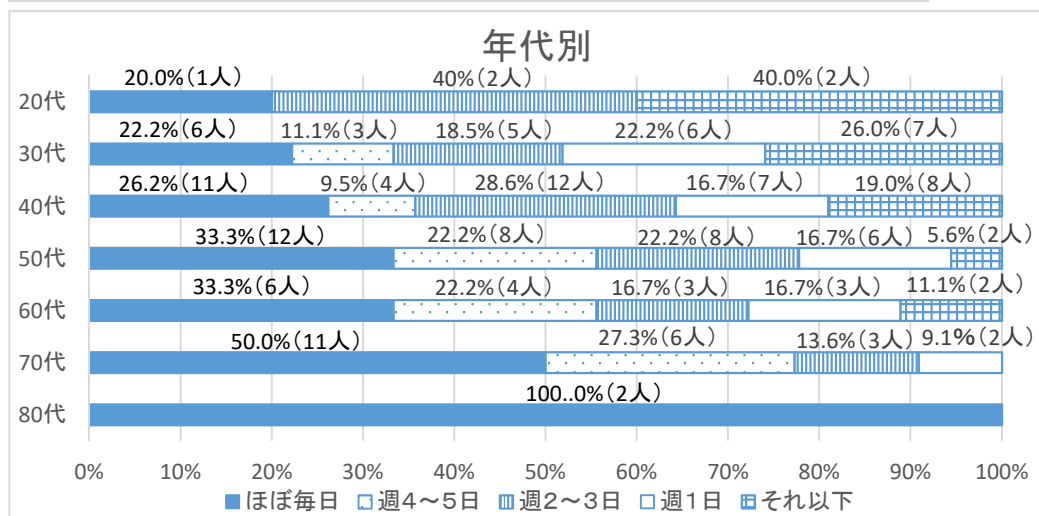
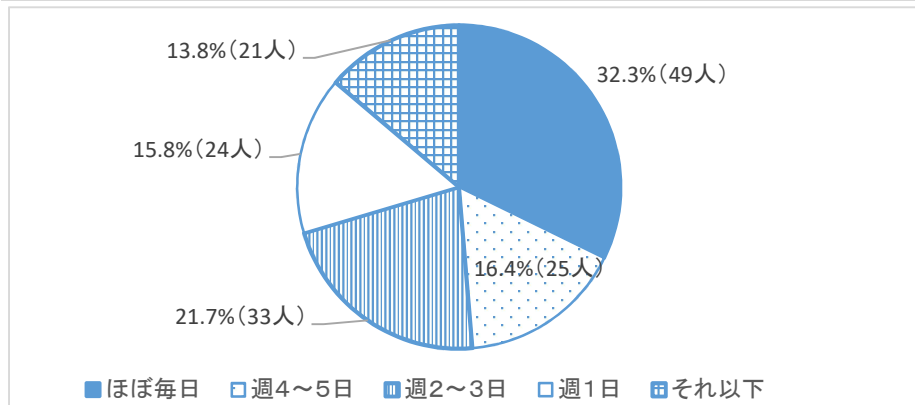
（回答者：324人）



定期的な飲酒をしているかについては、全体の46.9%が「はい」と回答した。年代別では、「はい」と回答した方では70代の55.0%が最も高い。また、50代～70代では50%以上と高い傾向にある。性別では、「はい」と回答した方は男性が女性より29.4ポイント高く、女性よりも男性の方が飲酒の習慣を持つ方が多い。前回調査では「はい」の回答が46.1%で、今回0.8ポイント増加した。

問 23 問22で「はい」を選択した方にお尋ねします。
週にどのくらいの頻度で飲酒をしますか？（1つ選択）

（回答者：152人）

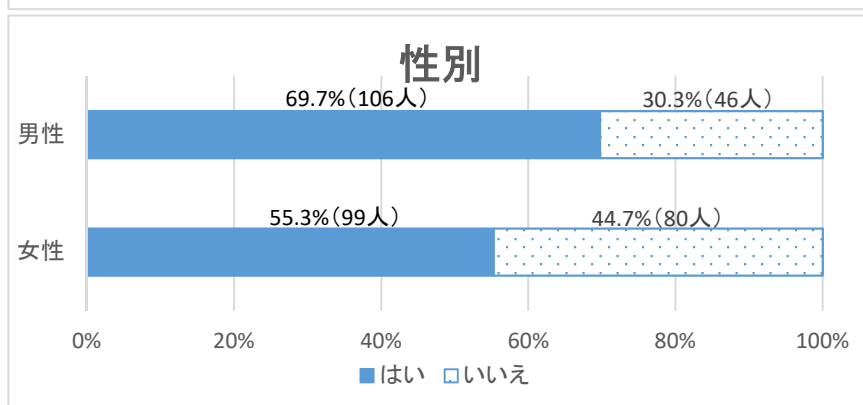
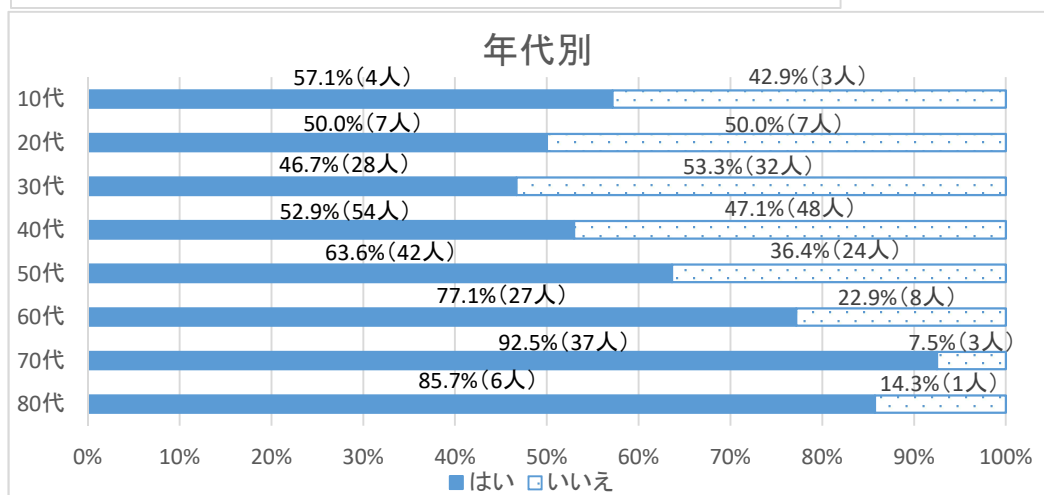
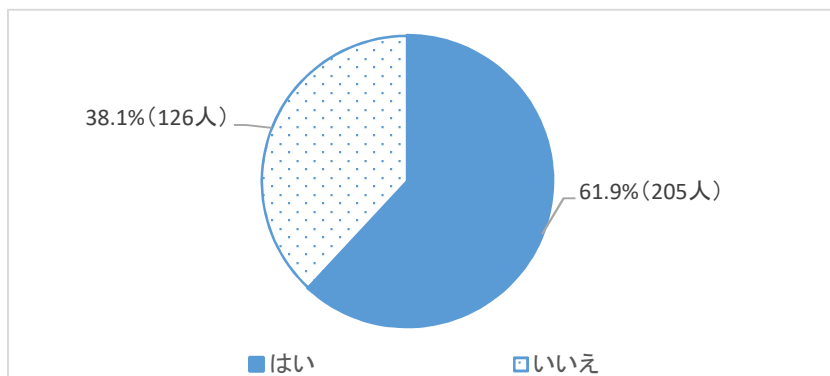


問22で「はい」を選択した方の飲酒の頻度は、「ほぼ毎日」と回答した方が全体の32.3%で最も高く、次いで「週2~3日」の21.7%であった。
年代別では、「ほぼ毎日」と回答した方は80代の100%で最も高く、次いで70代の50%であった。また、「週4~5日」と回答した方は70代の27.3%で最も高く、次いで50代・60代の22.2%であった。
性別では、男性では「ほぼ毎日」と回答した方が39.8%で最も高く、次いで「週4~5日」の21.5%であった。女性では、「それ以下」と回答した方が27.1%で最も高く、次いで「週2~3日」の23.7%であった。飲酒習慣のある方においては、男性は女性よりも頻度が高い傾向が見られた。

第4章 生活習慣について

問 24 健康維持のため運動することを心がけていますか？（1つ選択）

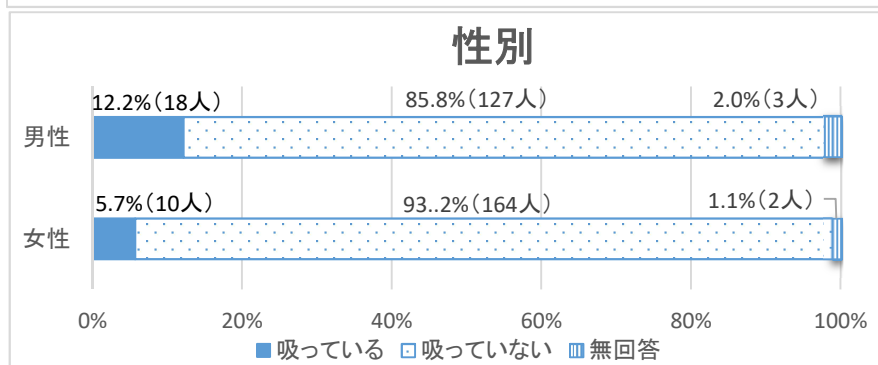
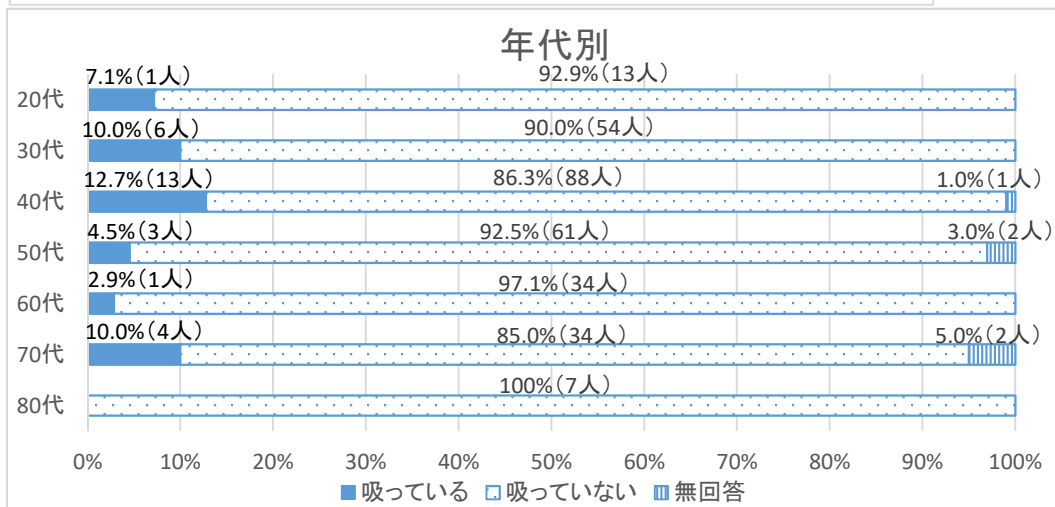
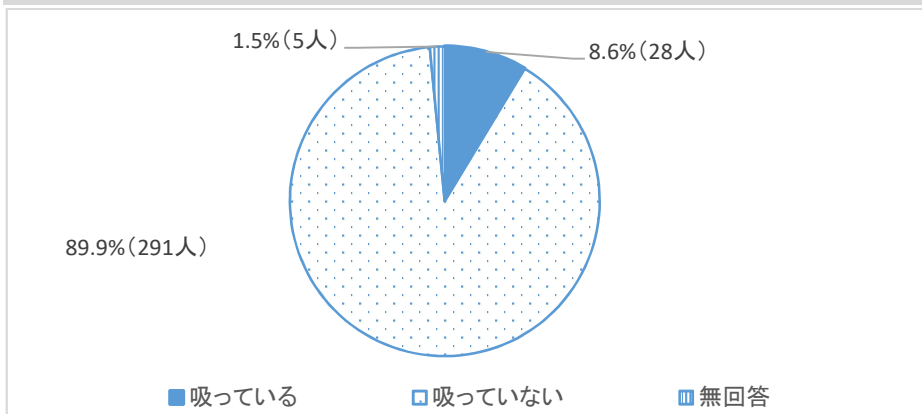
（回答者：331人）



健康維持のための運動については、全体の61.9%が「心がけている」と回答した。
年代別では、運動を心がけている方は、70代の92.5%が最も高く、30代の46.7%が最も低い。全体の傾向をみると、最も低い30代から最も高い70代まで、年齢が上がるにつれて割合が高くなっている。
性別では、運動を心がけている方は、女性より男性は14.4ポイント高い。
前回調査では「心がけている」の回答が58.8%で、今回3.1ポイント増加した。

問 25 20歳以上の方にお尋ねします。
たばこを吸っていますか？ (1つ選択)

(回答者：324人)



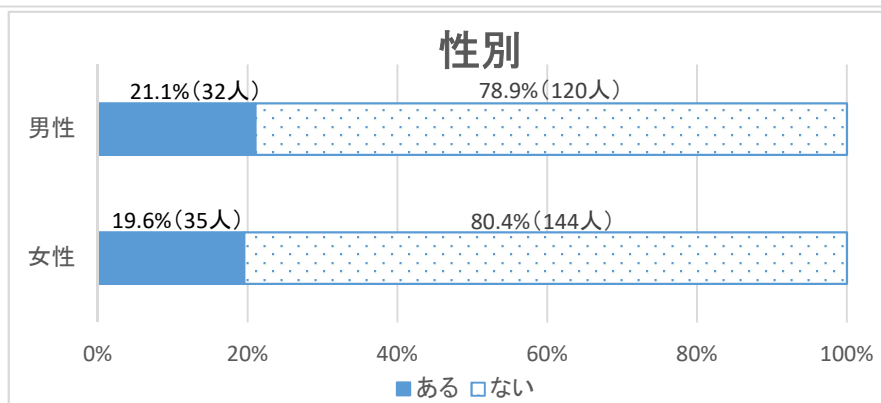
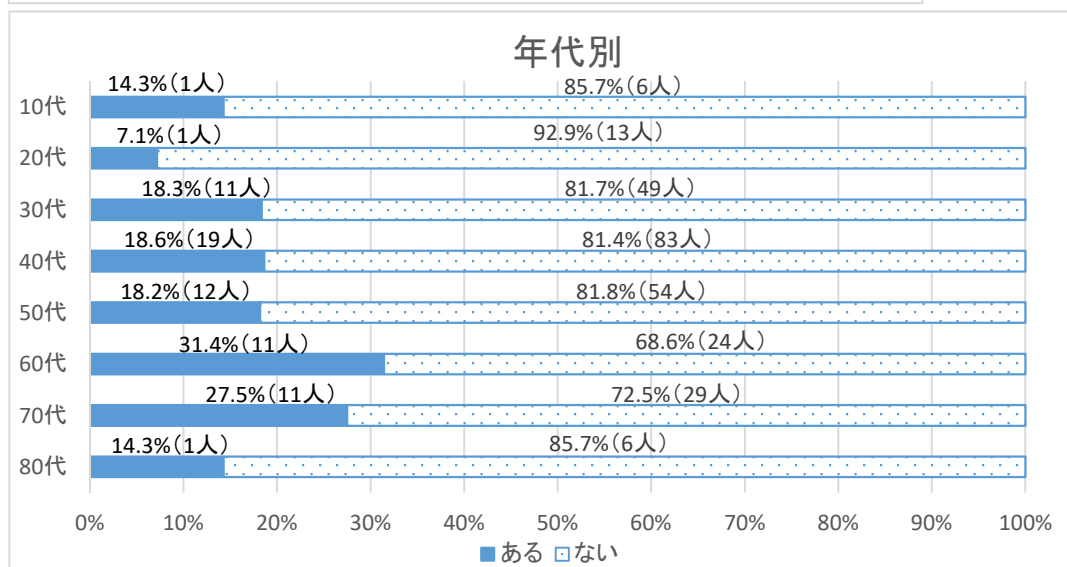
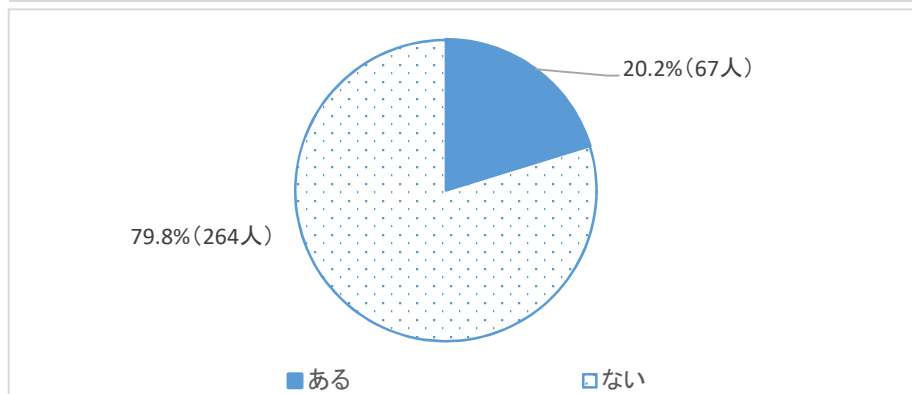
喫煙については、全体の89.9%の方が「吸っていない」と回答した。
年代別では、「吸っている」と回答した方では、40代の12.7%が最も高く、次いで30代・70代が10.0%であった。
性別では、「吸っている」と回答した方は、女性より男性は6.5ポイント高い。
前回調査では「吸っていない」の回答が91.8%で、今回1.9ポイント減少した。

第5章 その他

問 26 今までに収穫体験やグリーンツーリズム（※）などの農林漁業体験を経験したことがありますか？（1つ選択）

※農山漁村地域において、自然・文化・人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動。

（回答者：331人）



農林漁業体験については、全体の20.2%の方が経験が「ある」と回答した。年代別では60代の31.4%が最も高く、次いで70代の27.5%であった。また、20代の7.1%が最も低い。

性別では、経験が「ある」と回答した方では、女性より男性は1.5ポイント高い。前回調査では経験が「ある」の回答が30.9%で、今回10.7ポイント減少した。

問 27 「第三次郡山市食育推進計画」について、ご意見がございましたら、ご自由にお書きください。（自由記述）

食育（計画）の認識について

- ・ 食育推進計画（何をどのように計画し、活動したのか）が伝わってこない。もう少し、PDCAを含め周知したほうが良いと思う。（50代・女性）
- ・ あまり耳にすることが無いのでもう少しアピールして欲しい。（10代・男性）
- ・ 食育という言葉は知っているが、郡山市の取り組みや推進計画についてはあまり良く分からない。（40代・男性）
- ・ 食育推進計画の内容が分からない。郡山市の食育計画を知る機会が不十分である。（60代・男性）

食育推進のために必要なこと

- ・ 食育の日は初めて知った。食育のイベントや講演など気軽に参加できるものがあれば良い。（40代・女性）
- ・ 食育という言葉は知っていたが、「食育の日」は知らなかった。誰もが関係する事であるにも関わらず、意外に定着できていないので、もっと行政なども食育について取りあげてほしい。（40代・女性）
- ・ バランスのよい食事や運動が良いとわかっているが、時間がない・方法がわからない人のために、簡単な講座などの機会を増やしてほしい。（50代・女性）
- ・ 小さな頃から正しい知識を持つようになれば、健康寿命の延伸、医療費の削減等、誰もが心身ともに元気で過ごせるようになるのではないかと。（40代・女性）
- ・ 小学生だけでなく、中学生や高校生に食育をして欲しい。公民館などでの食育講座があれば、もっと多くの人に知って貰えると思う。（60代・女性）
- ・ 毎日家族の健康を考えて料理を作っているが、子どもたちは自分の好きな物だけ食べて終わってしまう。小さい時からの食育への興味は大切だと思う。（30代・女性）

食育の取組みについて

- ・ 家族の職業柄、グリーンツーリズムの民間企画を目にすることが多い。今は子どもが小さすぎるので難しいが、今後は家族で参加したいと思う。（30代・女性）
- ・ 子どもが小さい頃は食事を気にかけていたが、社会人になり、生活リズムが揃わず、気にしない生活になった。（40代・女性）
- ・ 収穫体験とマルシェ（市場）を併せたイベントを開催して欲しい。取れたて野菜を使用した料理教室もその場で出来たら嬉しい。（40代・女性）
- ・ 外食の際、塩分表示のある店があると有難い。食品栄養成分表示の書き方がまちまちであり、購入時の比較が不便である。（70代・男性）
- ・ 郡山市は農業県であり、米や鯉、逢瀬ワイナリー等を中核に食育を積極的にアピールし市民参加型の食育推進計画を作成し明るい郡山市にしていきたい。（70代・男性）

その他

- 子どもの肥満対策を積極的にやってほしい。(30代・女性)
- 引っ越ししてきた当初は、外食店がしょっぱい店が多いと感じたが、今は慣れてしまった。気付かないうちに塩分を多く摂取しているかもしれないと思った。(30代・男性)
- 農家でなければ、米や野菜を作る事が全く分からない場合が多いと思う。稲作、畑作の講座の企画が有れば、特に親子連れで参加する人が多いのではないか。(40代・男性)
- 市民が食を考えることによって、より健康に生活できるようになれば良いと思う。
(40代・男性)
- 食材を育む太陽と大地に感謝。食材に感謝。食事を作る人に感謝。(70代・男性)

2019年度まちづくりネットモニター第7回調査結果 テーマ「郡山の農林水産物について」

郡山市では、農林水産業者の経営向上や、地域活力の向上を目的として、郡山産米「あさか舞」や鯉をはじめとした農林水産物の消費拡大や地産地消(※1)、ブランド化(※2)を推進しています。

消費者である市民の皆様のニーズや市の農林水産物に対する意識を把握し、今後の市の施策の参考とさせていただきますため、アンケートを実施しましたので、その結果についてお知らせします。

(園芸畜産振興課)

(※1)地域生産・地域消費の略語で、ある地域で作られた農林水産物をその地域内で消費すること。

(※2)ある農林水産物が、他の産地の同一商品と明確に区別され、高品質であると広く認識されている状態。

調査概要

- 調査期間 令和元年7月17日(水)～7月26日(金) (10日間)
- 回答方法 専用ウェブサイトから回答を送信する。
- モニター数 360名 (男性 159名 女性 201名)
- 回答者数 315名 (男性 142名 女性 173名)
- 回答率 87.5%

【分析】

《回答者内訳(人)》

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
男性	3	4	15	31	27	18	37	7	142
女性	2	9	46	65	36	13	2	0	173
合計	5	13	61	96	63	31	39	7	315

《米の入手先、産地について》

・知人、親戚や農家から買う又はもらう人の割合は54.9%、スーパーやネットで購入する人の割合は35.9%、郡山産を含めた福島県産米を食べている人の割合は77.8%であった。

《ASAKAMAI 887について》

・知っている人の割合は71.8%であった。また、購入したい人の割合は38.1%であった。

《郡山市の鯉について》

・市の特産品が鯉であると認知している人は79.7%であった。
・1年以内に鯉を食べた人の割合は29.5%で、その内92.5%の人がまた食べたいと回答した。

《郡山市の農林水産物のブランド力について》

・「あさか舞」(48.9%)、「阿久津曲がりねぎ」(32.7%)、「鯉」(27.3%)、「うねめ牛」(14.3%)の順に回答が多かった。
・ブランド力の要素として「味」、「生産者のこだわり」、「産地名」の順に回答が多かった。

【考察】

・郡山産米「あさか舞」について、他商品と比べブランド力があると認識している人が48.9%と多かったが、普段食べている人の割合が34.9%だったため、さらに地元消費を増やすため引き続きPRを継続していく必要がある。

・「ASAKAMAI 887」について、認知度はまずまずであったが、その内、購入したいという割合が38.1%と低かったことから、値段の理由、生産の工程などをさらに発信していく必要がある。

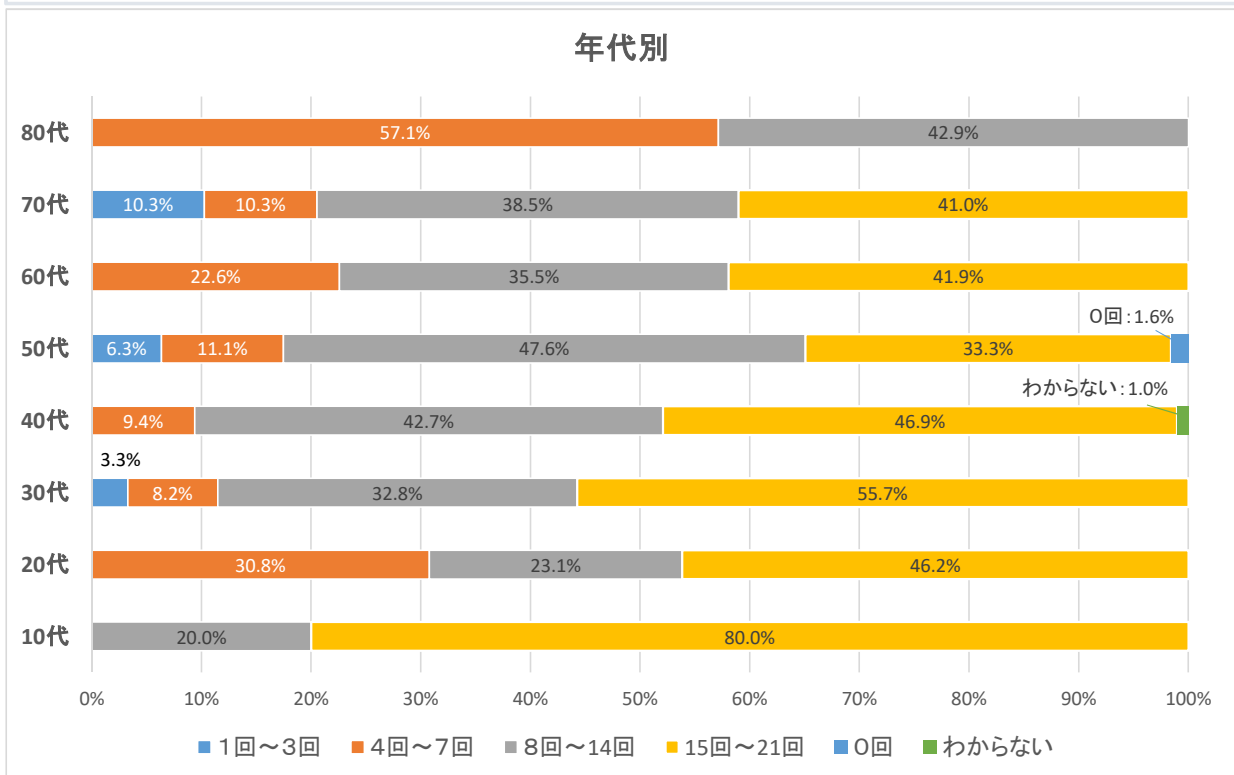
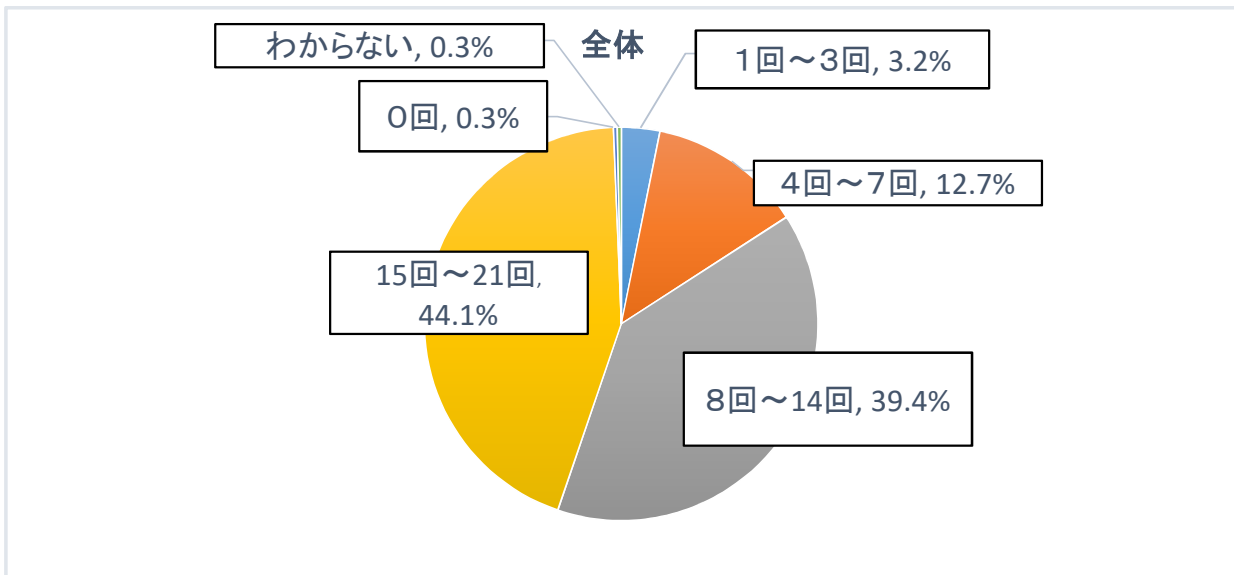
・「鯉」について、「鯉に恋する郡山」プロジェクト等の効果で、特産品としての認知度は高かったが、実際に食べたことのある人の割合は低かったことから、販売店、飲食店や試食できる機会を増やす必要がある。

・郡山の農林水産物について、「あさか舞」、「阿久津曲がりねぎ」、「鯉」の順にブランド力がある商品として認識されているが、いずれも50%以下であり、また、22.2%の人が「特に無し」と回答していたため、今後もPRについては、市外だけでなく市内へも並行して進めていく必要がある。

第1章 郡山市のお米について

問1 この1週間(3食×7日=21食)で、主食に米を何回食べましたか？(1つ選択)

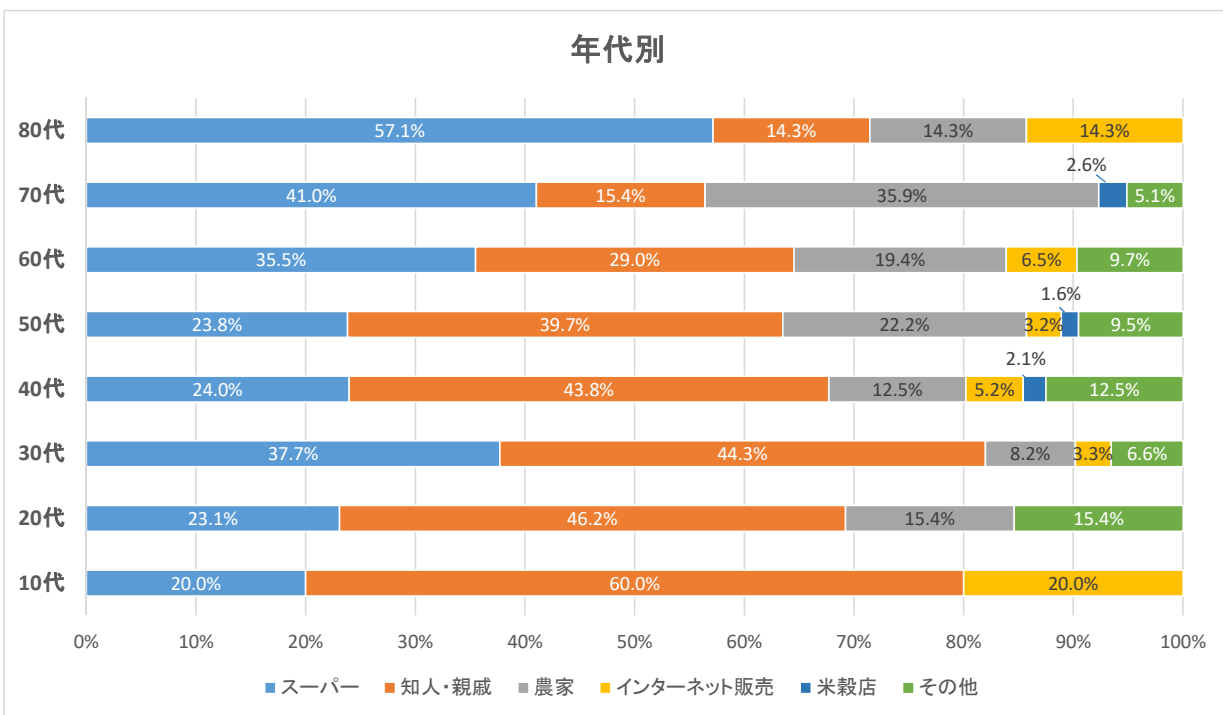
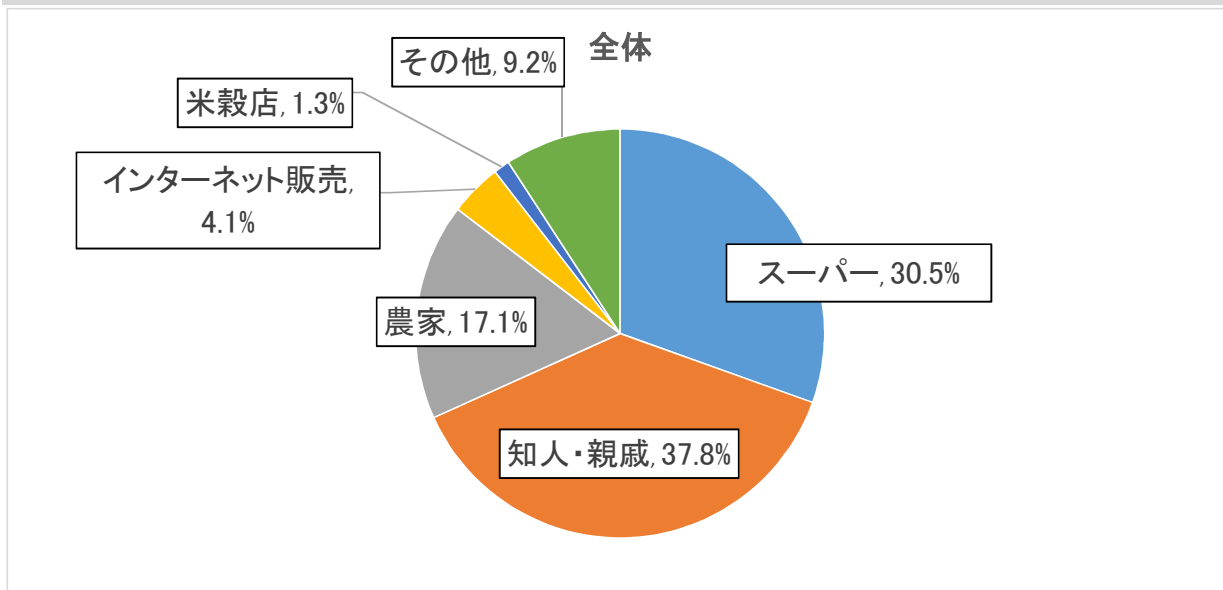
(回答者：315人)



米食の頻度について、全体の44.1%の人が1週間で「15回～21回」、39.4%の人が「8回～14回」と回答。「7回以下」と回答した人は全体の約16%程度であった。
年代別に見ると、「15回～21回」と回答した人の割合は10代(80%)が最も高く、次いで30代(55.7%)、40代(46.9%)であり、子供及び子育て世代の米食率が高かった。

問2 普段、どこからお米を入手(購入、又はもらう)していますか？(1つ選択)

(回答者：315人)



お米の購入(入手)先として、全体の37.8%の人が「知人・親戚」、17.1%の人が「農家」からと回答しており、いわゆる縁故米の割合は54.9%であった。

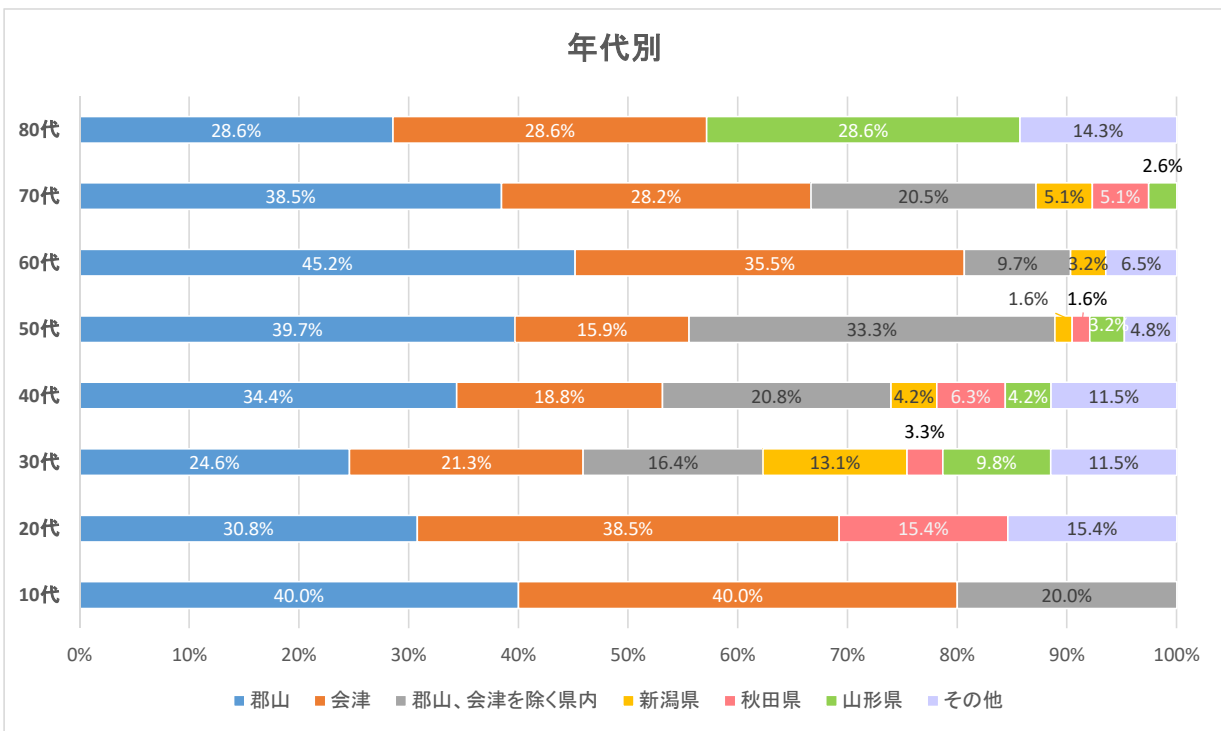
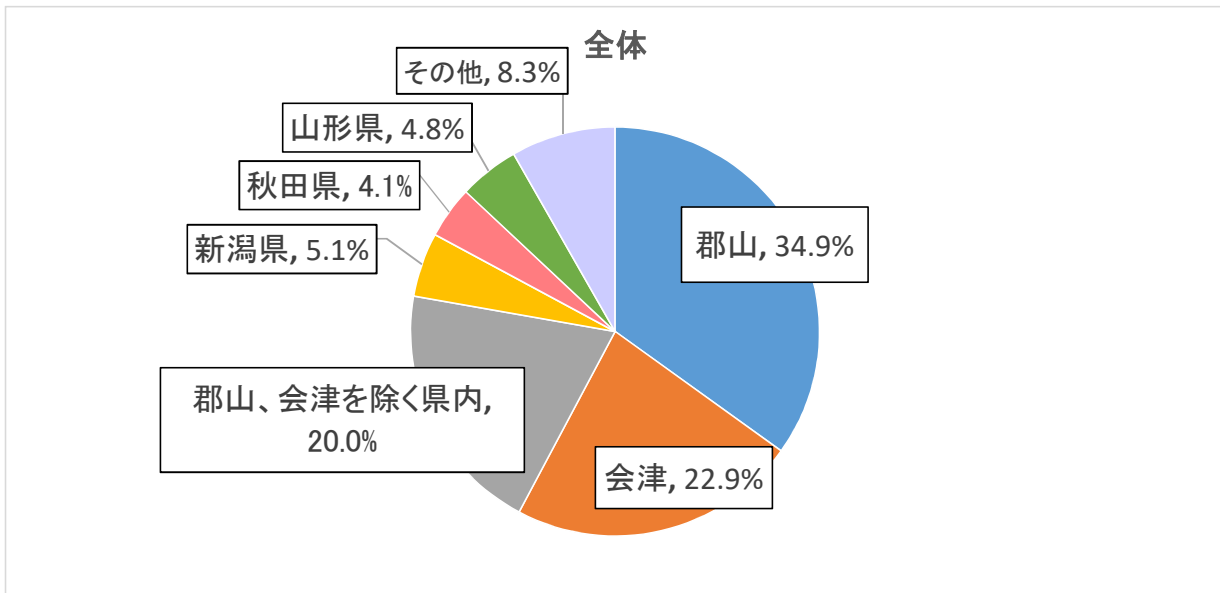
また、30.5%の人が「スーパー」、4.1%の人が「インターネット販売」、1.3%の人が「米穀店」と回答していて、合わせて35.9%と、縁故米の割合を下回っていた。

「その他」の回答の中では、「自分で作っている」、「直売所で購入」という人が多かった。

年代別では、年齢が高くなるにつれてスーパーで購入する人の割合が高くなる傾向が見られた。

問3 普段食べているお米の産地はどこですか？【1つ選択】

(回答者：315人)

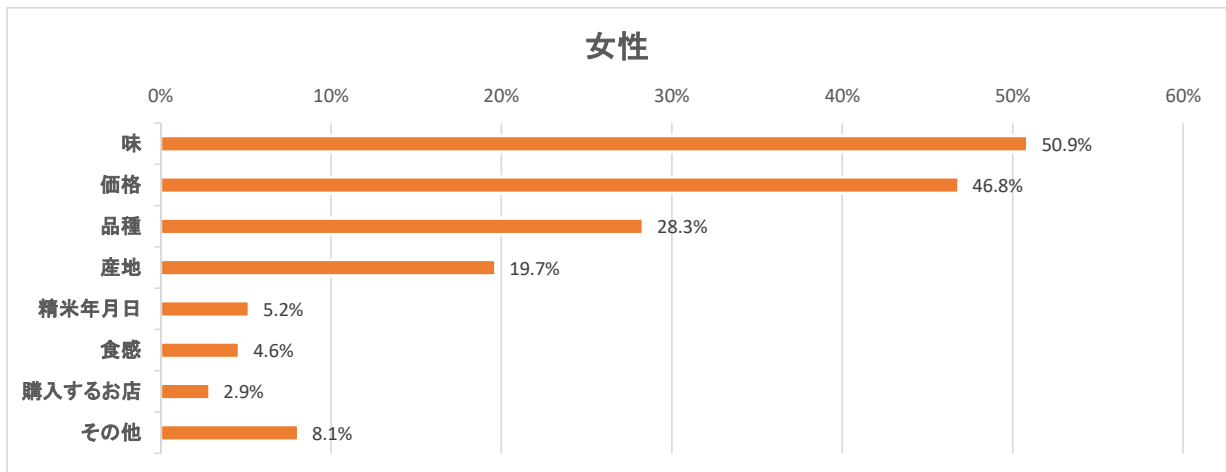
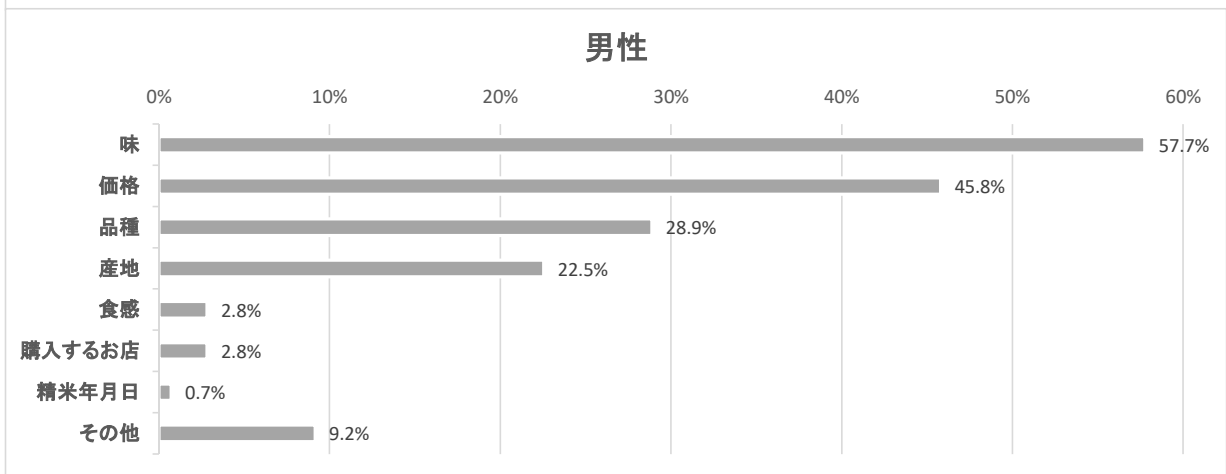
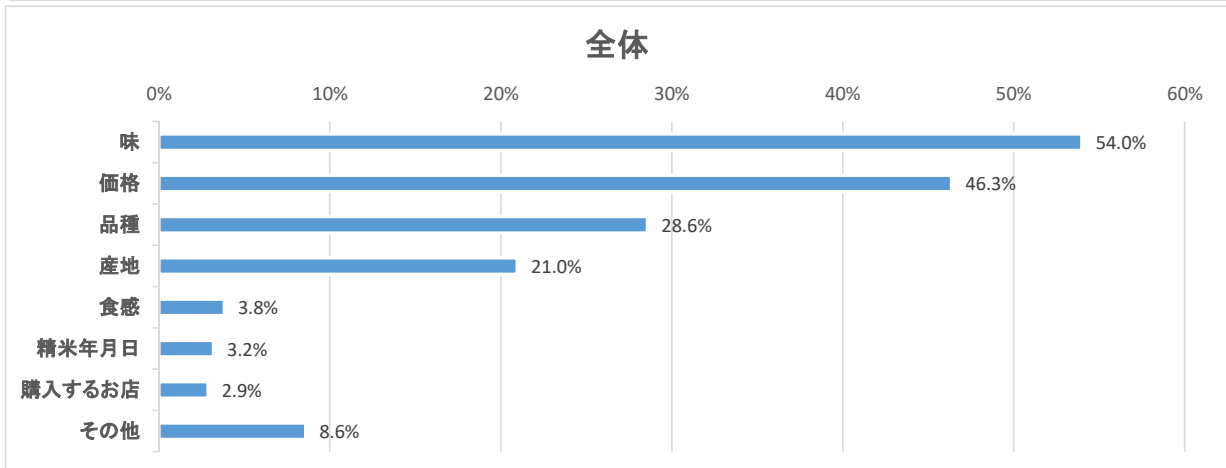


普段食べているお米の産地として、「郡山」が34.9%、「会津」が22.9%、「郡山、会津を除く県内」と回答した人の割合が20.0%となり、地元郡山産の米を食べている人の割合が最も高かった。郡山産米を含めた福島県産米を食べている人の割合は77.8%であった。

年代別に見ると、郡山産米を食べている人の割合は60代が45.2%と最も多く、次いで10代、50代、70代であった。また、県外産米を食べている人の割合は30代が最も多かった。

問4 お米は何を基準に選びますか？【2つまで選択可】

(回答者：315人)



お米を選ぶ基準として、「味」が54.0%、次いで「価格」が46.3%、「品種」が28.6%、「産地」が21.0%の順番で回答があった。

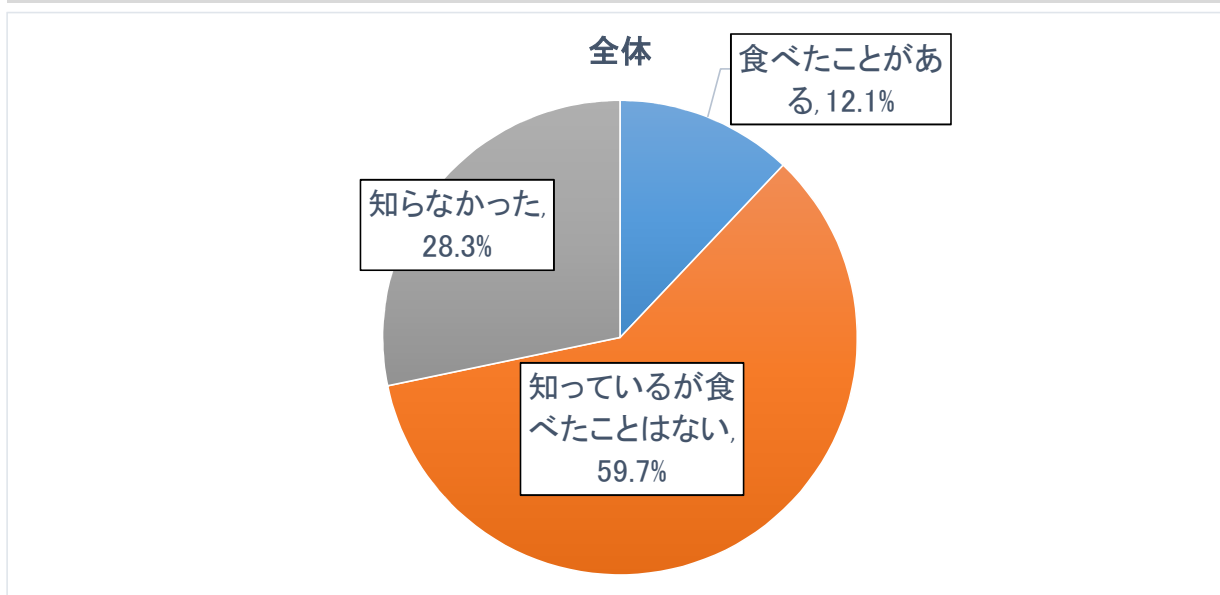
性別にみても大きな違いは無いが、精米年月日については女性のほうが気にする割合が多いという結果が出た。

「その他」の回答として、「無洗米かどうか」という回答が多かった。

問5 郡山産米「あさか舞」の最上級ブランド米「ASAKAMAI 887」をご存知ですか？

【1つ選択】

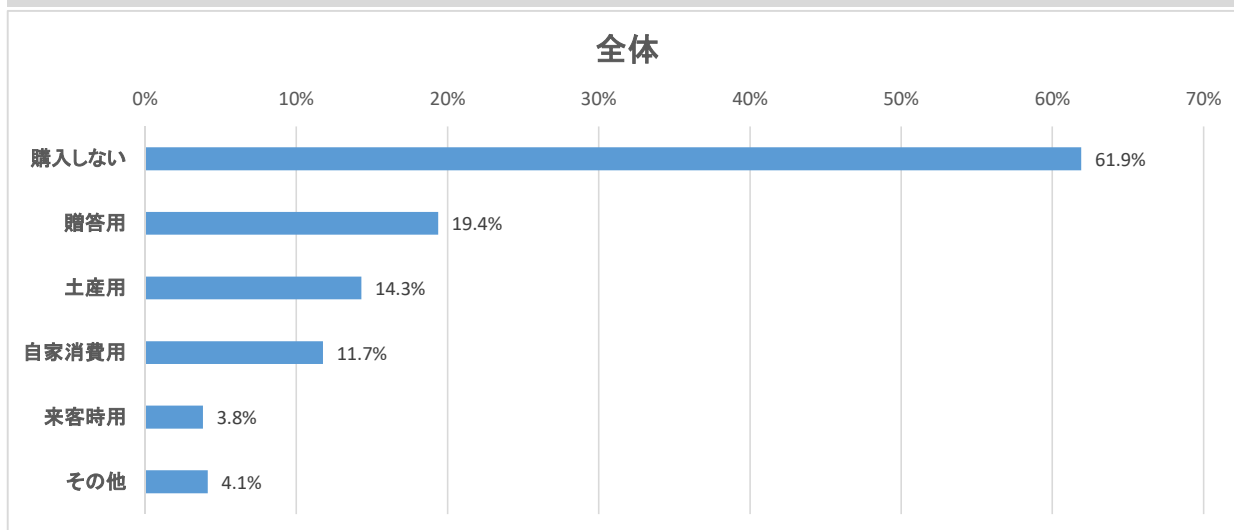
(回答者：315人)

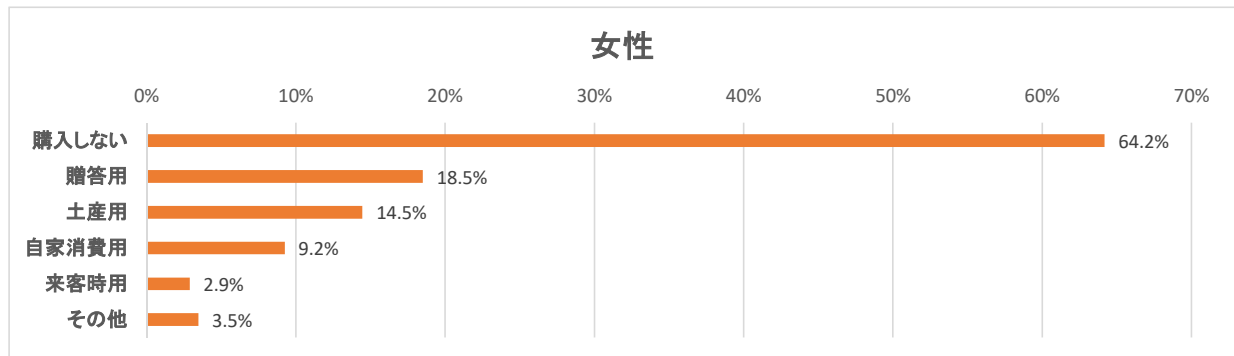
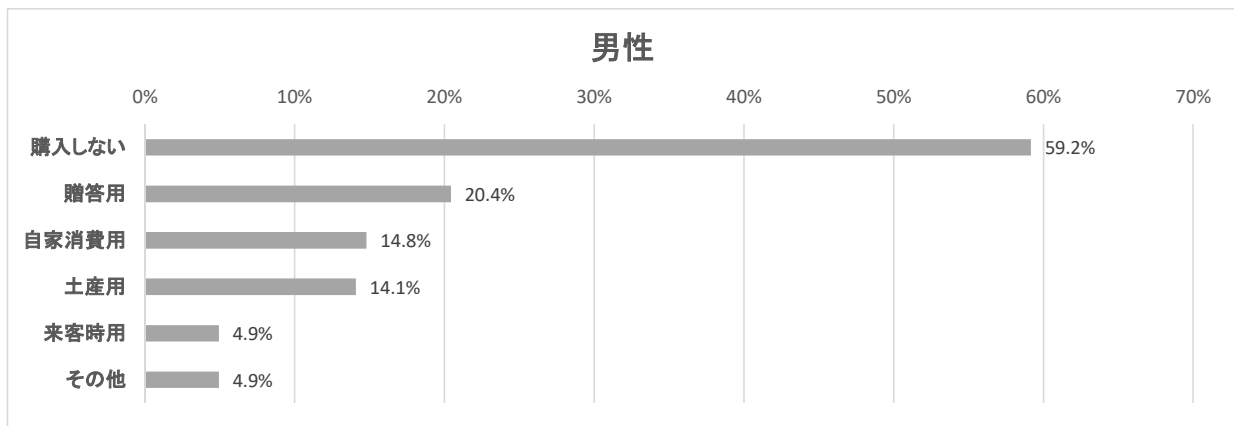


「ASAKAMAI 887」について、「食べたことがある」と回答した人の割合は12.1%、「知っているが食べたことはない」の人の割合は59.7%であり、「知らなかった」の割合は28.3%であった。名前を知っている人の割合は71.8%であり、一定の認知度があることがわかった。

問6 「ASAKAMAI 887」のような高額な(2キロ2,600円程度)のブランド米を購入したいですか？その場合、どのような用途に使用しますか？【2つまで選択可】

(回答者：315人)





「ASAKAMAI 887」のような高額なブランド米について、「購入しない」という回答の割合が最も多く、61.9%であった。

購入する場合の用途として、「贈答用」と回答した人の割合が19.4%と最も多く、次いで「土産用」が14.3%、「自家消費用」が11.7%であった。

その他の意見として、「調理した状態で食べられる飲食店があれば食べてみたい」という意見があった。高額である理由や、高額であっても外部へ贈りたいと思われる商品であることを伝えるPRに、さらに力を入れていく必要がある。

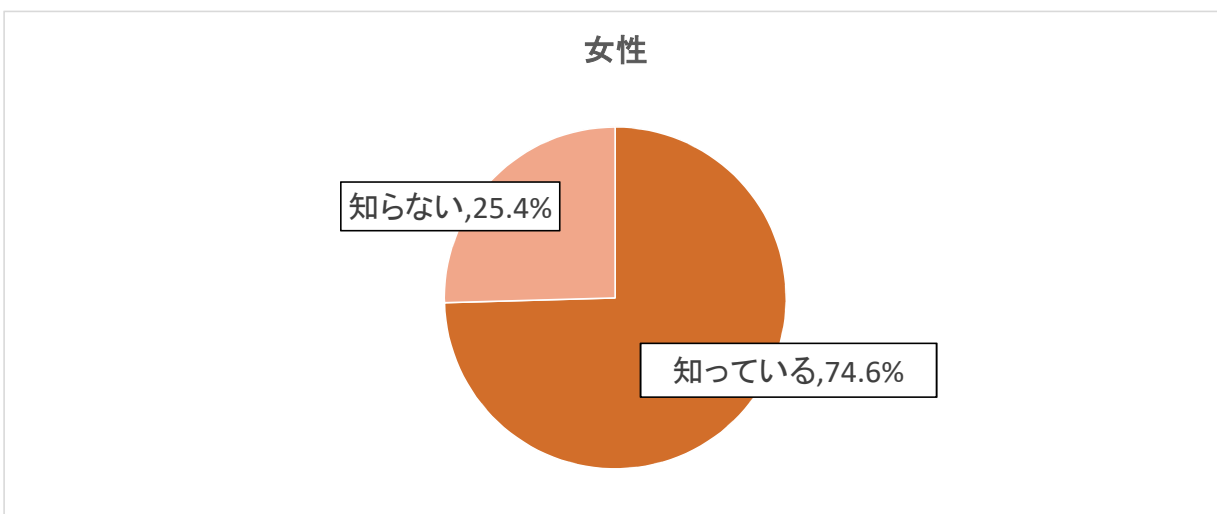
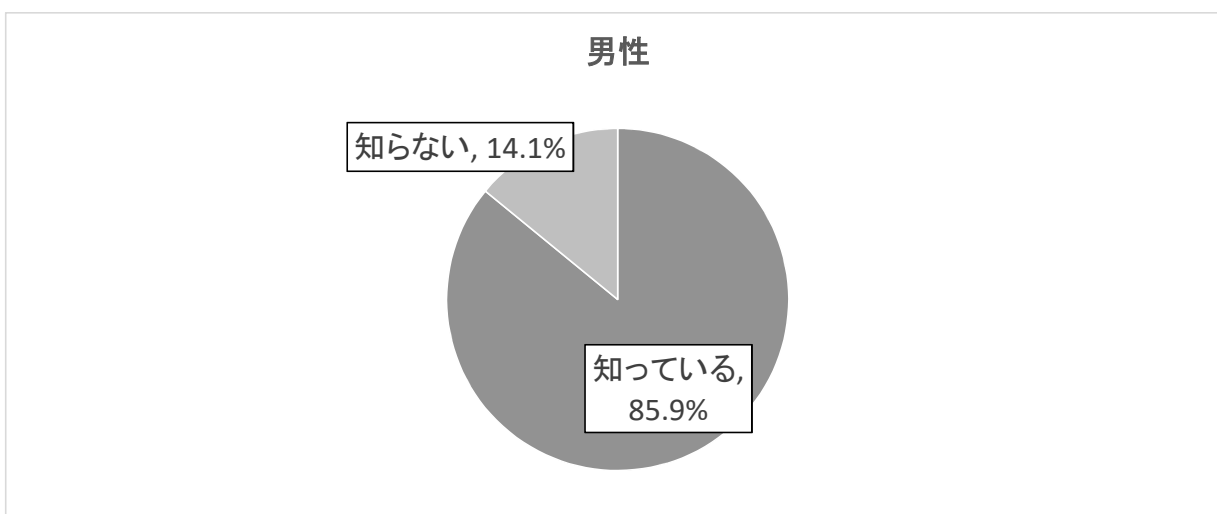
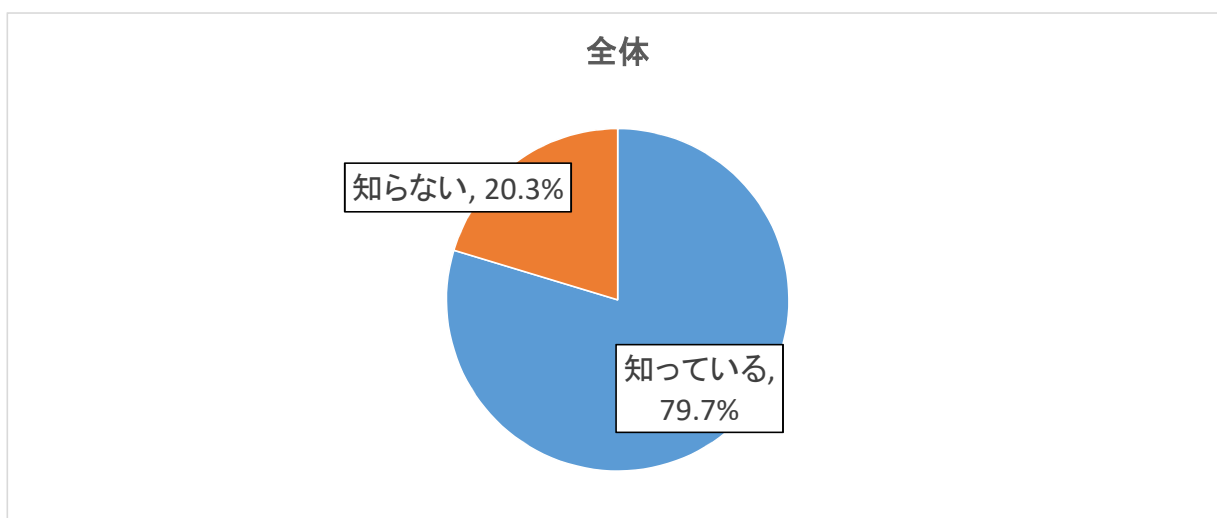
問7 郡山市のお米について、ご意見がございましたら、ご自由にお書きください。 (自由記述)

- ・地元のお米を一般的に食べられるように、多少お安い価格であればいいかなと思います。(60代・女性)
- ・ASAKAMAI887の家庭用にいただける量の販売を待ち望んでおりました！(60代・女性)
- ・「あさか舞」、「ASAKAMAI 887」が完全にブランド米として認知されるように、農家、行政と市民が三位一体となり推進をして行きたい。(70代・男性)
- ・あさか舞は食べたことがあります。美味しかったです。全国的に知名度が低いのが残念です。(40代・男性)
- ・スーパーなどでよく見かけます。美味しいのだろうとは思いますが、自分の好みに合っているのかが分からないので、購入したことはありません。試食などの機会をまめに行って欲しいです。(40代・女性)
- ・県外の知人にも郡山産コシヒカリの評判が良いので送っている。美味しい。(40代・男性)
- ・会津出身なので会津米に親近感があるが、あさか舞も美味しいと思います。(60代・女性)

第2章 郡山市の鯉について

問8 郡山市の特産品が鯉であり、市町村別の生産量が日本一であることをご存知ですか？
(1つ選択)

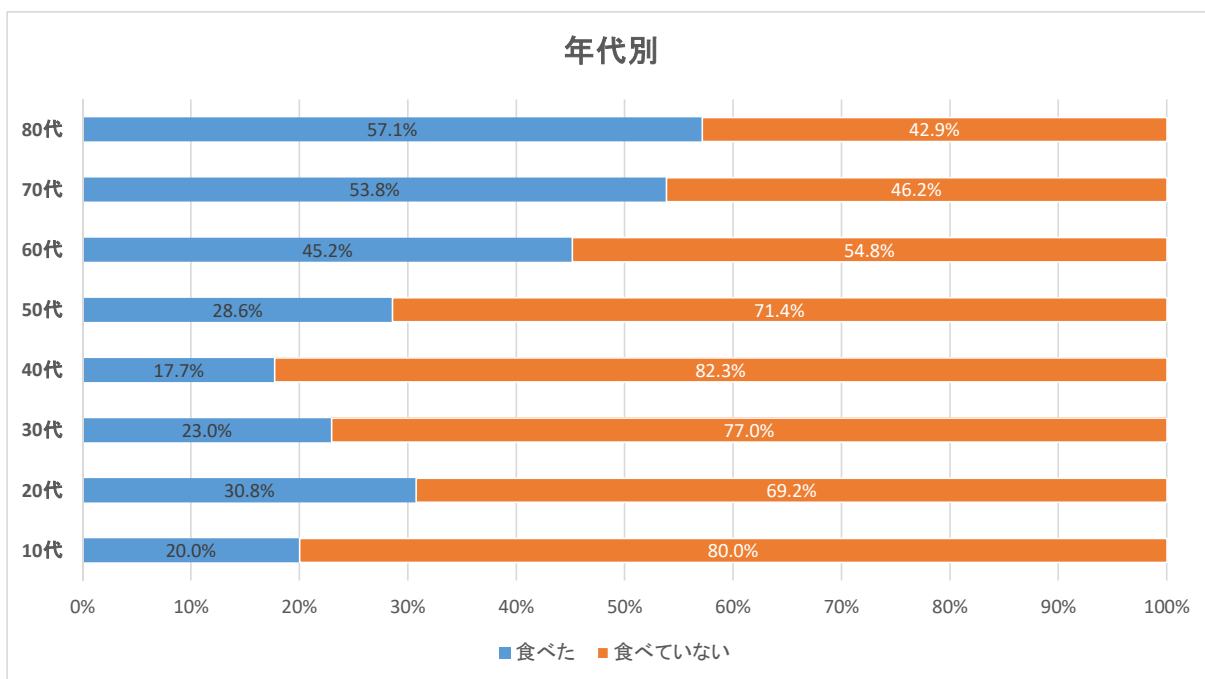
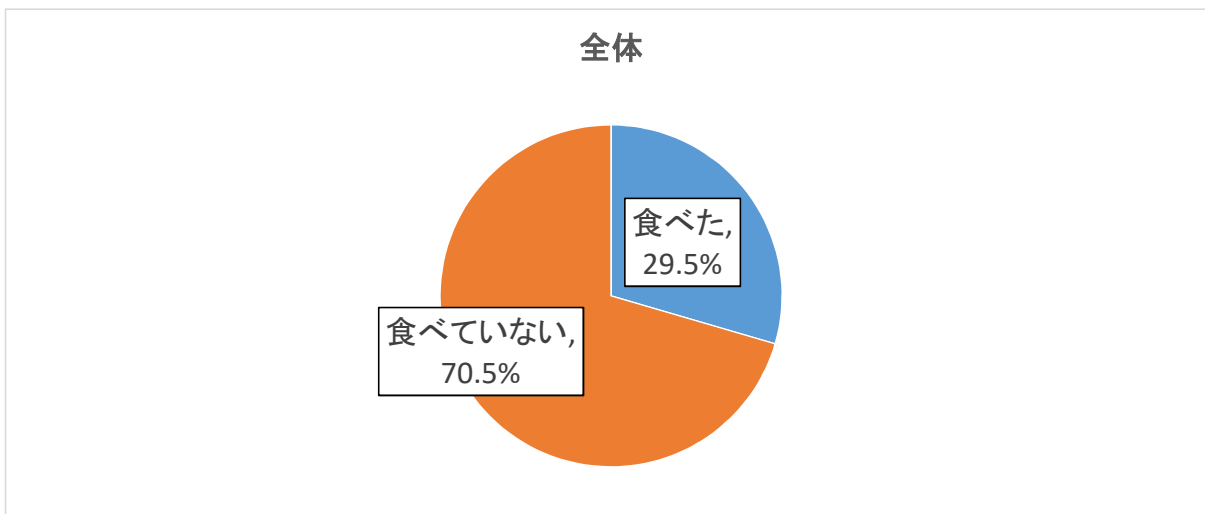
(回答者：315人)



郡山市の鯉の生産量について、「知っている」と回答した人の割合は全体で79.7%であった。男女別に見ると男性が85.9%、女性が74.6%と、認知度に11.3ポイントの差があった。

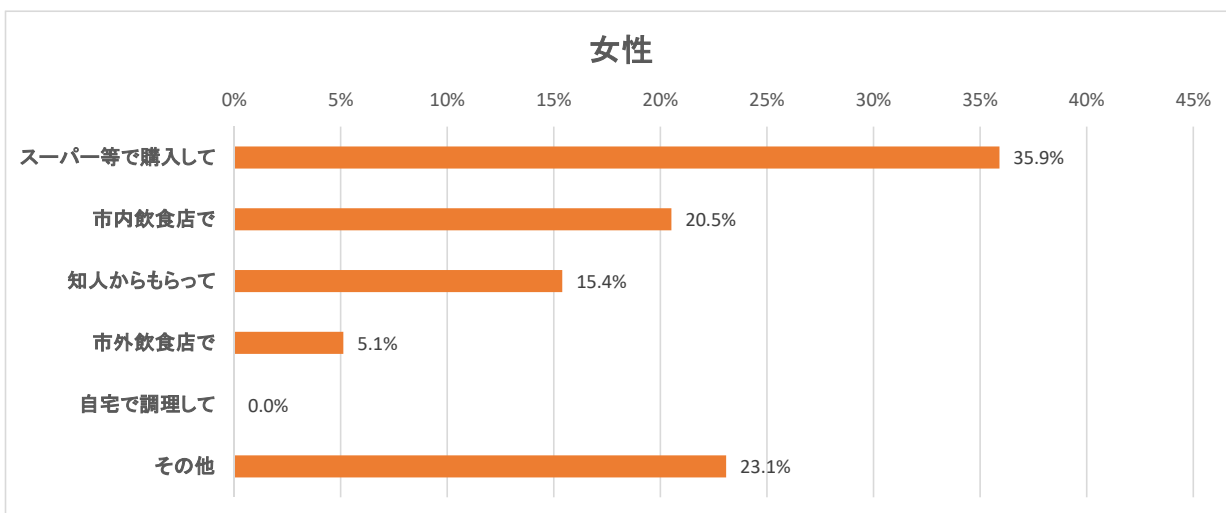
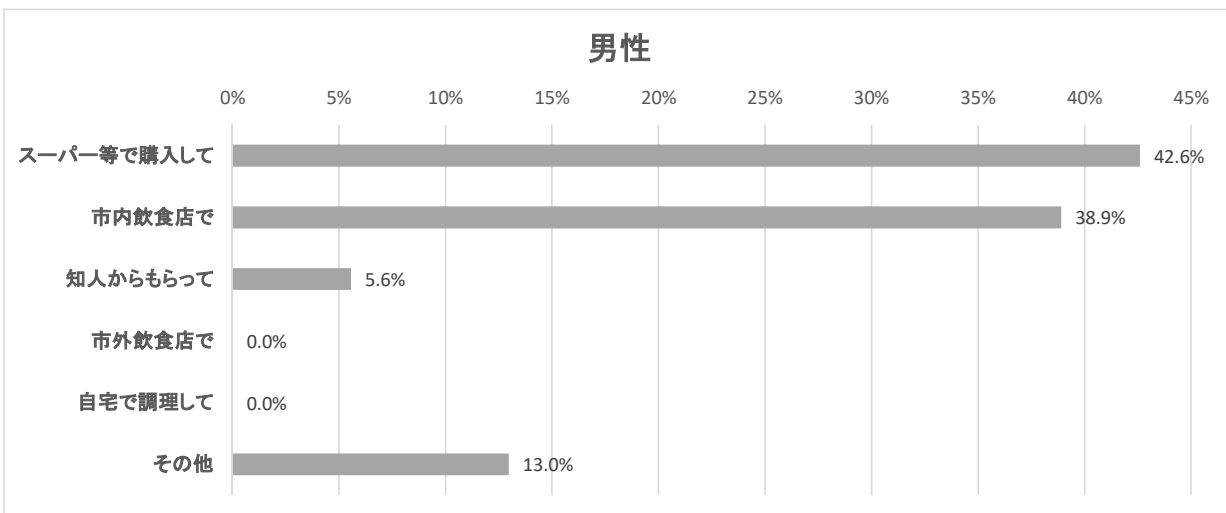
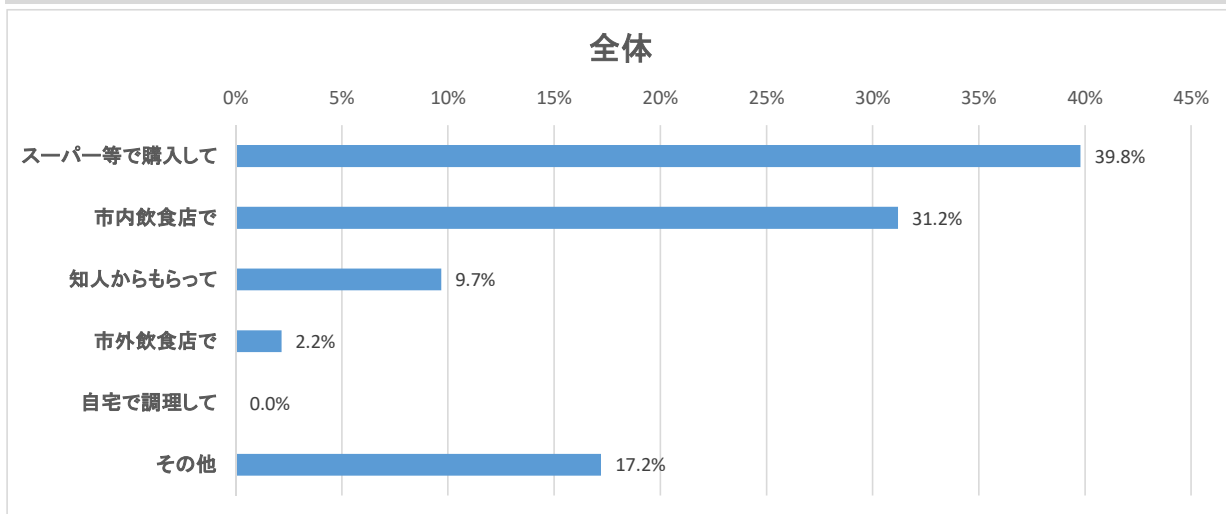
問9 最近1年以内に鯉を食べましたか？ 【1つ選択】

(回答者：315人)



1年以内に鯉を食べた人の割合は全体で29.5%、食べていない人の割合は70.5%であった。
年代別では、年齢が高いほど食べた人の割合が多くなる傾向があり、70代、80代では50%を超えていた。

問10 問9で鯉を「食べた」とお答えした方に伺います。どちらで食べましたか？ 【1つ選択】
(回答者：93人)

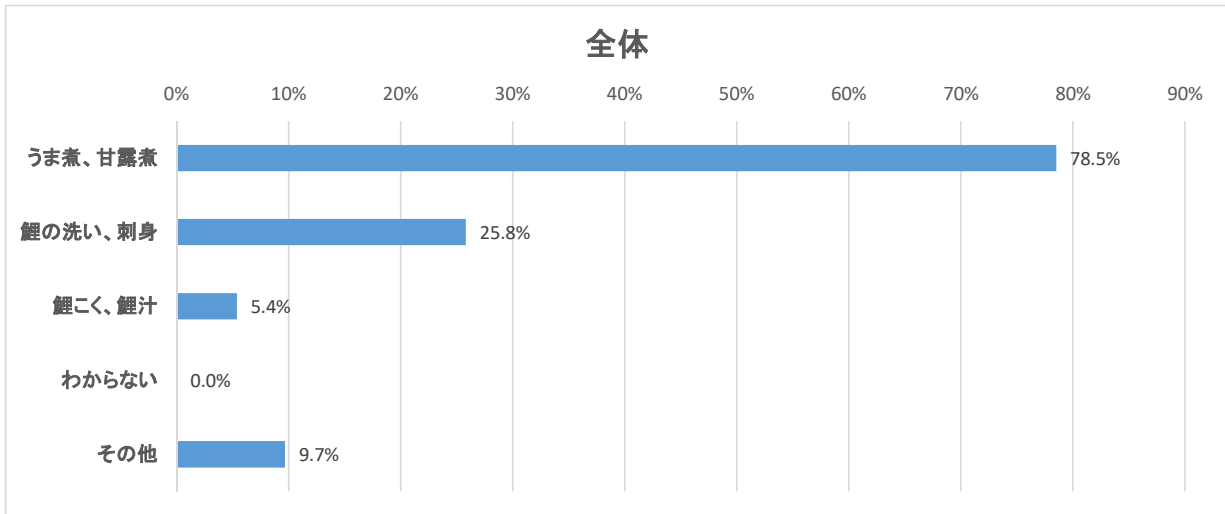


鯉を食べた場所として、39.8%の人が「スーパー等で購入」、31.2%の人が「市内飲食店で」と回答。性別では、「市内飲食店で」と回答した人は、男性が38.9%、女性が20.5%と男性が女性より18.4ポイント高かった。
「その他」として、「市内の旅館で」、「法事の引き出物で」、「学校給食で」との回答があった。
鯉の消費量を増やすためには、気軽に食べられる飲食店やスーパーをさらに増やす施策を行っていく必要がある。

問11 問9で鯉を「食べた」とお答えした方に伺います。どのようなメニューを食べましたか？

【2つまで選択可】

(回答者：93人)

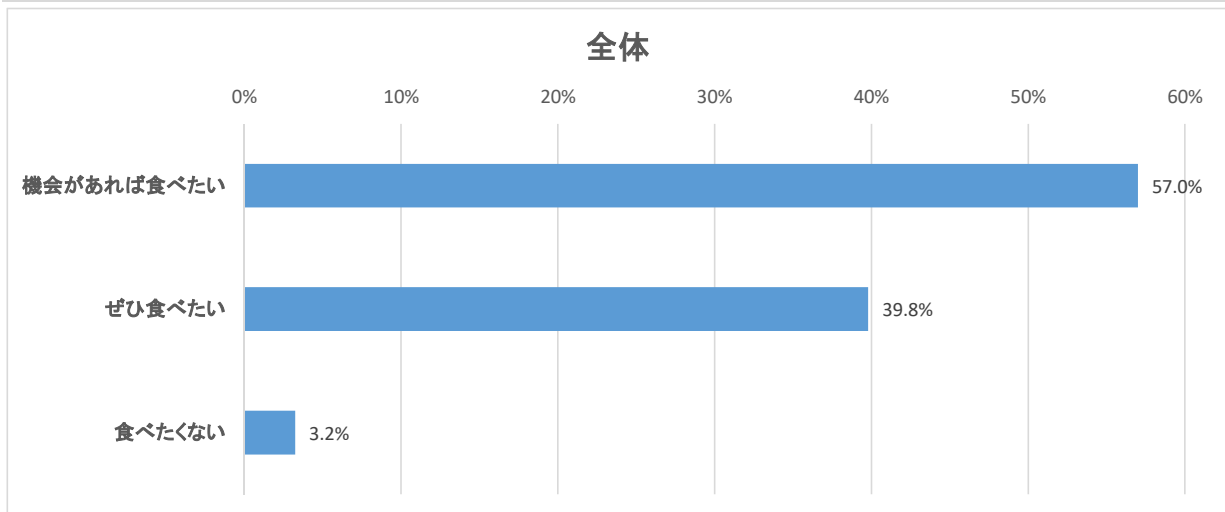


食べた鯉のメニューとして、78.5%の人が「うま煮、甘露煮」、25.8%の人が「鯉の洗い、刺身」と回答した。
「その他」として、「寿司」、「アヒージョ」、「なめろう」、「揚げ物」などの回答があった。

問12 問9で鯉を「食べた」とお答えした方に伺います。また食べたいと思いますか。

【1つ選択】

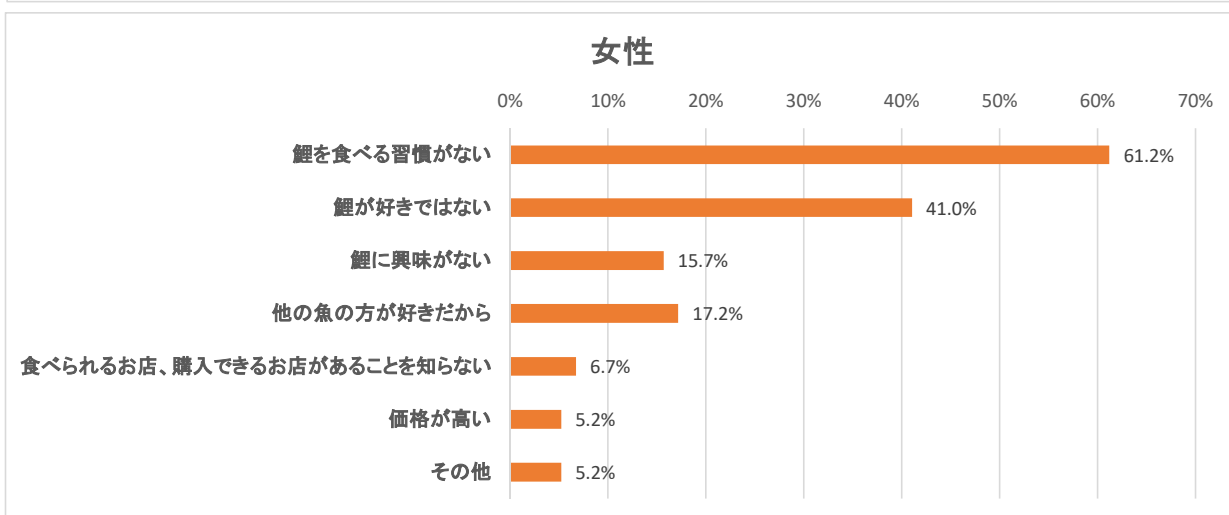
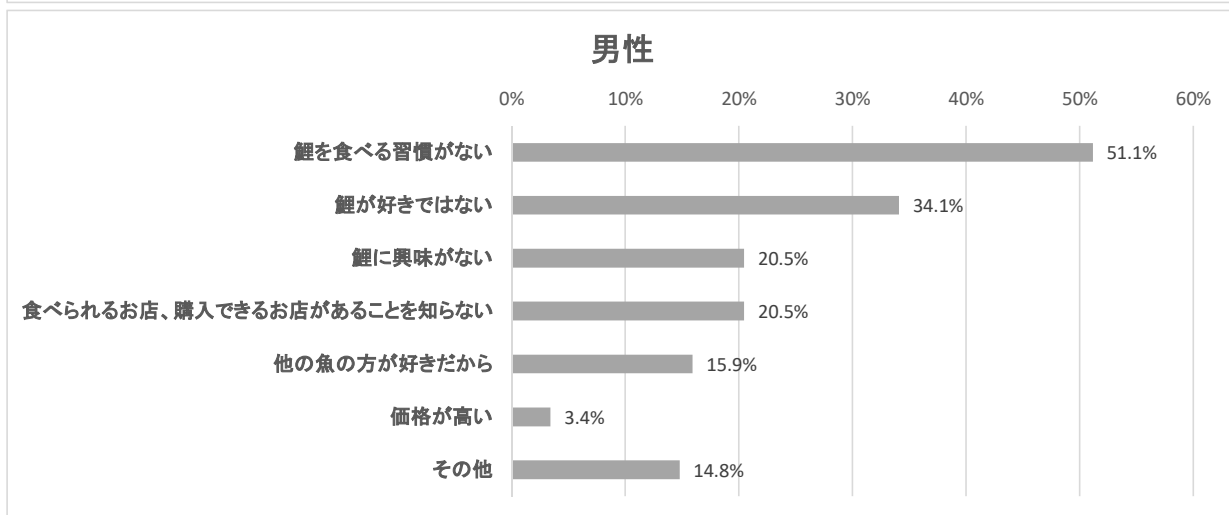
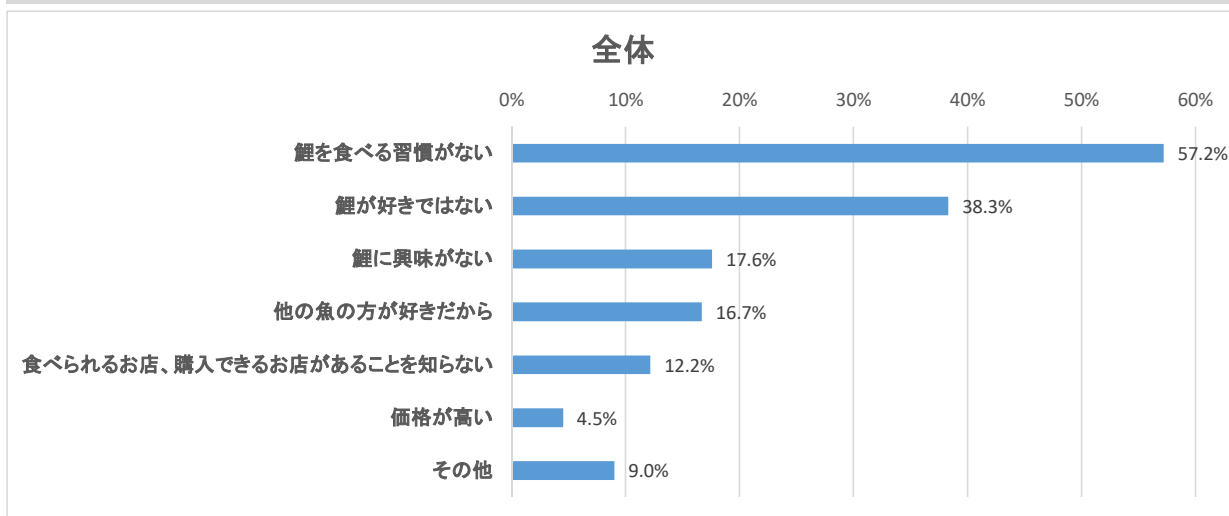
(回答者：93人)



57.0%の人が「機会があれば食べたい」、39.8%の人が鯉をまた「ぜひ食べたい」と回答し、「食べたくない」と回答した人は3.2%であった。

問13 問9で「食べていない」とお答えした方に伺います。それはどのような理由ですか？
【2つまで選択可】

(回答者：222人)



鯉を食べていない理由として、全体の57.2%の人が「鯉を食べる習慣がない」、と回答し過半数を超えていた。また、38.3%の人が「鯉が好きではない」、17.6%の人が「鯉に興味がない」と回答し、合わせて55.9%の人が鯉そのものにネガティブなイメージを持っていた。

性別では、「鯉を食べる習慣がない」と回答した人は、女性が61.2%、男性が51.1%と女性が男性より10.1ポイント高く、「食べられるお店、購入できるお店があることを知らない」と回答した人は男性が女性より13.8ポイント高かった。

「その他」として、「昔学校給食で食べておいしくなかったため、それ以来食べていない」、「おいしいイメージがない」、「そもそも食べられることを知らなかった」などの回答があった。

鯉のネガティブなイメージや馴染みの薄さを改善するため、気軽に食べられる製品の開発等を進める必要がある。

問14 郡山市の鯉について、ご意見がございましたら、ご自由にお書きください。（自由記述）

- ・他県で初めて鯉を食べた時泥臭くて苦手だったが、郡山の鯉は臭みがなく美味しかった。（30代・女性）
- ・調理法についてももう少し研究した方が良いと思う。うま煮は米沢に、洗いや塩焼きは佐久に及ばないのではと感じる。（70代・男性）
- ・子どもが学校の給食に出て、美味しかったと言っていました。そのおかげで鯉に馴染んでいます。子どもに慣れさせるのはいいと思います。（60代・女性）
- ・地域的には有名な産地として根付いていると思う。全国的にアピールを強調すべき。（50代・女性）
- ・鯉特有の臭みなどがなくなるような、お菓子（煎餅など）なら、お土産にいいかもしれない。（30代・女性）
- ・鯉を食べられる店が増えると良いです。（10代・男性）
- ・「鯉に恋してこおりやま」のキャンペーンはとっていい事だと思います。マンネリ化せずに、長続き出来るといいですね。具体的な内容については広報などで募るのも良いかもしれない。（60代・女性）
- ・どうしても鯉を食べることに抵抗があります。イメージで食わず嫌いなので、無料で試食できる機会があって美味しいと思えば自ら食べるようになるかもしれません。（30代・女性）
- ・鯉が特産品だということは知っていたが、生産量日本一だとは知らなかった。スーパーで売っているのは、鯉こくのみなので、日常食べるには習慣にならない。お惣菜などで別の形のものがあれば習慣になると思う。（40代・女性）
- ・昔から郡山市民は鯉の養殖が盛んであることを知っているが、食べる習慣は全く定着していない。学校給食に出す、市内のどこの料理店に行っても、常にメニューにあるなどもっとアピールするような政策をするべきではないか。（40代・男性）

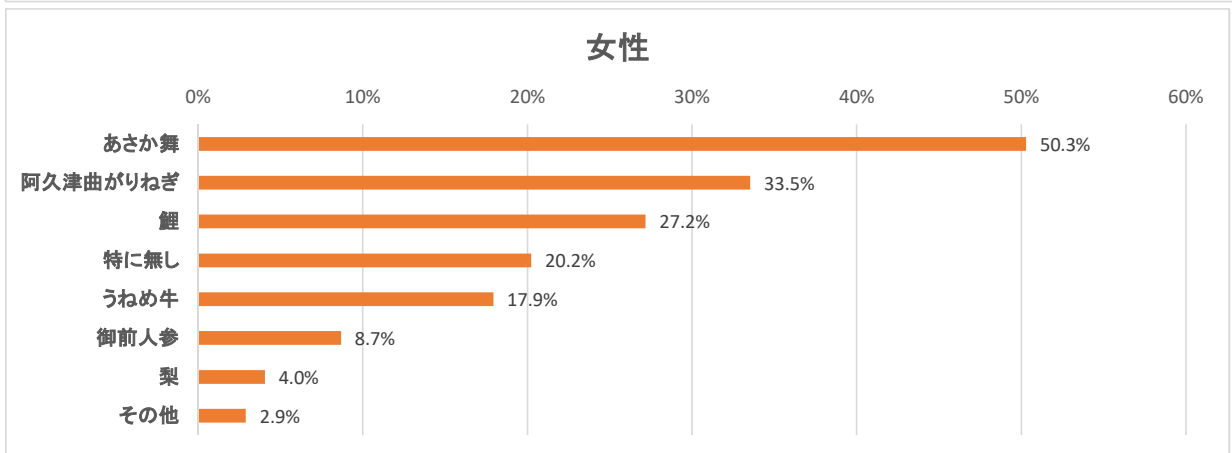
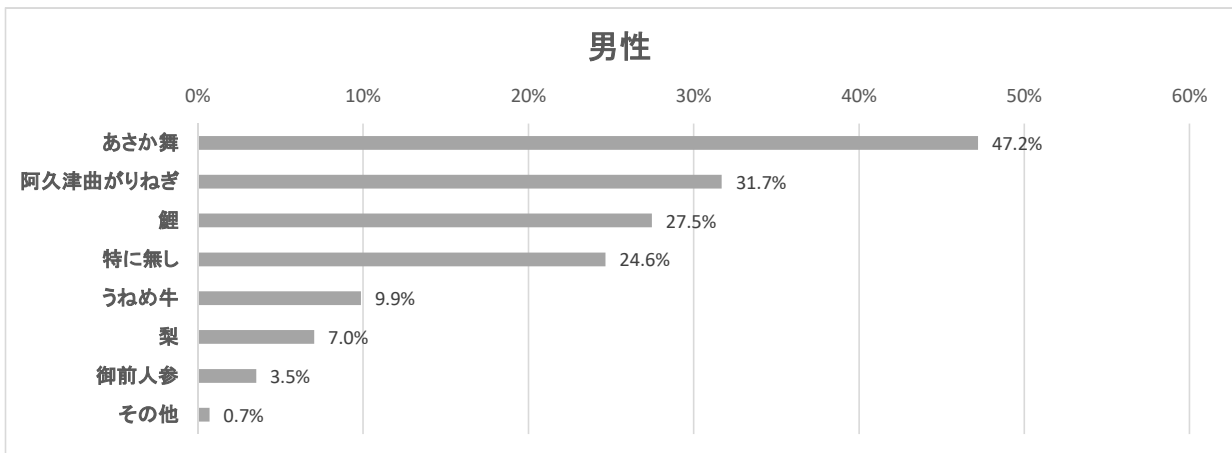
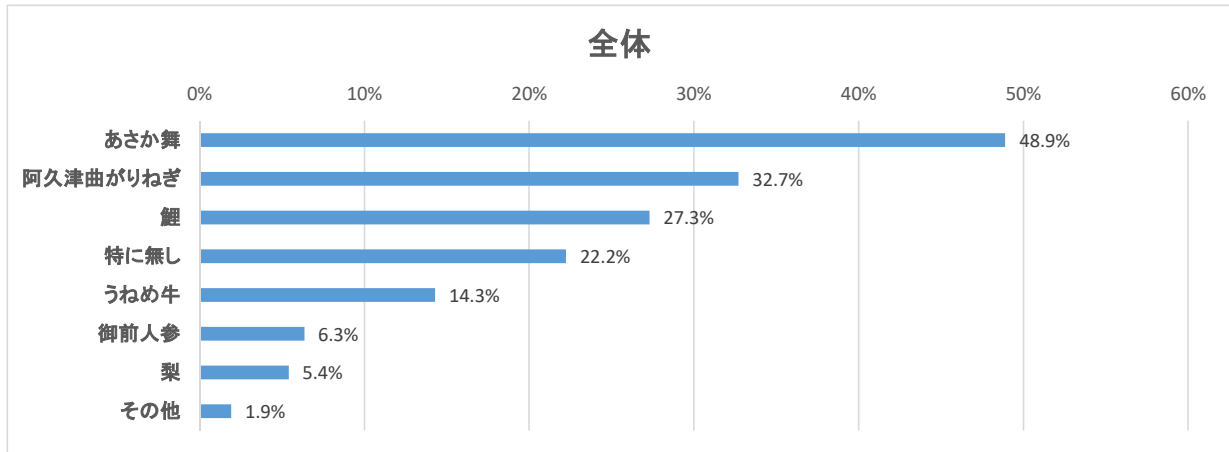
第3章 農林水産物のブランド化について

問15 郡山でブランド力(※)がある農林水産物といえば何を思い浮かべますか？

【2つまで選択可】

※この設問で、「ブランド力がある」とは、他の産地の同一製品と明確に区別され、高品質であると広く認識されている状態を指します。

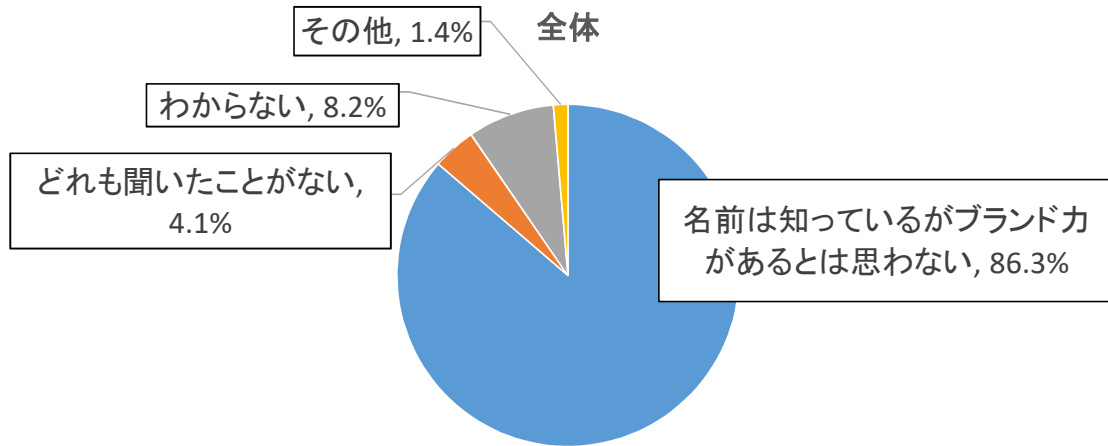
(回答者：315人)



郡山でブランド力のある農林水産物として、全体の48.9%の人が「あさか舞」、32.7%の人が「阿久津曲がりねぎ」、27.3%の人が「鯉」と回答した。また、22.2%の人が「特に無し」と回答した。性別では大きな差は見られなかった。「その他」の回答として、「桃」、「布引大根」、「逢瀬ワイナリーのワイン」などの回答があった。

問16 問15で「特に無し」とお答えした方に伺います。それはどのような理由ですか？
【1つ選択】

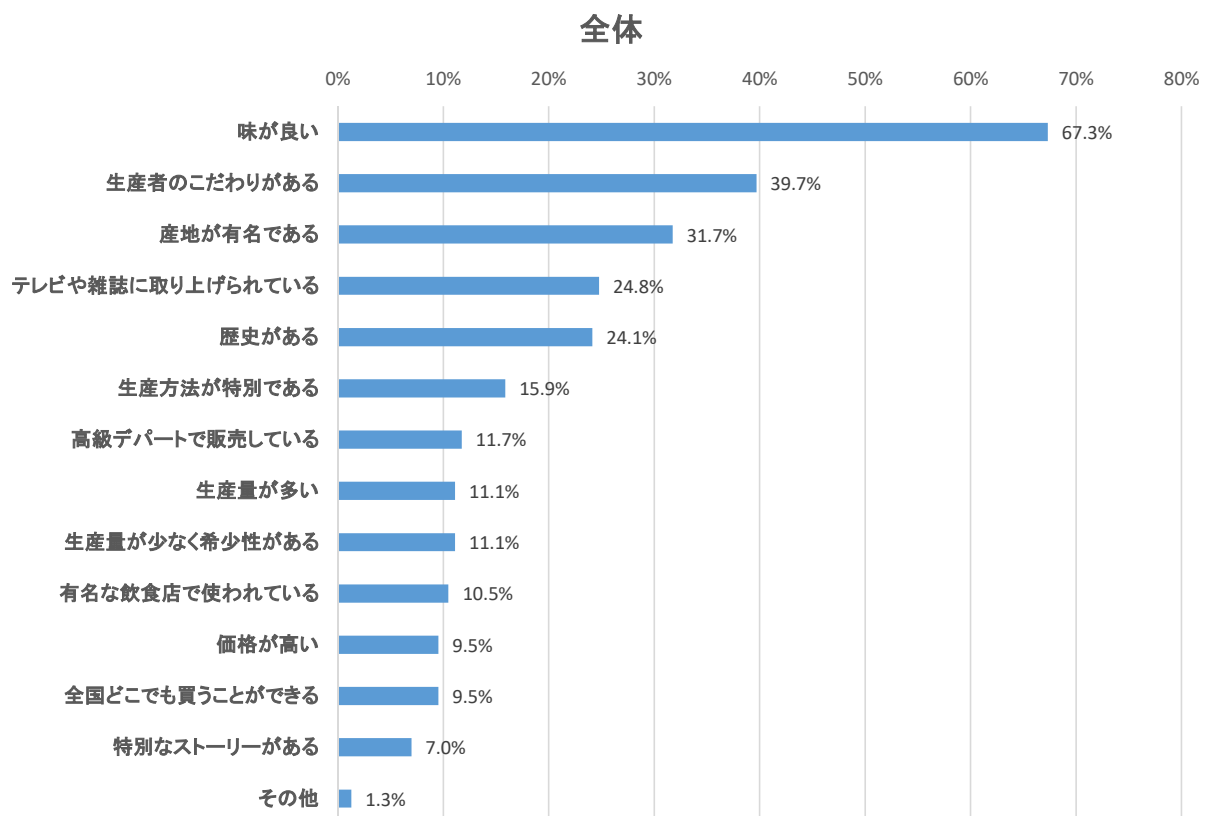
(回答者：73人)

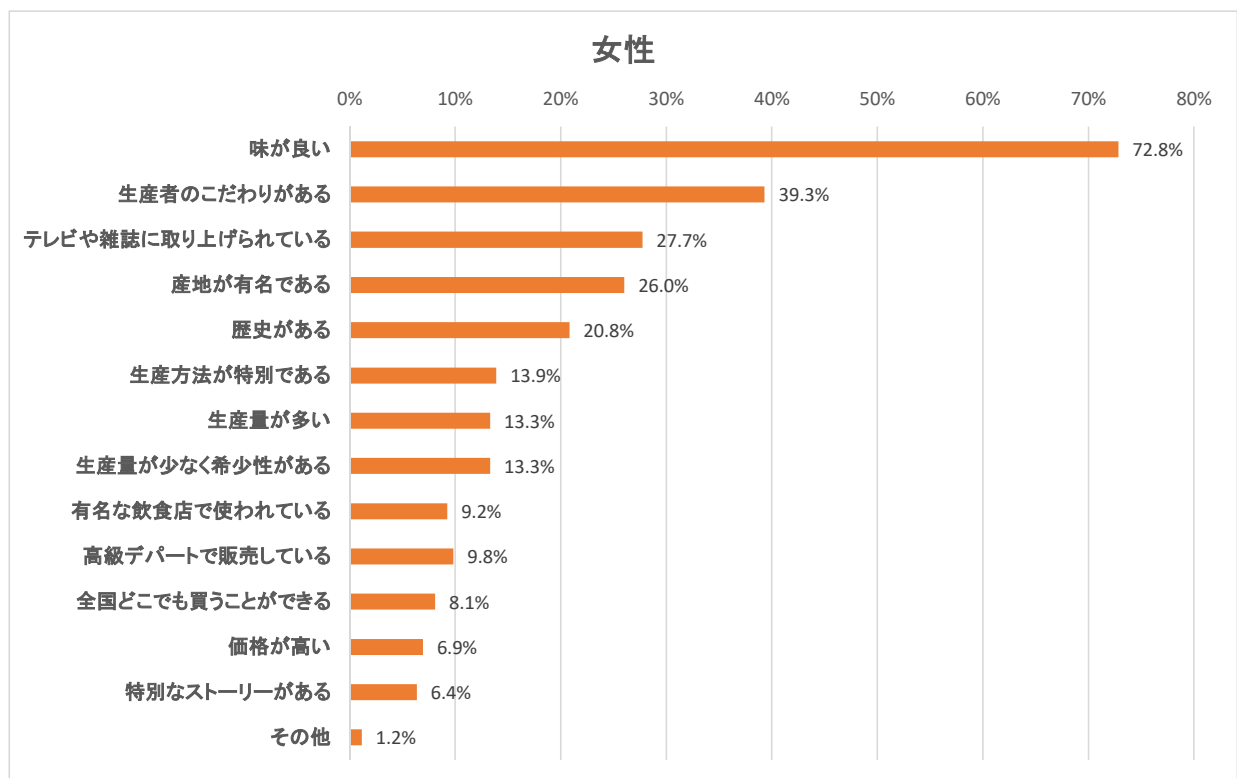
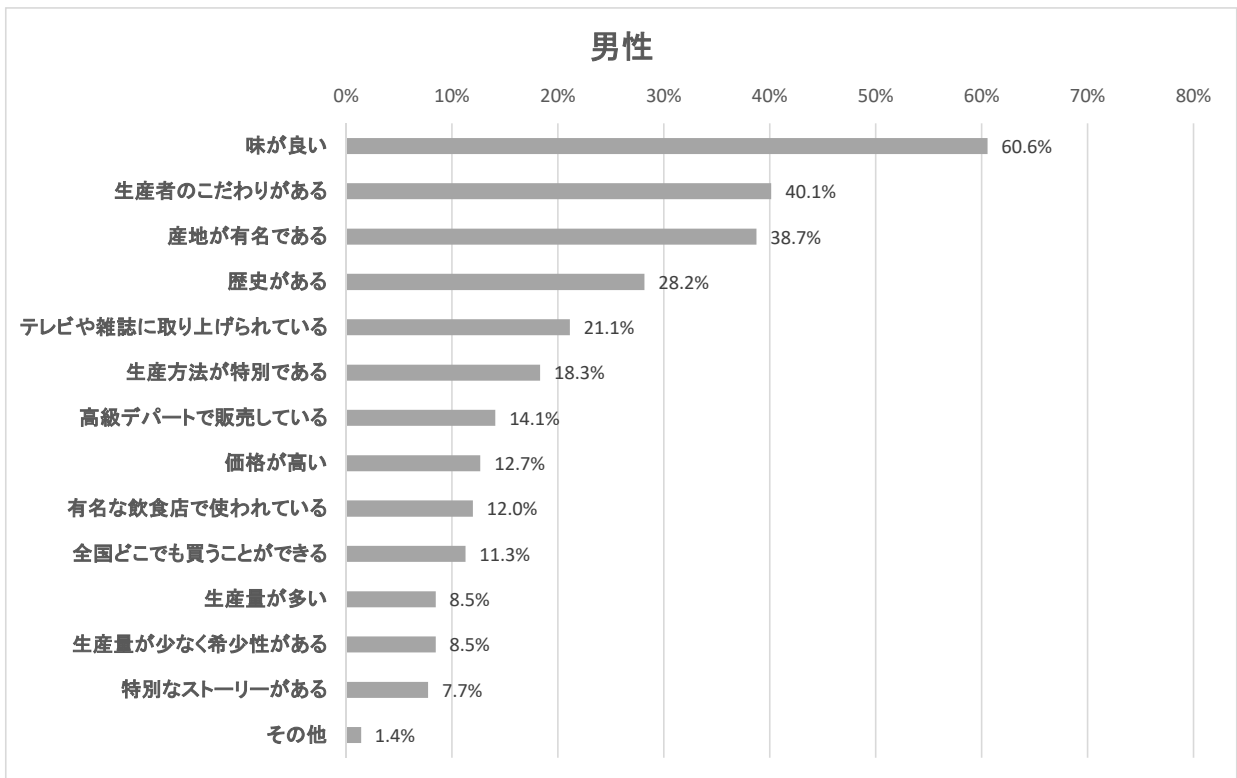


郡山でブランド力のある農林水産物が「特に無し」と回答した理由について、全体の86.9%の人が「名前は知っているがブランド力があるとは思わない」、4.1%の人が「どれも聞いたことがない」と回答した。地元産の農林水産物について、知名度はあるが、ブランド力があると認識していない人が多いことがわかった。知名度を上げることのみを目的としたPRではなく、製品の認知度に応じて、価値を正しく、深く伝えるPR方法を検討していく必要がある。

問17 全国の中で、ブランド力がある農林水産物といえばどのような要素を思い浮かべますか。
【3つまで選択可】

(回答者：315人)





ブランド力のある農林水産物の要素として、「味が良い」が67.3%、「生産者のこだわりがある」が39.7%、「産地が有名である」が31.7%、「テレビや雑誌に取り上げられている」が24.8%、「歴史がある」が24.1%の順番に回答が多かった。

性別では、「味が良い」と回答した人については、男性より女性が12.2ポイント高く、「産地が有名である」と回答した人は女性より男性が12.7ポイント高かった。

「その他」の意見として、「農薬をできるだけ使わない」、「地元の定番食として定着している。」などがあつた。

問18 農林水産物のブランド化について、ご意見がございましたら、ご自由にお書きください。（自由記

- ・ブランディングは、特異性とマーケティングが必要で、例えば、鯉は全国で食べられる習慣がない中で、ありきたりで宣伝しても、単なる趣向品になり、浸透はしない、逆に、米や牛肉は全国どこでもあるので、全国に浸透させるには、強い特異性を見いださないと埋もれてしまうので、ものよっての個別の戦略が必要と思います。（60代・男性）
- ・なるべく地元の農産物を購入していますが、あまりブランドと意識したことはないくらい、ブランドとして、認識していないし、あまりされていないのではないかと。（50代・女性）
- ・商品のブランド化はその発信力が大切。全国版としてTOKIOを利用するのも決して悪くはないが同時に、隣接市町村、福島県、隣接県、と地道に浸透を拡大していくことも必要。（70代・男性）
- ・地元にも十分に浸透していないものを全国に通用するブランドにしようとしても無理があると思います。うねめ牛や米、鯉など市内でどれぐらいの飲食店で食べられますか。ブランド=高価、希少という考え方は古いかと思えます。（30代・男性）
- ・特別感があるのが、ブランドだと思います。どれもこれもブランドにしてしまうと、特別感が薄れ、せっかくの良いものも意味のないものになってしまうと思います。（40代・女性）
- ・メディアからの発信力は絶大である。食べたことがなくても想像できてしまう。（60代・男性）
- ・生産者の視点でなく 消費者の視点に立ったものでないと相手にされません、消費者が欲しい、食べたい思うものであってほしいです。（60代・男性）
- ・すべてそこそこの知名度のような気がする。（40代・女性）
- ・鯉は他にはない農林水産物である。時間はかかると思うが、味や泥臭さを試食等で払拭できればブランド化できる。（40代・女性）
- ・食料はもっと基本的に考えるべきで、ブランド化などもってのほかである。（80代・男性）
- ・生産者、関係機関等がブランド化を目標に力をいれてきた様に見受けられます。消費の拡大を図り消費量の多さをもとにブランド化へと進めたらと思っています。ブランド化されると価格も上がるので困る部分もあります。（70代・男性）

問19 その他、郡山の農林水産物全般についてご意見がございましたら、ご自由にお書きください。（自由記

- ・地元では知られてはいるが、全国的には生産量があるのに認知度が低いように思う。発信力をもっと高めることによってもっと多くの需要が期待できるのではないかと。（60代・男性）
- ・郡山市として、何に力をいれているのかよくわからない。（50代・男性）
- ・鯉は「鯉に恋して郡山」で知られるようになりましたが、他の商品でもインパクト、ネーミングなどそれに勝るものが他のものにもあれば良いと思います。（40代・女性）
- ・郡山駅のお土産館に農林水産物のアンテナショップを作ってほしい。オール郡山で、気軽に買えるものから贈答品まで。期間限定でもいいので。（40代・男性）
- ・郡山は商工都市のイメージがあまりにも強くそれが誇りでもある。2足のわらじでは中々難しいのではないかと。（80代・男性）
- ・これまで県外で8年ほど単身赴任をしていましたが、郡山のブランドは聞いた事がありません。各箇所のイベントにもっと積極的に出店やマスコミへのアピールが必要かと思えます。（40代・男性）
- ・米は日本人の主食、「ASAKAMAI 887」の成功を願っています。（80代・男性）
- ・何にしても今や他との差別化は非常に難しいと思います。一朝一夕にはブランド化は難しい。生産者、販売者、行政が一体となって不断の努力、知恵が必要であると思います。（70代・男性）
- ・農林水産物フェアのような物を年3回程度、アピールの意味の意味で開催して欲しい。（70代・男性）

2019年度まちづくりネットモニター第8回調査結果 テーマ「放射線健康管理について」

東日本大震災に起因する東京電力福島第一原子力発電所の事故から8年以上が経過しました。住宅等の除染により空間放射線量率は震災当時と比べかなり低下しましたが、依然として目に見えない放射線による健康影響について不安を感じている方が多くいらっしゃいます。

本市では、市民の皆様の長期的な健康管理と放射線への不安の解消のため、内部被ばく検査（ホールボディカウンタ検査）を実施しております。

今回のネットモニターでは、本市の放射線に対する取り組みについて皆さんの御意見を参考とさせていただくため、アンケートを実施いたしましたので、その結果についてお知らせします。

(放射線健康管理課)

調査概要

- 調査期間 令和元年8月1日(木)～8月10日(土) (10日間)
- 回答方法 専用ウェブサイトから回答を送信する。
- モニター数 360名 (男性 159名 女性 201名)
- 回答者数 326名 (男性 151名 女性 175名)
- 回答率 90.6%

【結果概要】

《回答者内訳(人)》

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
男性	3	4	15	34	30	21	37	7	151
女性	2	7	44	70	36	14	2	0	175
合計	5	11	59	104	66	35	39	7	326

《心配していること》

- ・放射線の影響に関連して心配なことが「ある」は約7割を占めている。
- ・「ある」と回答した方のうち、放射線に対する不安については、複数回答で「身体や健康のこと」についてが6割以上と最も高く、次に「食べ物のこと」、「廃炉作業のこと」がいずれも5割以上となっている。

《ホールボディカウンタ検査の継続について》

- ・「検査を継続してほしい」・「どちらかといえば検査を継続してほしい」を選択したのは189人(58.0%)で、「検査はもう必要ない」・「どちらかといえば検査は必要ない」を選択したのは137人(42.0%)である。

《検査の継続時期について》

- ・検査の継続希望者(189人)のうち、検査継続の時期に関する質問について、「東京電力福島第一原子力発電所が廃炉となるまで」が最も高く約5割を占めている。

《放射線の不安解消のため市に取り組んで欲しいこと》(複数選択可)

- ・「放射線のモニタリング」が最も高く回答(57.1%)
- ・「食品の安全性の確保」が次に高く回答(56.7%)

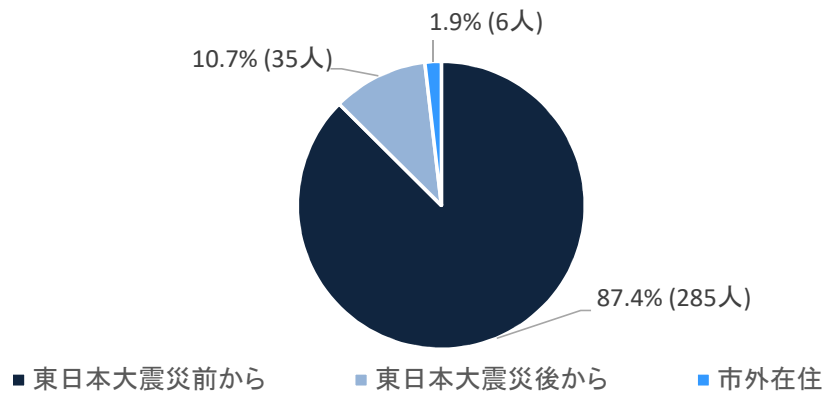
【考察】

- ・ホールボディカウンタ検査の継続については、回答者の58.0%が継続を希望し、42.0%は検査は必要ないと答えている。また、放射線の不安解消のために市で力を入れるべきことについては、「放射線のモニタリング」・「食品の安全性の確保」で、いずれも5割を超えており、今回、回答いただいた方の半数以上が現在の検査体制の継続を望んでいる。
- ・アンケート結果やその他の意見(自由記述)において、「将来」「子ども」「不安・心配」「風評」という言葉が多く見られる。自分自身は検査を受けないが、子どもには検査を受けさせたいという傾向が見られ、また、多くの方が現状の不安より、将来に対する不安を感じている。そのため、今後も放射線に対する長期的な健康管理体制の継続により、市民の放射線への不安解消を図っていくことが必要である。

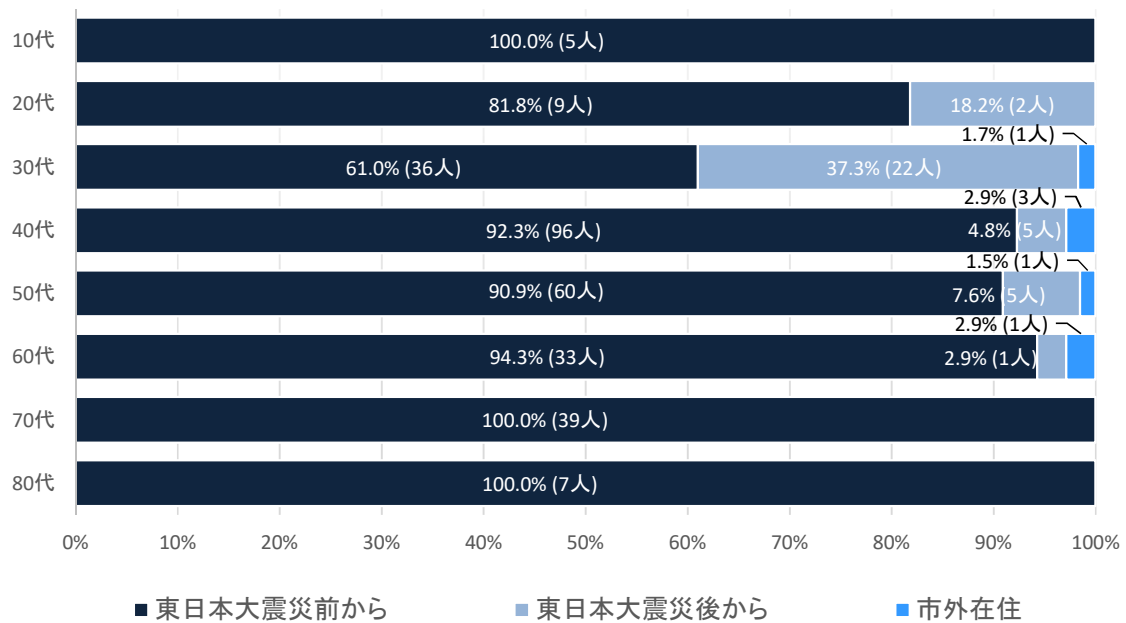
第1章 放射線への不安について

問1 郡山市にいつから住んでいますか？（1つ選択）

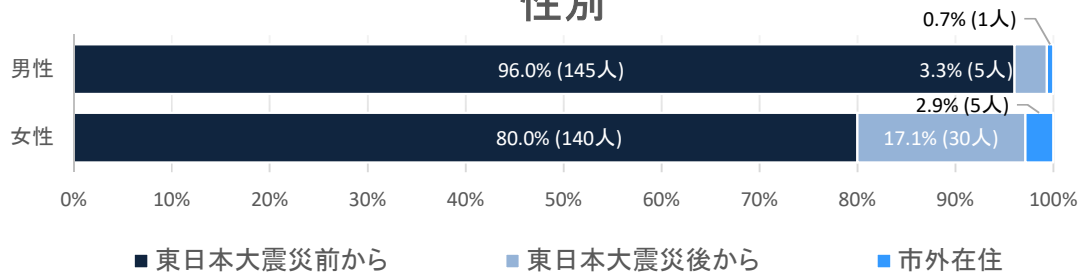
（回答者：326人）



年代別



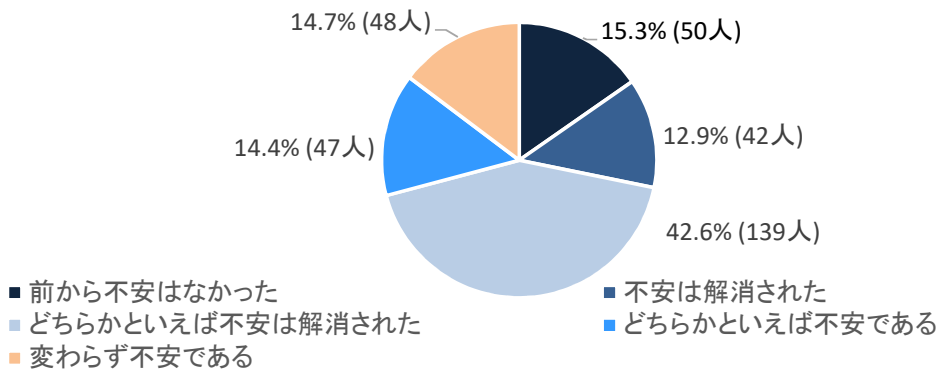
性別



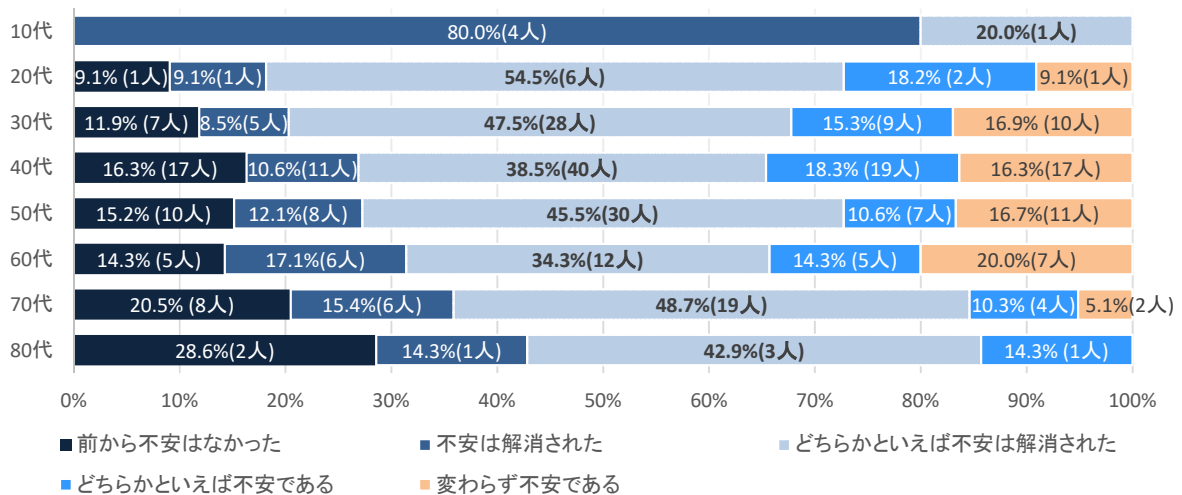
・今回のアンケートの回答者（326人）においては、「東日本大震災前から」本市に住んでいる方が約9割を占めている。

問2 平成29年3月に郡山市内の住宅除染は完了しましたが、完了する前と比べ放射線に対する不安は解消されましたか？（1つ選択）

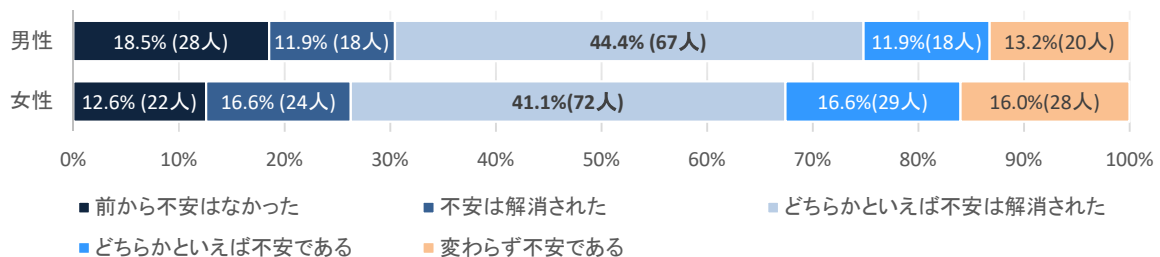
（回答者：326人）



年代別



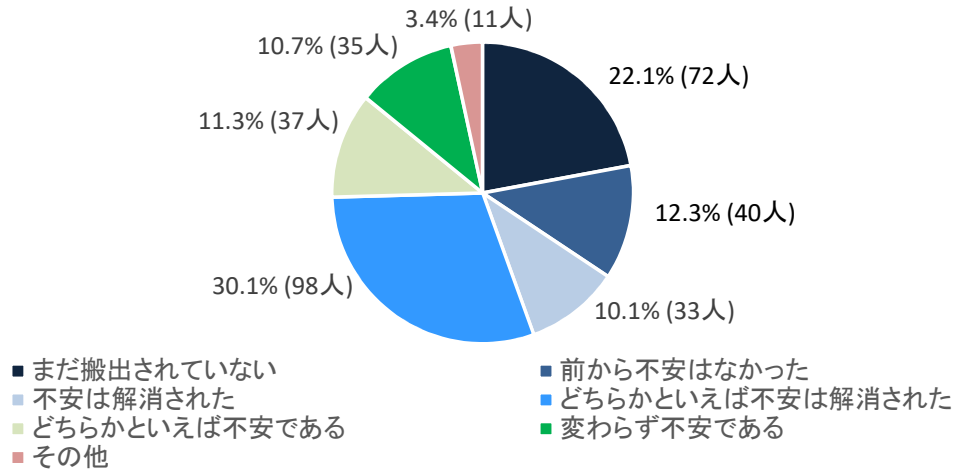
性別



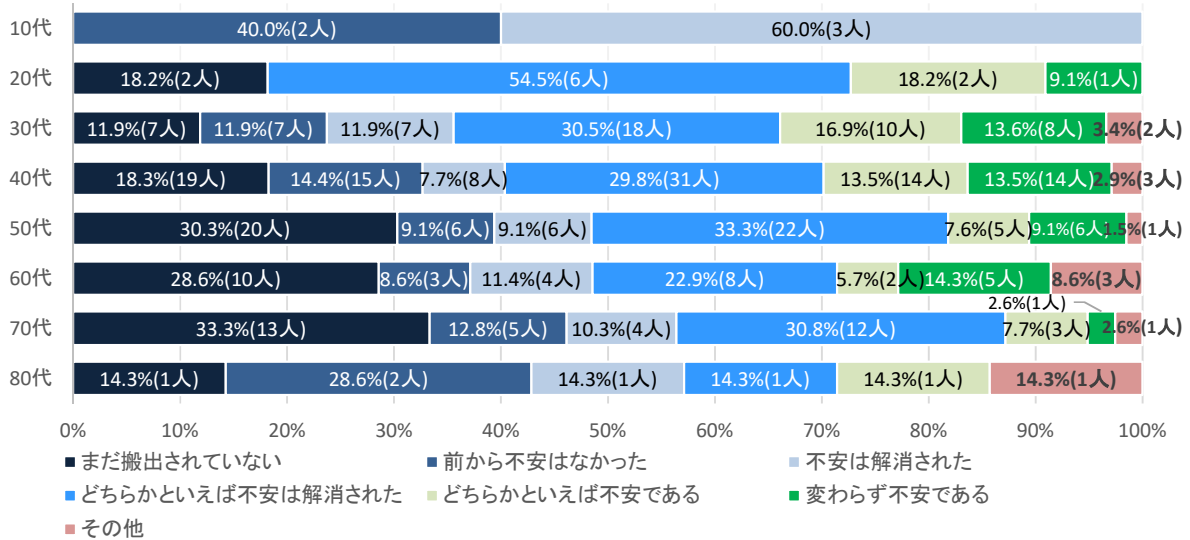
- ・住宅除染が完了する前と比べて、「前から不安はなかった」「不安は解消された」「どちらかといえば不安は解消された」を合わせると、放射線に対する不安が解消された方が全体の約7割を占めている。
- ・年代別では、70代、80代の約8割は放射線に対する不安が解消されている。
- ・性別で「どちらかといえば不安である」「変わらず不安である」と不安を訴えている方は、男性よりも女性の方が割合が高くなっている。

問3 除染の除去土壌等がご自宅から搬出される前と比べ、放射線に対する不安は解消されましたか？（1つ選択）

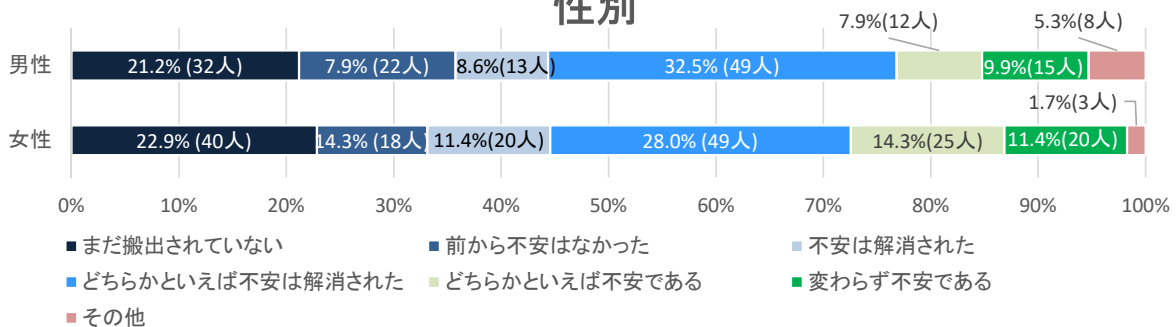
（回答者：326人）



年代別



性別



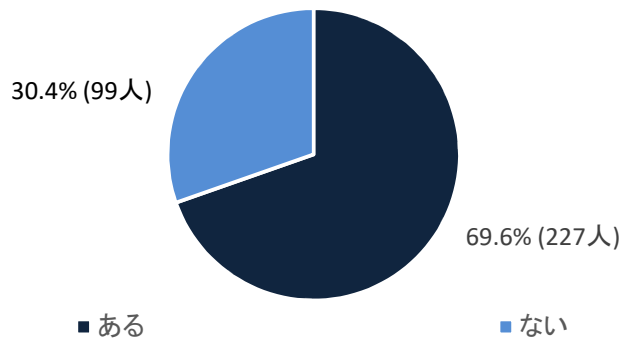
・除去土壌等が搬出される前と比べて、「前から不安はなかった」「不安は解消された」「どちらかといえば不安は解消された」と放射線に対する不安が解消された方は全体の約5割を占めている。

・「その他」を選択した方は、「除染対象地域ではなかった」「除染されたのか分からない」等である。

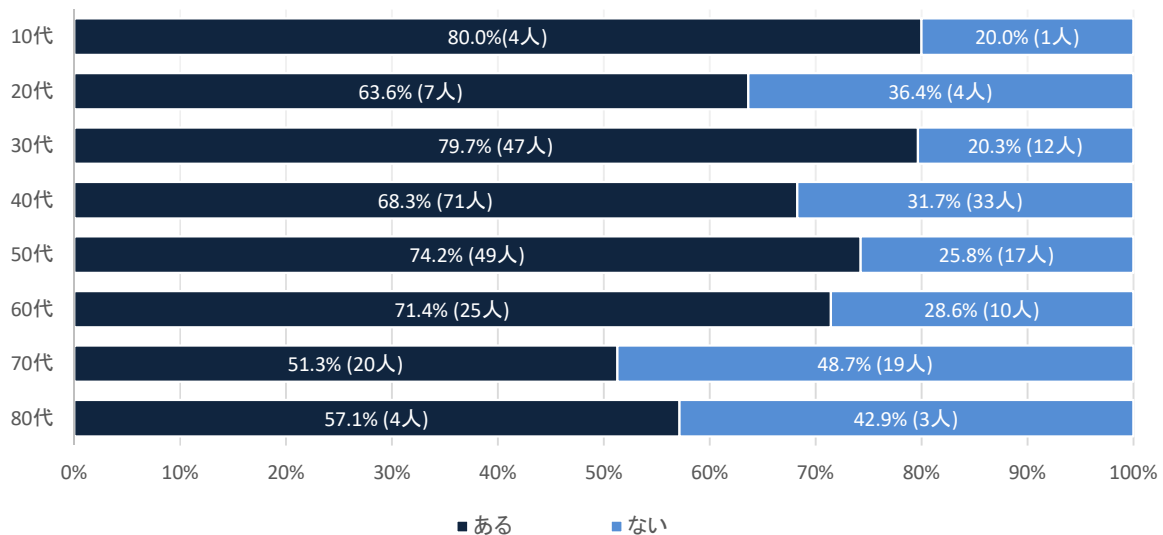
・問2の「どちらかといえば不安である」「変わらず不安である」の割合29.1% (95人)と比較すると、問3の「どちらかといえば不安である」「変わらず不安である」の割合は22.1% (72人)で、7ポイント (23人)減少している。

問4 平成23年の原発事故から8年以上が経過しましたが、放射線の影響に関して心配なことはありますか？（1つ選択）

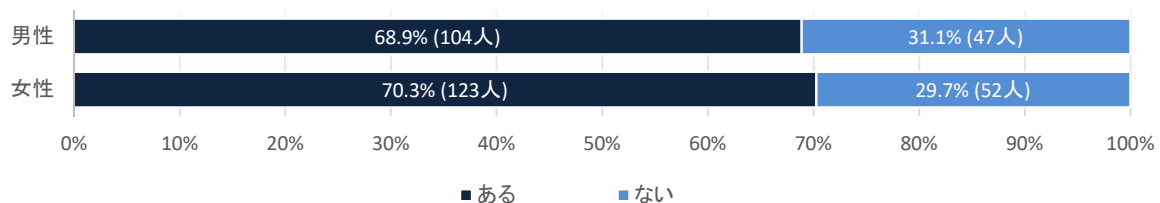
（回答者：326人）



年代別



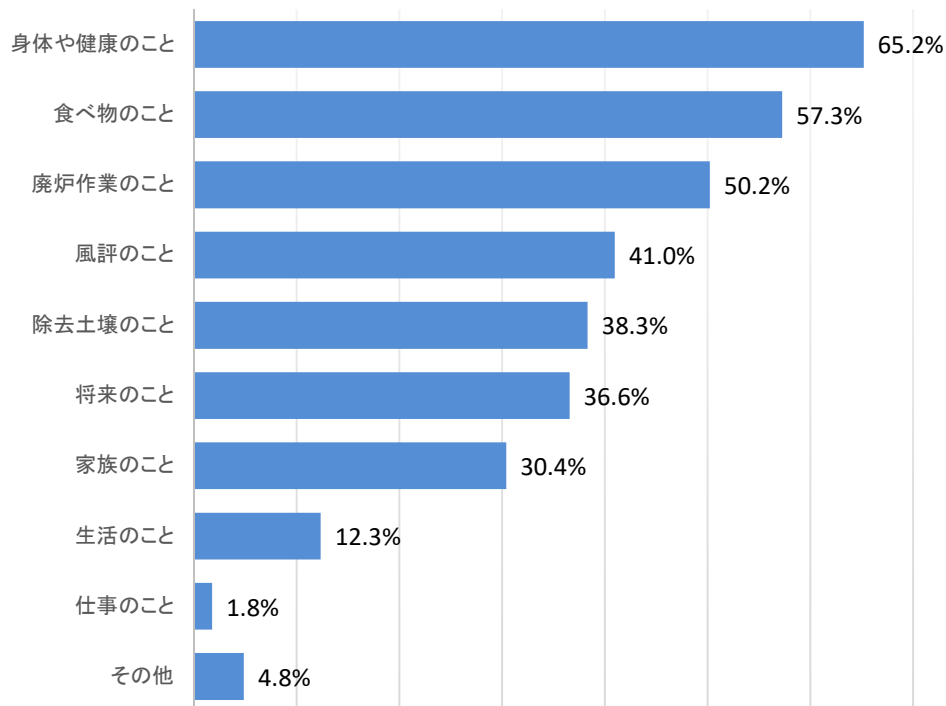
性別



- 放射線の影響に関して心配なことが「ある」は約7割を占めている。
- 年代別では、「ある」の割合が高いのは、10代、30代、50代、60代、40代、20代の順で、70代、80代は「ある」の割合が過半数を超えているが、他の世代よりは比較的低くなっている。
- 性別では、男女とも心配なことが「ある」の割合が約7割を占めている。

問5 問4で「ある」を選択した方にお伺します。どのようなことが心配ですか？
複数選択可

(回答者：227人)



※「その他」を選択した方の主な意見

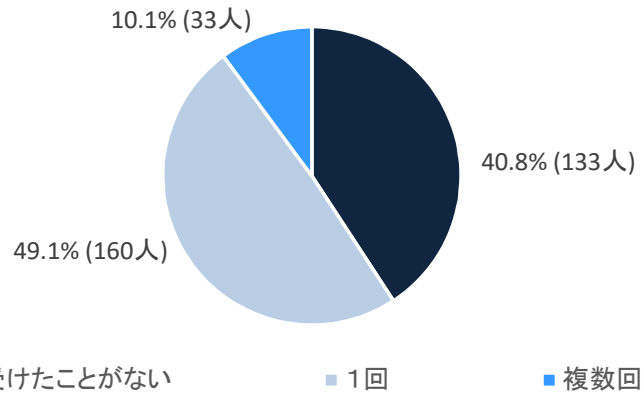
- 家の周り（雨どい等）に未だ放射線量が高い箇所がある。
- 除染を実施していない場所への不安
- 行政に対する不満
- 子どもの健康や将来、また県外に転出した際に受けるかもしれない差別
- 野生動物（野良犬や野良猫も含む）の放射線被ばく量

放射線に対する不安については、複数回答で「身体や健康のこと」についてが6割以上と最も高く、次に「食べ物のこと」、「廃炉作業のこと」がいずれも5割以上となっている。

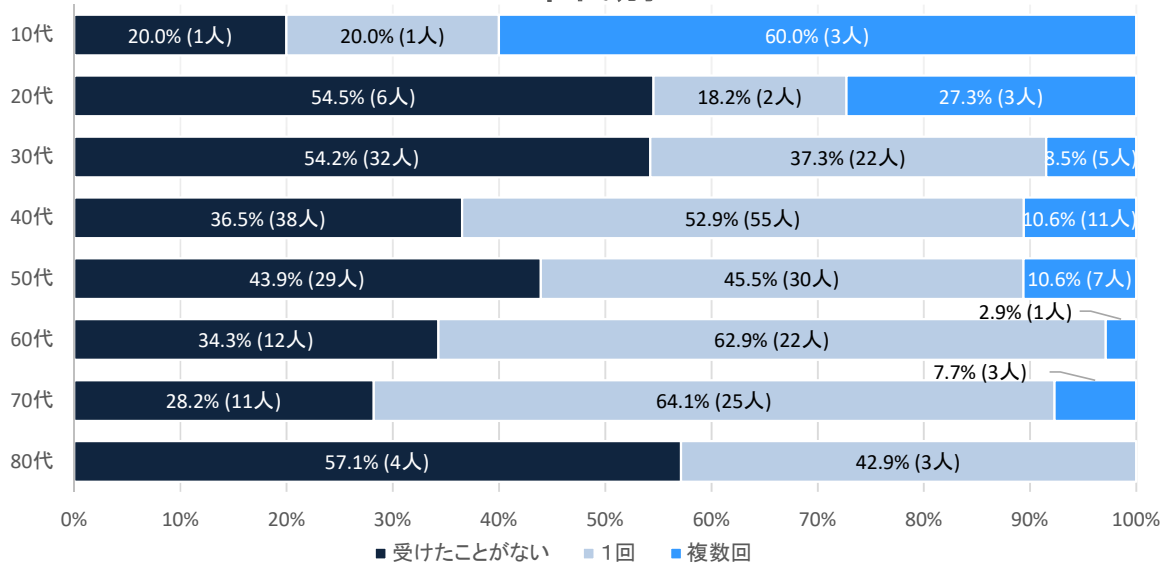
第2章 ホールボディカウンタ検査について

問6 ホールボディカウンタ検査を何回受けましたか？（1つ選択）

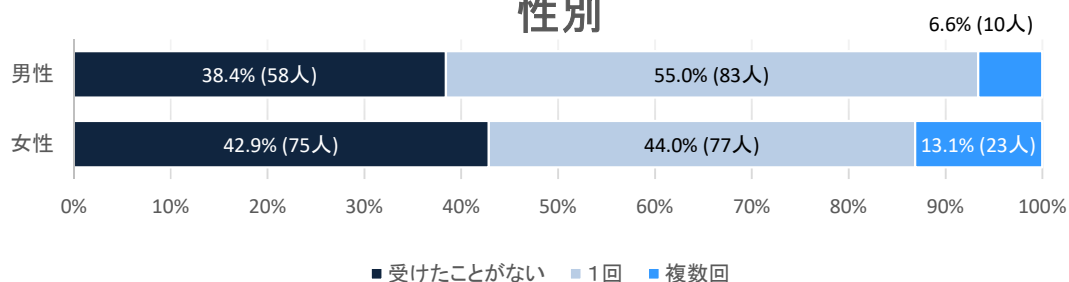
（回答者：326人）



年代別



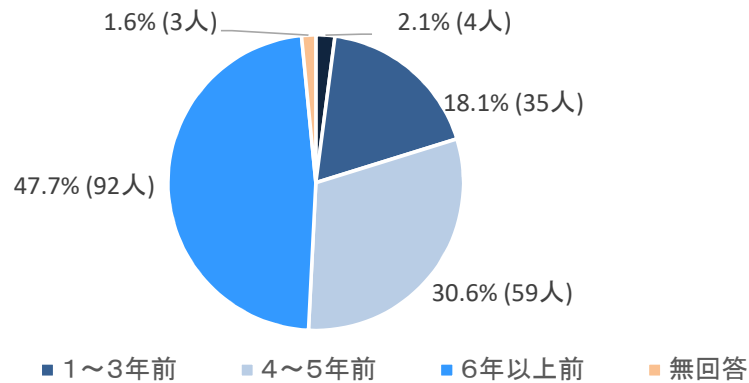
性別



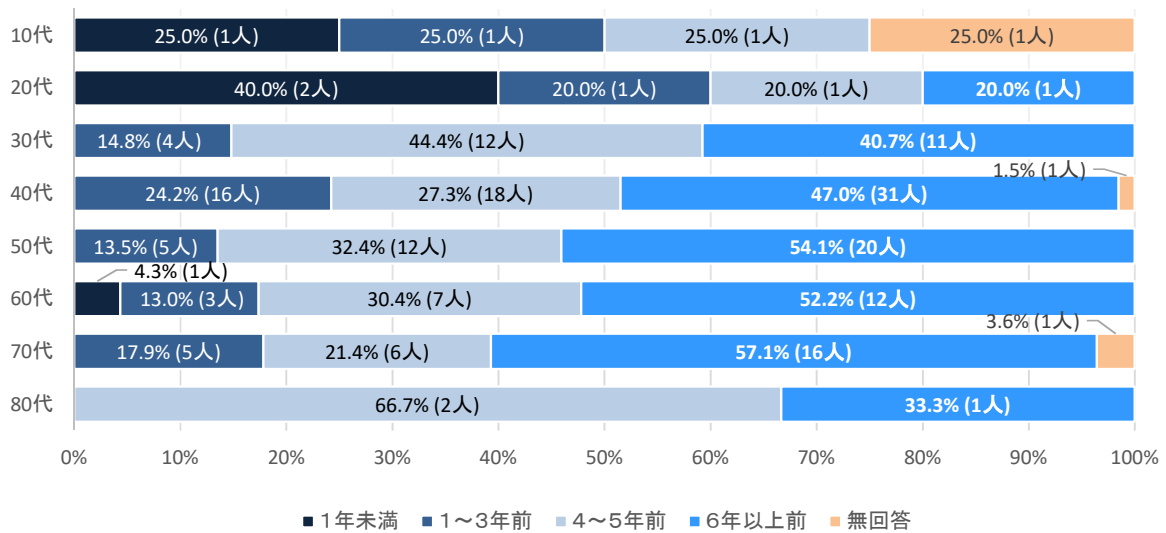
- ・ホールボディカウンタ検査について、「1回」が最も高く約5割を占めている。
- ・年代別では、20代、30代、80代が「受けたことがない」の割合が高く、40代から70代は「1回」の割合が高くなっている。
- ・「複数回」の割合が最も高いのは10代で、約6割を占めている。
- ・性別では、男性は「1回」が約5割以上を占め、「受けたことがない」も約4割を占めている。女性は「1回」と「受けたことがない」がほぼ同数であり、「複数回」を回答した割合は男性よりも女性の方が6.5ポイント高くなっている。

問7 問6で「1回」「複数回」を選択した方にお伺いします。
最後に検査したのはいつですか？（1つ選択）

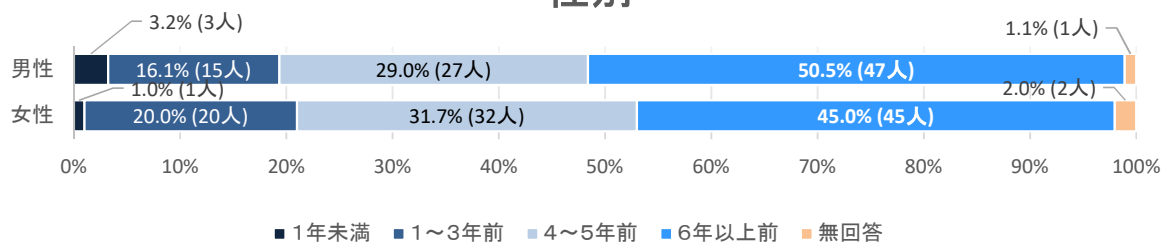
（回答者：193人）



年代別



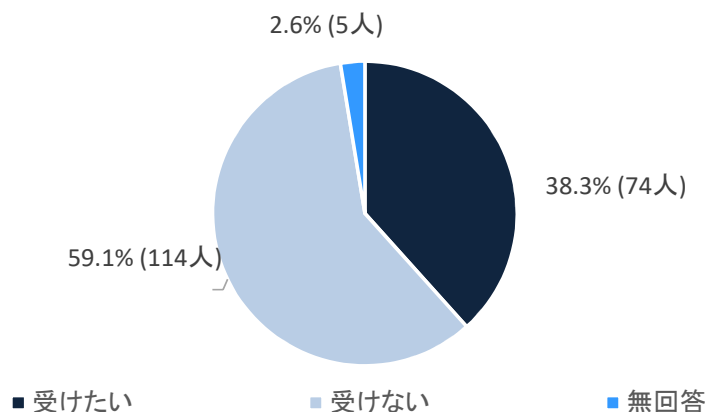
性別



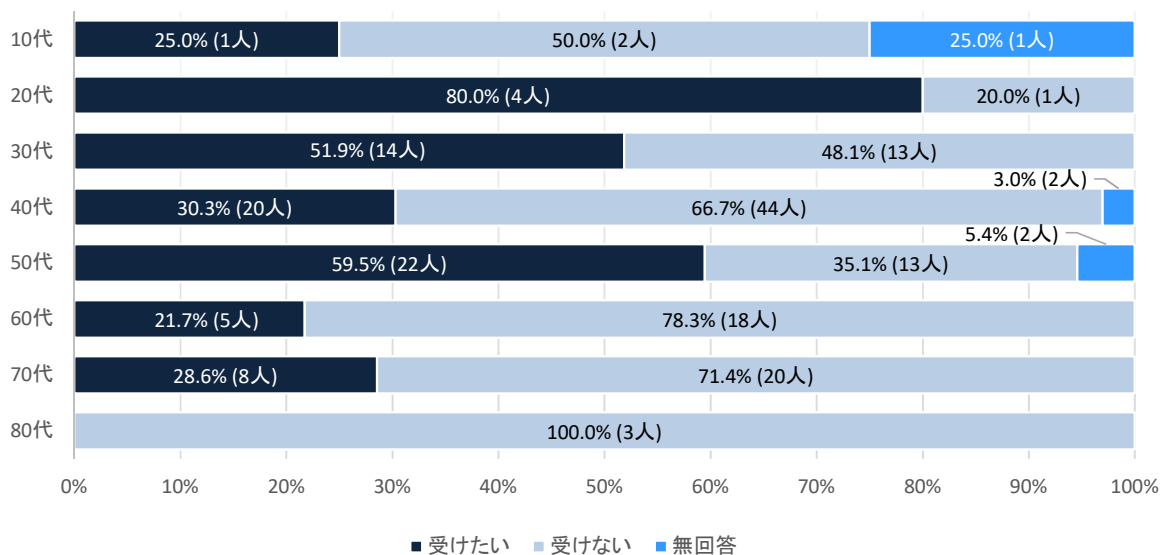
- ・受検者（193人）を対象に、最後に受けた検査時期に関する質問では、「6年以上前」に受けた方が約5割で最も高くなっている。
- ・年代別では、10代、20代では「1年未満」の割合が高く、30代では「4～5年前」、40代から70代は「6年以上前」の割合が最も高く、80代は「4～5年前」が高くなっている。
- ・性別では、男女ともに、「6年以上前」、「4～5年前」、「1～3年前」、「1年未満」の順になっている。
- ・傾向として、原発事故から間もない時に検査した割合が高く、事故からの経過年数が経つにつれ、検査を受ける割合が低くなっている。また、80代を除いて、年齢が高いほどその傾向が見られる。

問8 問6で「1回」「複数回」を選択した方にお伺いします。
 今後も検査を受けますか？（1つ選択）

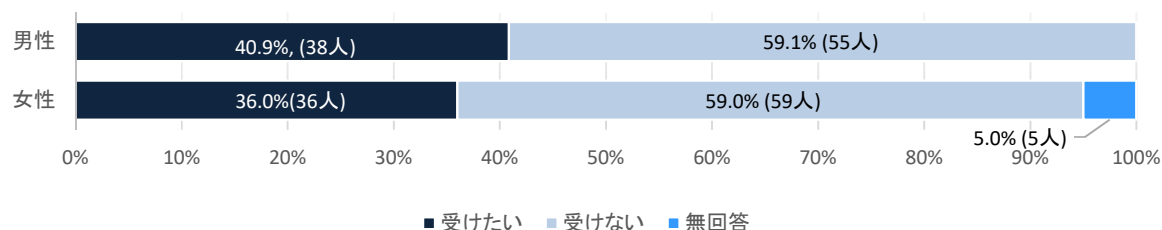
（回答者：193人）



年代別



性別



- ・今後の検査希望に関する質問では、今後の検査を「受けない」は約6割を占めている。
- ・年代別で、「受けない」の割合が最も高いのは20代で8割、次いで50代が約6割を占めている。「受けない」の割合が最も高いのは80代で、次いで60代、70代、40代と続いている。
- ・性別では、男女とも「受けない」が約6割を占めている。

※問8の「選択した理由をご記入ください」との質問で、主な理由について。

○「受けたい」と回答した方の主な理由（32名）

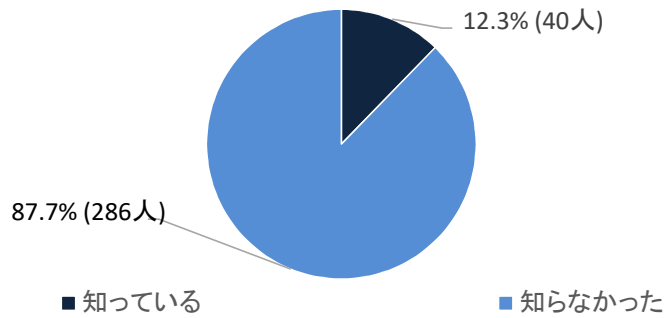
- ・この検査でしかわからないことがあるから
- ・現在の身体の状態を知りたい。
- ・放射能の影響が有るか無いか知りたい。
- ・定期的に検査を受けると安心できると思うので
- ・精神的な安心感を得たいから
- ・過去に実例が無く不安だから
- ・健康な日々を送りたいから
- ・今後の人体への影響が心配

○「受けない」と回答した方の主な理由（64名）

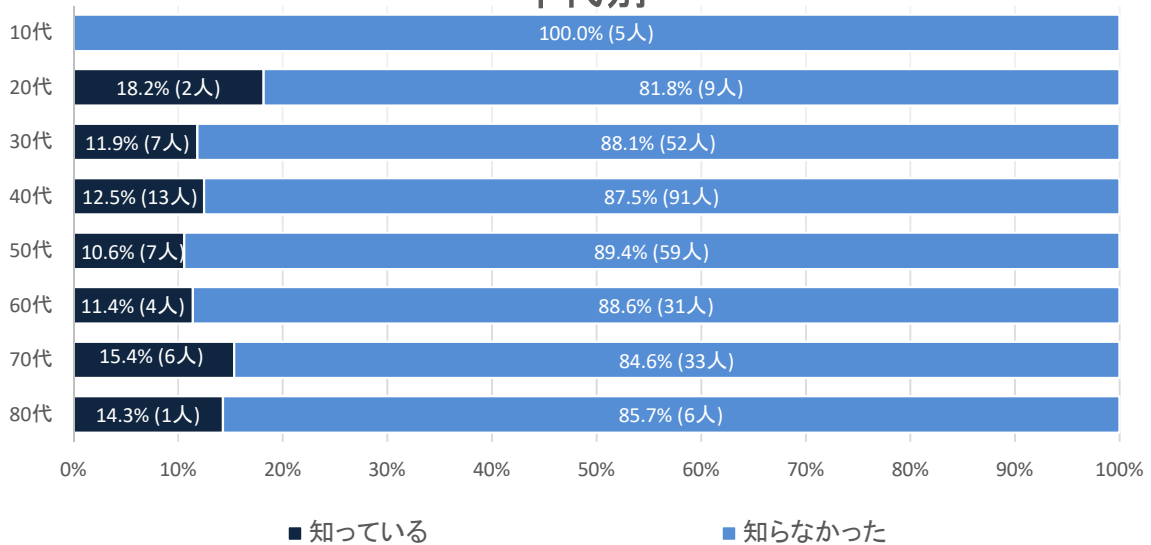
- ・必要性を感じていない
- ・もう心配していないから
- ・1回目の検査で異常が無く、その後は異常になることが考えにくいので
- ・子どもが受けており、結果は異常なしなので、親の自分も同じような食事、生活を送っているから
- ・年齢的に影響は少ないと思うので
- ・平日に仕事を休めないし、結果も「異常なし」だろうから、受ける意味が見いだせない
- ・データで見ても安心がない。

問 9 現在19歳以上の方については、電話及びインターネットにより検査を随時受付け
 していますが、ご存知ですか？（1つ選択）

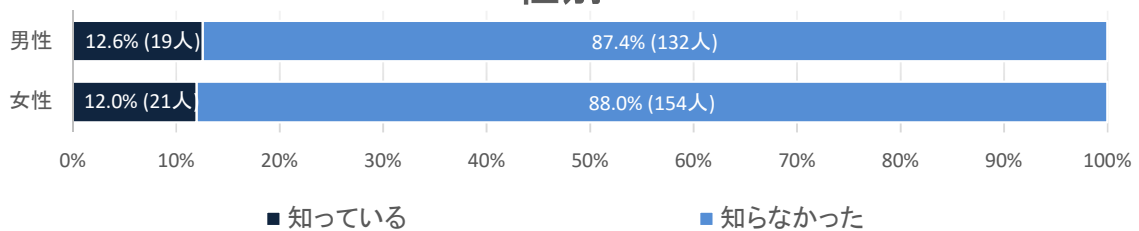
（回答者：326人）



年代別

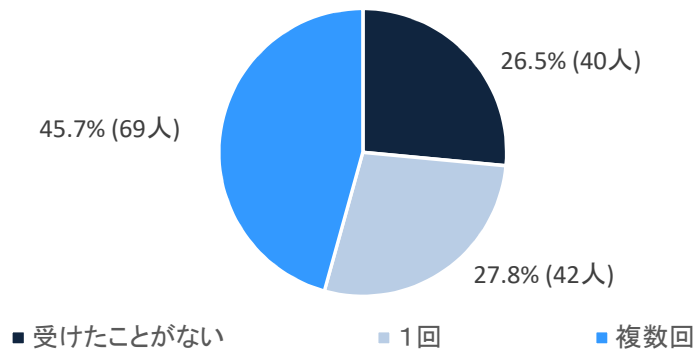


性別



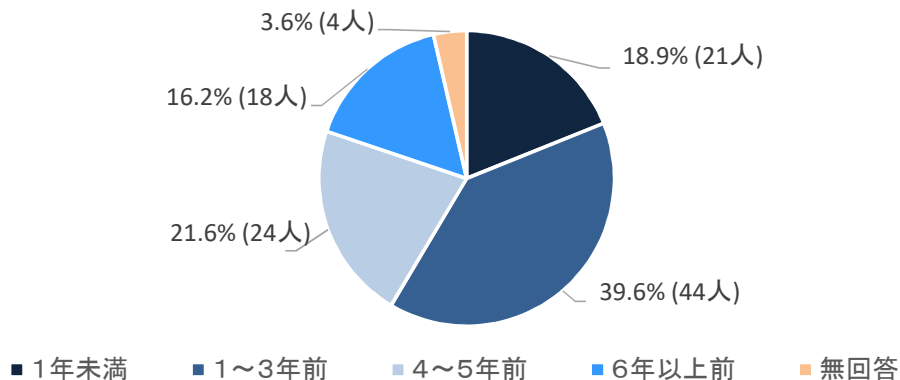
- ・19歳以上のホールボディカウンタ検査を随時受付していることについては、「知らなかった」が約9割を占めている。
- ・年代別では、10代を除き、どの年代も「知らなかった」割合が8割以上を占めている。
- ・性別では、男女とも「知らなかった」が8割以上を占めている。
- ・アンケート結果を踏まえ、19歳以上の市民の方に対するホールボディカウンタ検査の随時受付について周知する必要がある。

問10 18歳以下のお子様がいいらっしゃる方にお伺いします。
 (複数人いらっしゃる場合は、回数を多く受検している方についてお答えください。)
 ホールボディカウンタ検査をお子様は何回受けましたか？ (1つ選択)
 (回答者：151人)



・お子様のホールボディカウンタ検査について、受検の回数が最も高いのは「複数回」で約5割を占めている。
 ・問6のアンケート結果では「複数回」の割合が10.1%で、問10の結果の方が35.6ポイント高くなっている。

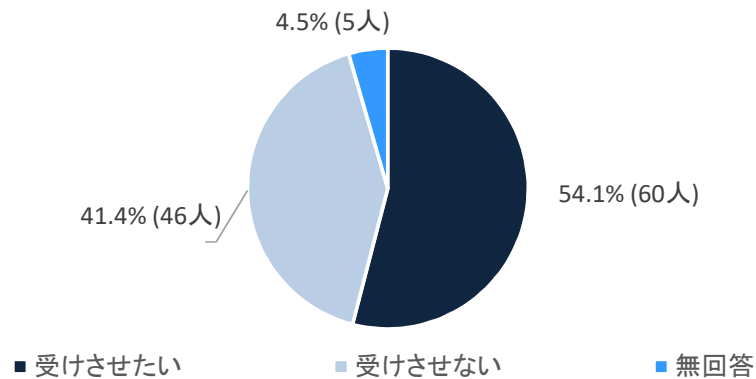
問11 問10で「1回」「複数回」を選択した方にお伺いします。
 最後に検査したのはいつですか？ (1つ選択)
 (回答者：111人)



・受検者 (111人) を対象に、最後に受けた検査時期に関する質問では、「1～3年前」に受検したが最も高く約4割を占めている。
 ・問7で「1年未満」、「1～3年前」の割合20.2%と比較すると、問11の「1年未満」、「1～3年前」の割合は58.5%で、38.3ポイント高くなっている。

問12 問10で「1回」「複数回」を選択した方にお伺いします。
今後も検査を受けさせたいと思いますか？（1つ選択）

（回答者：111人）



- ・今後の検査希望に関する質問では、今後の検査を「受けさせたい」は5割以上を占めている。
- ・問8で「受けたい」の割合38.3%と比較すると、問12で「受けさせたい」の割合は54.1%で、15.8ポイント高くなっている。

※問12の「選択した理由をご記入ください」との質問で、主な理由について。

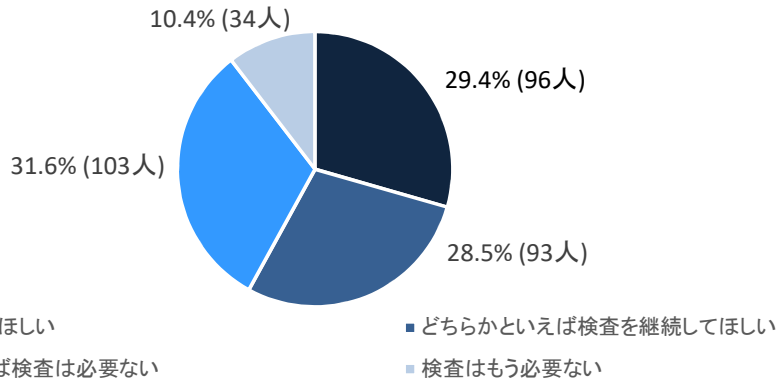
○「受けさせたい」と回答した方の主な理由（25名）

- ・まだ不安があるので
- ・不安を感じた時には受けさせたい。
- ・心配だから
- ・子どもこそ定期的に検査する必要があると感じるので
- ・子どもたちはいつまでも心配なので機会がある限りはなるべく受けさせたい。
- ・経過を確認したいから
- ・健康被害が気になるため
- ・受けたいと考えた時に受けたい。

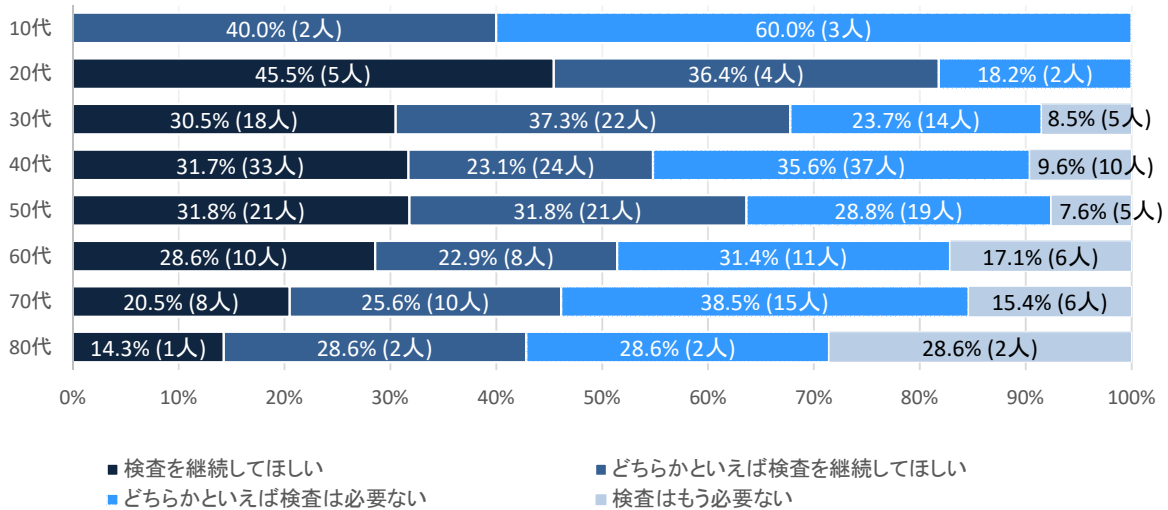
○「受けさせない」と回答した方の主な理由（28名）

- ・必要性を感じないから
- ・もう心配していないから
- ・受けた結果、特に問題が無い数値だと認識したため
- ・8年も経っているので、体の中の放射線は対外に排出されたと思っているから
- ・時間が取れない。
- ・平日は仕事を休めないし、結果もほぼ分かっているため
- ・本当の結果かどうか、わからないから

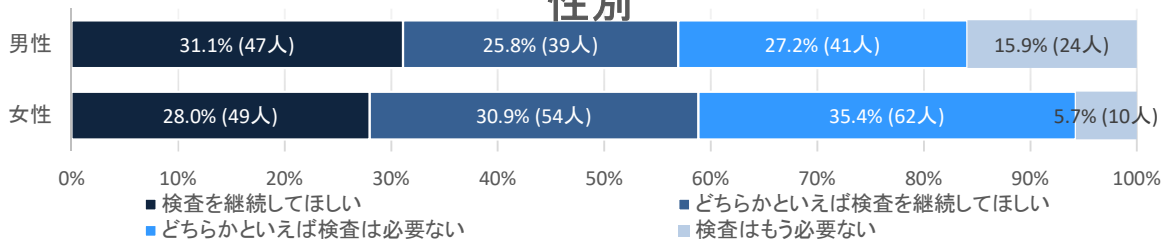
問 13 ホールボディカウンタ検査については、開始から8年目を迎えており、検査人数は年々減少しております。今後も検査を継続してほしいですか？（1つ選択） （回答者：326人）



年代別



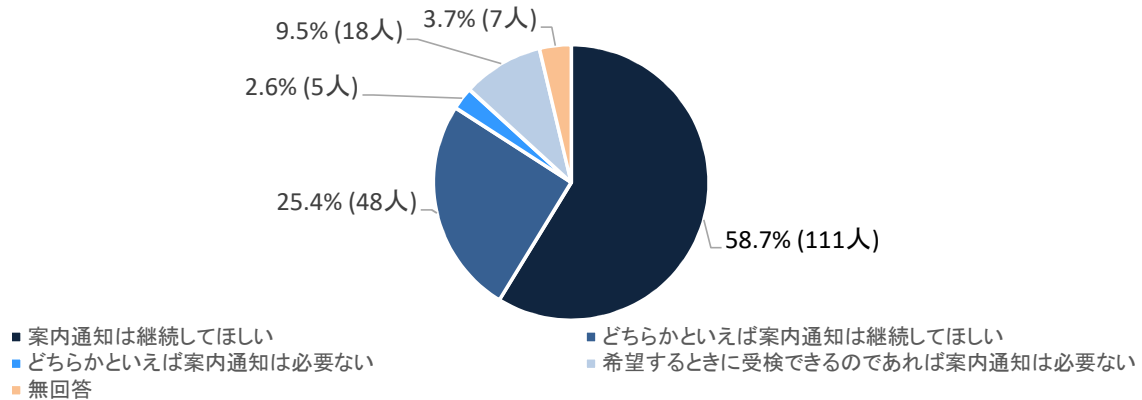
性別



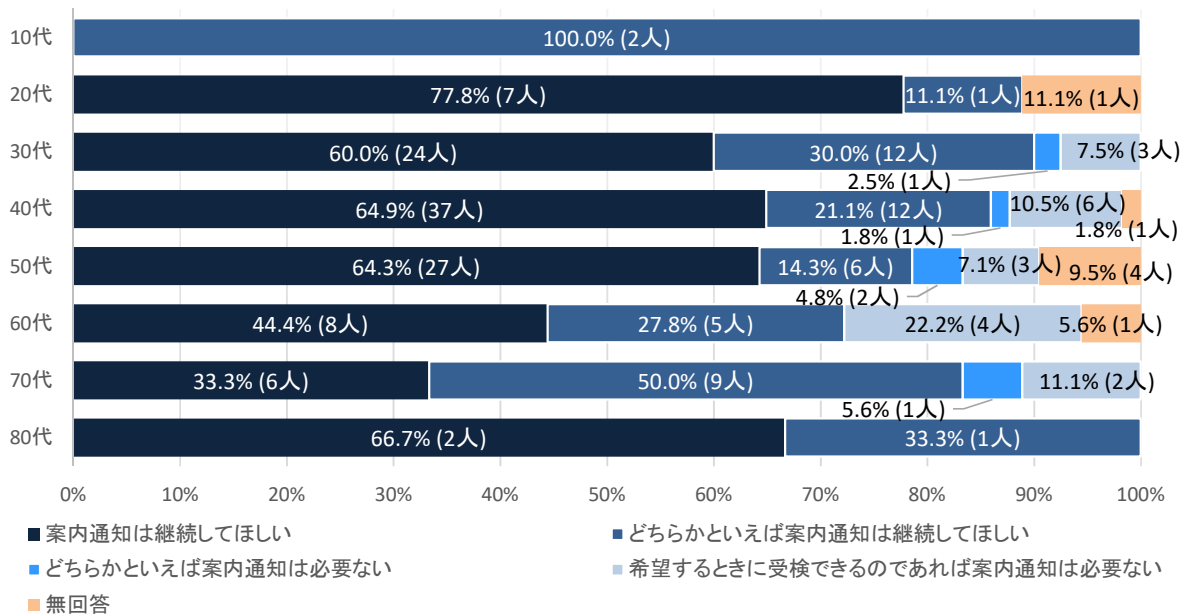
- ・「どちらかといえば検査は必要ない」が最も高く、3割以上を占めている。
- ・「検査を継続してほしい」「どちらかといえば検査を継続してほしい」を選択したのは189人(58.0%)で、「検査はもう必要ない」「どちらかといえば検査は必要ない」を選択したのは137人(42.0%)である。
- ・年代別では、「検査を継続してほしい」の割合が高い年代は、20代、50代、40代、30代で、「どちらかといえば検査を継続してほしい」の割合が高い年代は、10代、30代、20代、50代、「どちらかといえば検査は必要ない」の割合が高い年代は、10代、70代、40代、60代が高くなっている。「検査はもう必要ない」の割合が比較的高いのは80代となっている。
- ・性別では、男女とも検査を継続するが約6割を占めているが、男性は「検査を継続してほしい」が最も高く、女性は「どちらかといえば検査は必要ない」が最も高くなっている。

問 14 問13で「検査を継続してほしい」「どちらかといえば検査を継続してほしい」を選択した方にお伺いします。
案内通知を今後も継続してほしいですか。(1つ選択)

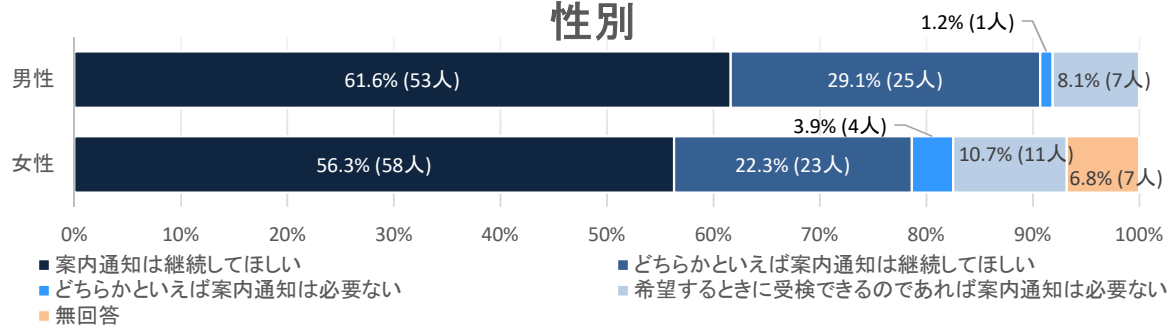
(回答者：189人)



年代別



性別



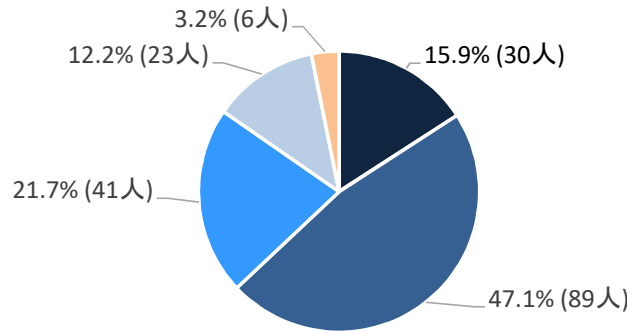
※「その他」を選択した方の主な意見

- ・希望する人がいる限り続けてほしいです。
- ・今回のような放射線の影響が、どのように出るのかデータがある訳ではないので、今後数十年単位で続けるべき。
- ・市民の不安感と風評被害が無くなるまで。
- ・国の責任として不安を感じた時に受診できる制度はあってほしい。
- ・廃炉完了後30年くらいは継続してほしい。健康被害はすぐに出るとは限らない。

- ・検査の継続希望者のうち、「案内通知を継続してほしい」が58.7%と最も高い。「どちらかといえば案内通知は継続してほしい」の25.4%と合わせると、案内通知の継続希望者は約9割を占めている。
- ・年代別では、「案内通知は継続してほしい」は20代、80代、40代、50代、30代と高く、「どちらかといえば案内通知は継続してほしい」は10代、70代が高い。「希望するときに受検できるのであれば案内通知は必要ない」は60代が他の年代と比べ比較的高くなっている。
- ・性別では、男女とも「案内通知を継続してほしい」が最も高く、次に「どちらかといえば案内通知は継続してほしい」が続いている。

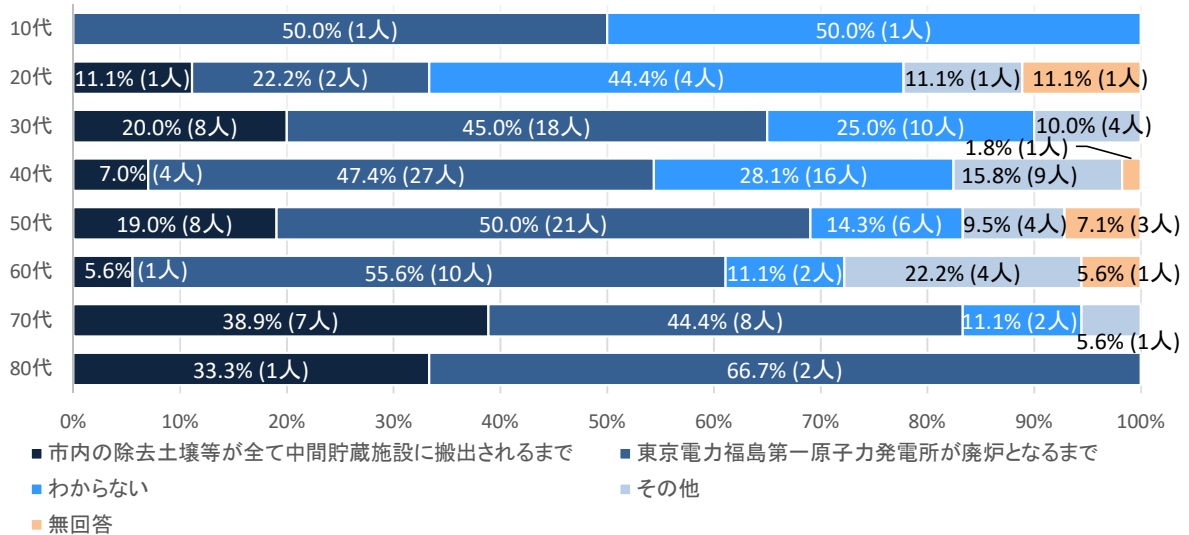
問 15 問13で「検査を継続してほしい」「どちらかといえば検査を継続してほしい」を選択した方にお伺いします。
検査はいつまで継続すべきと考えますか。(1つ選択)

(回答者：189人)

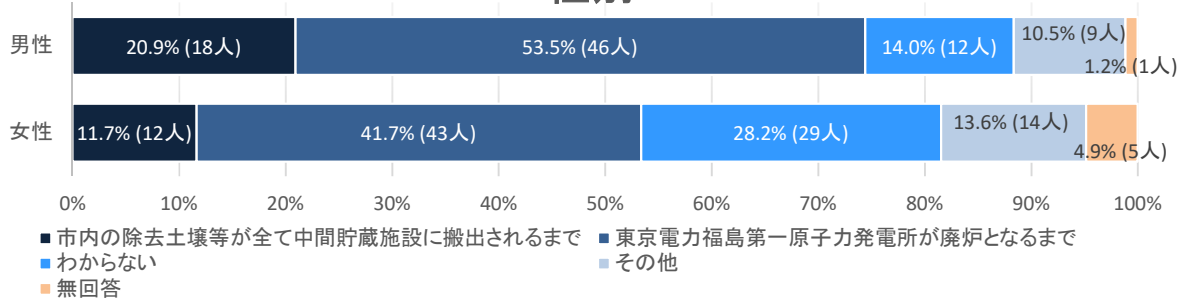


- 市内の除去土壌等が全て中間貯蔵施設に搬出されるまで
- 東京電力福島第一原子力発電所が廃炉となるまで
- わからない
- その他
- 無回答

年代別



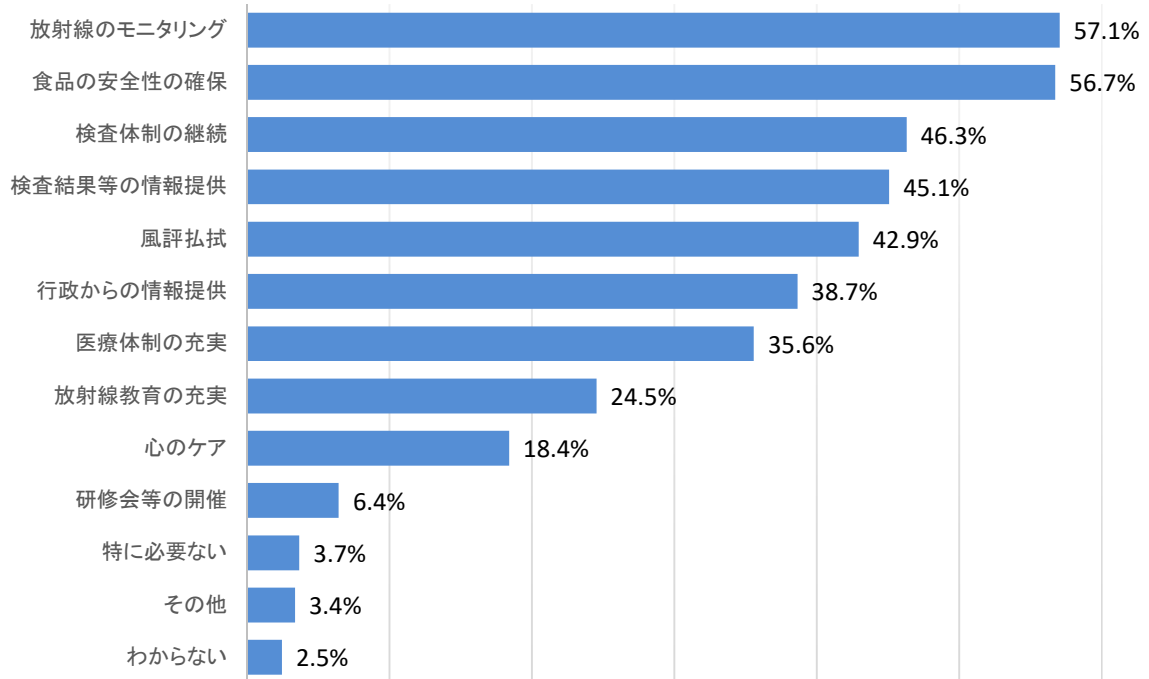
性別



- ・検査の継続希望者のうち、検査継続の時期に関する質問について、「東京電力福島第一原子力発電所が廃炉となるまで」が最も高く約5割を占めている。
- ・年代別では、「市内の除去土壌等が中間貯蔵施設に搬出されるまで」の割合が高い年代は70代が比較的高く、「東京電力福島第一原子力発電所が廃炉となるまで」の割合が高いのは60代、50代の順に高い。「わからない」は20代が高くなっている。(なお、少数回答である10代と80代は除く。)
- ・性別では、男女とも「東京電力福島第一原子力発電所が廃炉となるまで」の継続希望が高くなっている。

問 16 今後、放射線に対する不安を解消するために、郡山市ではどのようなことに力を入れるべきだと思いますか？（複数選択可）

（回答者：326人）

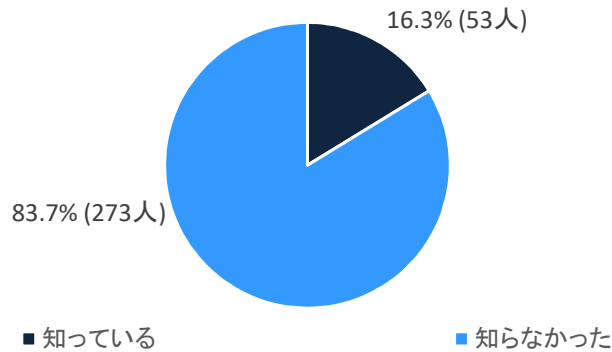


※「その他」を選択した方の主な意見

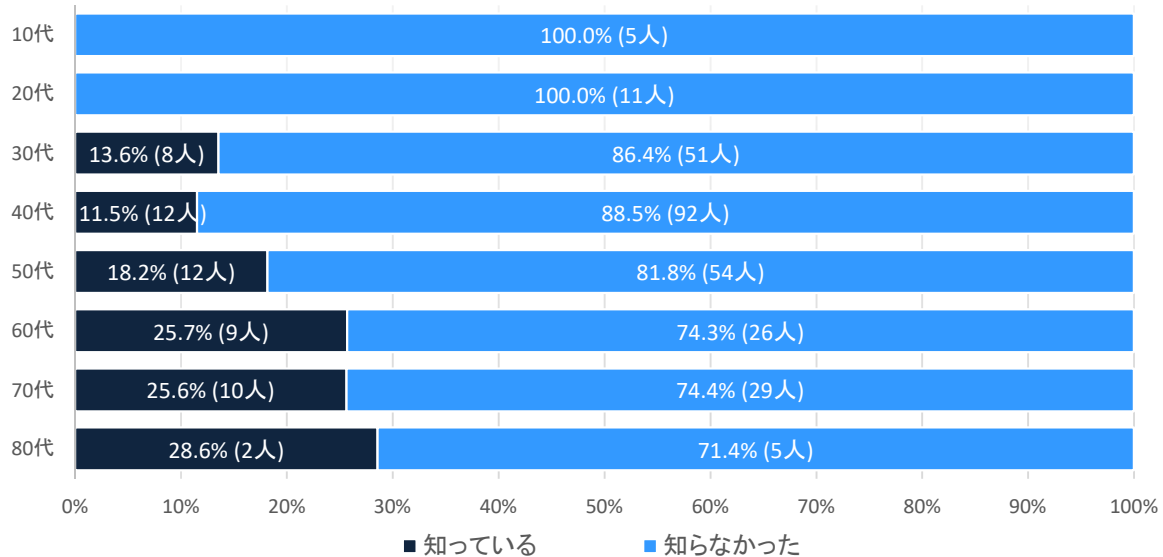
- ・健康講座をもっと活発に開催し、幅広く取り組むべき、少なすぎます！
- ・まだ除染が出来ているとは言い難い。
- ・信頼性を感じられる見せ方での情報・データの公表
- ・子どもが安心、安全に遊べる場所の提供
- ・原発廃炉除去県外搬出を早く終わらせる指導
- ・環境整備

- ・「放射線のモニタリング」「食品の安全性の確保」が複数回答でいずれも約6割を占め、「検査体制の継続」「検査結果等の情報提供」が約5割と続いている。
- ・放射線に対する不安解消には、多くの方が放射線のモニタリングや現在の検査体制の継続を望んでいる。

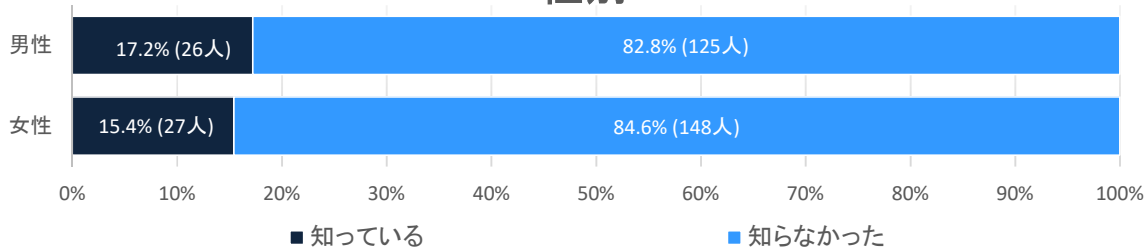
問 17 郡山市では、市の職員が講師として、いつでも、市内のどこにでも伺う「市政きらめき出前講座」を行っています。
放射線に関連した出前講座があることを知っていますか。（1つ選択）
(回答者：326人)



年代別



性別



- ・出前講座については「知らなかった」が約8割を占めており、市民の認知度が低くなっている。
- ・年代別では、10代、20代の方が「知らなかった」と回答。市民の年齢を重ねるにつれ、「知っている」の割合が高くなっている。
- ・性別では、男女とも「知らなかった」方が8割を超えている。
- ・市民の不安解消を図るために、放射線に関する正しい知識の普及啓発や出前講座等のリスクコミュニケーションを推進していく必要がある。

問 18 その他、ご意見がございましたら、ご記入ください。（自由記述）

（回答者：90人）

検査体制の継続について

- ・目に見えるものが相手ではないので、なかなか風評や心配は無くならないものだなと思っています。故にこそモニタリングやホールボディカウンタ検査は費用対効果としてはコストではないのかも知れませんが、営利企業ではない行政だからこそできる事業と思いますので、これまで同様の体制での継続を願います。
(40代・男性)
- ・甲状腺検査はいつまでも必要だと感じるが、ホールボディ検査は何か心配なことが無い限り検査の必要性は無いと思います。もし、心配なことがあれば、個人的に検査を受けられれば良いと思います。
(30代・女性)
- ・ある程度の縮小はあっても継続願います。
(70代・男性)
- ・転勤してきた当初は不安があり、独自で調べたりもしましたが、モニタリングポスト以外で駐車場の隅などで、線量が高いホットスポットがあったり、幼児の高さで測ると高くなる場所がありました。
私はその現状を認識して受け入れ、気にせず暮らせていますが、過敏な人は不安になると思います。信頼あるデータや裏付けで、各々が考えて結論を出すことが大切に思います。
気にしすぎは良く無いと思いますが、根に少なからず不安感を持つ人に安心感を与えるため、検査やモニタリングは継続してほしいです。特に食に関する安全性情報は、子育て中の身としては大変重要に思います。美味しいものが多いので、全国での価値をさらに高めるためにも厳格に検査して、一番安全であるということをしてPRして盛り上げてほしいです。
(30代・男性)

放射線について

- ・もう歳も歳なので、日常は、放射線の事とかすっかり忘れてしますし、私は、もういいかなと思っていますが、若い人や、小さいお子さんをお持ちの方々には心配な事と思います。福島にいる人と他県の人との結婚が難しいとの話も聞いています。今だに、福島の食品などは、食べないという話も聞きますし、今が旬の桃なども、いらないと言われたと、今だに聞きます。廃炉も遅れているようですし、その点は特に心配です。また、大きな地震が来たら……と。心配すればキリがありません。
(60代・女性)
- ・環境放射能について、感心が薄れてきていますが、もう一度、原点に戻り考えてみたいと思います。
(50代・男性)
- ・今は何事もなかったかのように暮らしていますが、放射線については色々な説明が錯綜していて、学術的に見て本当は安全なのかどうかいまだに放射線の正しい情報が100%は理解できてないと思います。
(30代・女性)
- ・放射線の影響は、原発が廃炉になった後もさらに長い間続くので、長期にわたってその対策を行っていくことを望みます。県民が安心して生活できるように行政が先頭になって、活動することが大切だと思います。
(50代・女性)

風評払拭について

- ・今でも福島県は危険と思っている人が多いので、完全に風評払拭できるように頑張ってもらいたい。
(10代・男性)
- ・実際のところ生活していて放射能についての不安を感じることは無い。取り組むべきは風評払拭である。他県・他国の人間に云われなき差別を受けることにストレスを感じている。一方、福島県は健康寿命の都道府県比較において下位に甘んじているのも事実。こちらにも隙がある。
(50代・男性)
- ・2011年以降に福島で産まれた子が大人になり社会にでて結婚出産するまで、風評被害はあると思います。昨年、他県に旅行に行くと福島からですって言うだけで、次の言葉はたいへんね～と言われました。今は福島の中で生活している子どもたちが、福島をでて生活する事になった時が心配です。
(30代・女性)

その他

- 放射能って人それぞれ考え方が違うと思う。
わたしみたいに何も気にしない人がいる一方で、郡山に住んでいても自主避難してる人がいる。不安な方には安心してもらえる環境(情報提供や相談窓口の設置)を整えることが行政の役割かと。
(40代・女性)
- 震災当初から様々な放射線の講演会が行われていたが中には、市の教育委員会が後援になっているにも関わらず不安を煽るような人物の物があつたりして正直行政の無知感が市民の不安を大きくさせた部分も少なからずあると思う。不安を抱えている人ばかりを支援するのではなく、元気に頑張っていますと言う情報発信を行なっている人にも目を向けて支援しても良いのではないかと思う。
(30代・女性)
- 初めての原子力災害で不安があるのは否めない事実です。検査が不安を解消する為にも必要だという意見があるのも事実です。
そういった民意があることも念頭において検査体制の継続の是非を問うてもいい時期が近づいているのも事実です。検査をする根拠というものを定義する諮問委員会の様なものを組織してもいいのではないのでしょうか？
また、検査対象者も諸条件で分けるのも案ではないのでしょうか？
この問題はデリケートで、街中では意見を言わずらい面があります。(様々な立場があるので)放射線に不安を感じる市民とそうでない市民双方の意見を収集したうえで数年ぐらいかけて決めることができれば良いと思います。
プラス思考で市民あるいは県民が生活できるように科学的かつ、経済的な解決策を見つけ出すことが大切だと思います。
(40代・男性)